

# 朝原寺跡 2 溝落遺跡

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第15集

倉敷埋蔵文化財センター

2013.3

## 序

本市では、埋蔵文化財行政の拠点施設として、平成5年に埋蔵文化財センターを設置して以来、各種講座やイベントの実施、また発掘調査報告書や年報の刊行など、教育普及事業に力を入れてまいりました。今後も、市民の方に埋蔵文化財の重要性を理解していただくための重要施策として、より一層の取り組みを進めていく所存です。

今回ここに報告いたしますのは、林道浅原線建設に伴い昭和60年度に実施した朝原寺跡発掘調査と、臨港消防署建設に伴い平成6年度に実施した溝落遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。

朝原寺跡の発掘調査につきましては、諸般の都合によりその報告が大幅に遅れておりましたが、この度ようやく刊行することとなりました。小規模な調査であったため、遺跡の全容を解明するには至りませんでした。古代から中世にかけての土器が比較的まとまって出土しており、山岳寺院跡ではまだ類例が少ない時期のものとして注目されます。

溝落遺跡は縄文時代を主とする遺跡で、発掘調査では遺構は確認されませんでした。二次堆積層である遺物包含層からは大量の縄文土器のほか、多数の石器類が出土しました。なかでも、大型のサヌカイト製板状剥片や地元産の石材を使用した石器などは、石材流通を考えるうえで興味深い資料と言えます。

本書が、本市における埋蔵文化財の保護保存に活用されますとともに、調査研究の資料として、また市民の方々が郷土の歴史を理解する一助となりましたら幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にあたりまして、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成25年3月31日

倉敷市教育委員会  
教育長 吉田雄平

# 例 言

1. 本書は、昭和60年度に実施した朝原寺跡、ならびに平成18年度に実施した溝落遺跡の発掘調査報告書である。

2. 各遺跡の調査内容は以下のとおりである。

## 【朝原寺跡】

○所在地 倉敷市浅原字宮ノ下1598番地外4筆 ○調査期間 昭和61年1月9日～2月12日

○担当者 倉敷市教育委員会文化課学芸員 福本 明 同学芸員 鍵谷守秀

## 【溝落遺跡】

○所在地 倉敷市児島塩生字金浜大門2946番3外 ○調査期間 平成18年7月6日～8月31日

○担当者 倉敷埋蔵文化財センター館長 福本 明 同主任 小野雅明 同学芸員 藤原好二

(職名等はいずれも調査当時)

3. 本書の執筆は、第1章および第3章の石器に関する部分を藤原、第2章を鍵谷、第3章を小野が担当し、全体の編集は藤原が行った。

4. 発掘調査における遺構の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は藤原が行った。

5. 出土遺物の整理及び報告書作成は倉敷埋蔵文化財センターで行い、整理にあたっては倉敷埋蔵文化財センター嘱託員 内田智美、杉浦美保、那須玲子の協力を得た。

6. 本書の挿図に使用した高度値は海拔高であり、方位はいずれも磁北である。

7. 本書第2・3図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000地形図を複製、加筆したものである。

8. 発掘調査で出土した遺物及び実測図・写真等はすべて倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

# 目次

## 序

第1章 遺跡の位置と環境	1
第1節 朝原寺跡	1
第2節 溝落遺跡	4
第2章 朝原寺跡	7
第1節 調査に至る経緯と経過	7
1 調査に至る経緯	7
2 調査の経過と概要	7
第2節 第1地点の調査	9
1 A区の概要	9
2 A区の遺構と遺物	9
3 B区の概要	19
4 B区の遺構と遺物	19
第3節 第2地点の調査	23
1 C区の概要	23
2 C区の遺構と遺物	23
3 D区の概要	29
4 D区の遺構と遺物	29
第4節 まとめにかえて	31
第3章 溝落遺跡	32
第1節 調査に至る経緯と経過	32
1 調査に至る経緯	32
2 調査の経過	33
第2節 調査の概要	35
1 調査の概要	35
2 土器	38
3 石器	48
第3節 まとめにかえて	69
1 縄文時代の溝落遺跡について	69
2 縄文土器について	69
3 サヌカイト	70
4 倉敷市玉島に産出する流紋岩の流通	70

# 挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第34図	土坑断面図 (S=1/30)	30
第2図	周辺の遺跡1 (S=1/25,000)	2	第35図	遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)	30
第3図	周辺の遺跡2 (S=1/25,000)	4	第36図	確認調査トレンチ配置図・ 発掘調査区位置図 (S=1/600)	32
第4図	林道浅原線位置図 (S=1/2,500)	7	第37図	調査地位置図 (S=1/7,500)	35
第5図	トレンチ・調査区位置図 (S=1/1,500)	8	第38図	調査区全体図 (S=1/400)	35
第6図	A区西壁断面図 (S=1/60)	9	第39図	土層断面図 (S=1/80)	36
第7図	A区遺構全体図 (S=1/100)	10	第40図	1区ビット1・2・3実測図 (S=1/30)	38
第8図	溝出土土器 (S=1/4)	10	第41図	溝実測図 (S=1/80)・ 出土遺物 (S=1/4)	38
第9図	石列・溝断面図 (S=1/30)	10	第42図	1区出土の土器1 (S=1/3)	39
第10図	土器溜まり検出状況 (S=1/30)	11	第43図	1区出土の土器2 (S=1/3)	40
第11図	土器溜まり出土遺物1 (S=1/4)	12	第44図	1区出土の土器3 (S=1/3)	41
第12図	土器溜まり出土遺物2 (S=1/4)	13	第45図	1区出土の土器4 (S=1/3)	42
第13図	土器溜まり出土遺物3 (S=1/4)	14	第46図	1区出土の土器5 (S=1/3)	43
第14図	土器溜まり出土遺物4 (S=1/4)	15	第47図	1区出土の土器6 (S=1/3)	44
第15図	建物1出土遺物 (S=1/4)	16	第48図	1区出土の土器7 (S=1/3)	45
第16図	掘立柱建物1・2 (S=1/60)	17	第49図	1区出土の土器8 (S=1/3)	46
第17図	包含層出土遺物 (S=1/4)	18	第50図	2区出土の土器 (S=1/3)	47
第18図	B区東壁断面図 (S=1/60)	19	第51図	確認調査出土の石器 (S=2/3)	48
第19図	B区遺構全体図 (S=1/100)	20	第52図	1区出土の石器1 (S=2/3)	49
第20図	土坑2断面図 (S=1/30)	20	第53図	1区出土の石器2 (S=2/3)	50
第21図	土坑2出土遺物 (S=1/4)	20	第54図	1区出土の石器3 (S=2/3)	52
第22図	土坑3断面図 (S=1/30)	21	第55図	1区出土の石器4 (S=2/3)	53
第23図	土坑3出土遺物 (S=1/4)	21	第56図	1区出土の石器5 (S=2/3)	54
第24図	柱穴出土遺物 (S=1/4)	21	第57図	1区出土の石器6 (S=2/3)	55
第25図	包含層出土遺物 (S=1/4)	22	第58図	1区出土の石器7 (S=2/3)	56
第26図	C区南壁・東壁断面図 (S=1/60)	22	第59図	1区出土の石器8 (S=2/3)	57
第27図	C区遺構全体図 (S=1/80)	23	第60図	1区出土の石器9 (S=2/3)	58
第28図	遺構出土遺物 (S=1/4)	23	第61図	1区出土の石器10 (S=2/3)	59
第29図	包含層下層の遺物1 (S=1/4)	24	第62図	1区出土の石器11 (S=2/3)	60
第30図	包含層下層の遺物2 (S=1/4)	26	第63図	1区出土の石器12 (S=2/3)	61
第31図	包含層上層の遺物 (S=1/4)	28	第64図	1区出土の石器13 (S=1/2)	62
第32図	D区南壁断面図 (S=1/60)	29			
第33図	D区遺構全体図 (S=1/80)	30			

第65図	1区出土の石器14 (S=1/2).....	63	第70図	2区出土の石器2 (S=2/3).....	68
第66図	1区出土の石器15 (S=2/3・S=1/2).....	64	第71図	流紋岩産出位置図 (S=1/25,000).....	71
第67図	1区出土の石器16 (S=1/2).....	65	第72図	玉烏産流紋岩を用いた石器 (S=2/3).....	72
第68図	玦状耳飾 (S=2/3).....	66			
第69図	2区出土の石器1 (S=2/3).....	67			

## 図版目次

図版 1	1 調査地遠景 (中央右山裾) 2 A区全景 (西から) 3 A区石列と土器溜まり (西から)	図版 10	1 調査区遠景 (南東から) 2 調査区全景 (東から) 3 溝検出状況 (北から)
図版 2	1 A区土器溜まり検出状況 (南から) 2 B区全景 (南から) 3 B区土坑2断面 (南から)	図版 11	1 遺物出土状況 2 遺物出土状況 3 作業風景
図版 3	1 B区土坑3断面 (南から) 2 B区東壁断面 (西から) 3 C区遺構検出状況 (北東から)	図版 12	溝落遺跡 出土遺物 (1)
図版 4	1 C区南壁断面 (北から) 2 D区遺構検出状況 (西から) 3 D区土坑検出状況	図版 13	溝落遺跡 出土遺物 (2)
図版 5	朝原寺跡 出土遺物 (1)	図版 14	溝落遺跡 出土遺物 (3)
図版 6	朝原寺跡 出土遺物 (2)	図版 15	溝落遺跡 出土遺物 (4)
図版 7	朝原寺跡 出土遺物 (3)	図版 16	溝落遺跡 出土遺物 (5)
図版 8	朝原寺跡 出土遺物 (4)	図版 17	溝落遺跡 出土遺物 (6)
図版 9	朝原寺跡 出土遺物 (5)	図版 18	溝落遺跡 出土遺物 (7)
		図版 19	溝落遺跡 出土遺物 (8)
		図版 20	溝落遺跡 出土遺物 (9)

## 第1章 遺跡の位置と環境

### 第1節 朝原寺跡

朝原寺跡は、倉敷市浅原にある安養寺周辺に所在する中世寺院跡である。

浅原地区は倉敷市内でも最も北部にあたる地区である。倉敷駅からは距離にして約3kmほど、市街地を北東に抜けて市内西岡のあたりから北へ谷筋を入ると浅原地区になる。谷筋はほぼ南北にはしており、北には標高302mの福山がそびえ、西側に標高244mの軽部山も控えている。谷の中を南流する小河川は浅原川と呼ばれ、中世頃までは西岡周辺で海に注いでいたと考えられている。また、安養寺の西側の急な谷筋をさらに北へ向い浅原峠を越えると、現在の総社市清音三因に抜けることもできる。倉敷から総社方面に抜けるルートとしては現在でも、福山の東側にあたる水別峠を越えるルートが一般的であるが、谷幅・急峻さなどから過去においてもそれは同様であったであろう。

周辺の歴史的環境についてみると、主要な遺跡は福山山塊南側の丘陵や山裾部に多く、特に西坂及び生坂地区に分布している。中でも昭和60～62年度にかけて山陽自動車道倉敷インターチェンジの建設に伴って発掘調査が行われた菅生小学校裏山遺跡<sup>(1)</sup>は、旧石器時代から古代にかけての各時代の遺物・遺構が確認されており、この地域で最も重要な遺跡の一つである。これらの遺跡から見ると朝原寺跡はやや奥まった地に所在していると言える。

旧石器時代には瀬戸内海がまだ形成されておらず、市域を南北に貫流した高梁川は水鳥瀬付近で西に流れを変えていたと考えられている。市内には鷺羽山遺跡<sup>(2)</sup>・王子が岳南麓遺跡<sup>(3)</sup>など著名な遺跡が存在するが、その多くは児島南岸に集中しており、市北部の遺跡では、丘陵上で数点のナイフ形石器が採集されているにすぎない。福山山塊の南側では菅生小学校裏山遺跡でナイフ形石器4点が出土している。その他にも菅生小学校裏山山頂遺跡<sup>(4)</sup>、明見谷池西遺跡などからササカイト剥片等が採集されているが、時期などについては不明点が多い。

縄文海進によって瀬戸内海が形成されると、現在の倉敷市街地はもちろん福山山塊の南側まで海が入ってくる。遠浅の海が広がっていたと考えられる市域には、福田貝塚、磯の森貝塚、船元貝塚、羽島貝塚、中津貝塚など、著名な貝塚が数多く形成された<sup>(5)</sup>。浅原川の河口付近にあたる西岡地区にも、西岡貝塚が所在している。縄文中期を中心とした貝塚で、石棒も出土したとされている。この付近は西岡の行願院のある丘陵と菅生小学校の裏山に挟まれて極く小規模な内湾状の地形となっている。貝塚は湾の入口に西側から突出する砂洲上に立地しているようである。また、菅生小学校裏山遺跡から



第1図 遺跡の位置

は晩期の土器および木の実貯蔵穴と考えられる土壌群が検出されている。

弥生時代になると、高梁川や足守川の河口に沖積地が形成され、上東遺跡<sup>(6)</sup>や酒津遺跡<sup>(7)</sup>などの大規模な集落遺跡が出現するようになる。浅原川のある谷筋に弥生時代の遺跡は確認されていないが、菅生小学校裏山遺跡からは弥生時代前期の土器が出土している。また、その北西に広がる扇状地には弥生時代の土器片が表採される原津遺跡が所在しており、比較的大きな集落が存在していたものと考えられる。

古墳時代においても引き続き市域の大部分は海であり、そうしたなか、西坂・生坂のあたりは小さ



- |                |               |               |                   |             |
|----------------|---------------|---------------|-------------------|-------------|
| 1 朝原寺跡         | 2 安養寺裏山経塚群    | 3 酒津遺跡        | 4 酒津城跡            | 5 酒津貝塚      |
| 6 祐安古墳群        | 7 西岡1号墳       | 8 西岡2号墳       | 9 行願院裏山古墳 (西岡3号墳) | 10 西岡4号墳    |
| 11 西岡5号墳       | 12 西岡廃寺       | 13 西岡貝塚       | 14 明見谷池西遺跡        | 15 明見谷池東古墳群 |
| 16 菅生小学校裏山山頂遺跡 | 17 下西坂古墳群     | 18 西坂古墳       | 19 菅生小学校裏山遺跡      | 20 屋敷ノ内古墳   |
| 21 原津遺跡        | 22 原津西遺跡      | 23 笹池東古墳群     | 24 原津古墳群          | 25 岩釜山古墳群   |
| 26 名称未定 (散布地)  | 27 名称未定 (中世墓) | 28 名称未定 (散布地) | 29 福山城跡           | 30 万貫古墳群    |
| 31 堂屋敷古墳群      | 32 峠古墳群       | 33 名称未定 (城跡)  |                   |             |

第2図 周辺の遺跡1 (S=1/25,000)

な湾を形作っていたと考えられている。ここには「原津」と言った地名もあり、古代に至るまで、自然の良港として利用されていたと推定されている。こうした立地を踏まえ、周辺には特色のある遺跡・古墳が確認されている。水別峠の西側にある標高191mの狸岩山山頂には、積石塚を含む狸岩山古墳群<sup>(9)</sup>が形成されている。積石塚は1号墳から3号墳までの3基が確認でき、1号墳と3号墳は竪穴式石室を有している。特に3号墳は標高191mの山頂に位置し、南側の海岸部から水別峠、さらに北の総社平野を一望できる。出土遺物が確認できておらず、明確な時期は不明であるが他地域の積石塚と同様に古墳時代前期に属すると推定されるとともに、その立地が吉備中樞と海上交通路をつなぐものとして注目されている<sup>(9)</sup>。

海上交通路との係わりでさらに注目されるのは菅生小学校裏山遺跡である。朝鮮系の陶質土器・軟質土器が出土しており、古墳時代中期にはここを港として、大陸からの文物が吉備中樞へ運び込まれていたと考えられる。やや西の西岡の丘陵上には全長75m以上、市内最大規模の前方後円墳である行瀬院裏山古墳（西岡3号墳）<sup>(10)</sup>も築かれている。西坂・生坂の港に向かう船を見おろすことができる立地である。周囲には他にも埴輪を持つ古墳が存在し、西岡古墳群を形成している。

後期古墳としては、原津古墳群や狸岩山古墳群などの群集墳が形成される。原津古墳群は10基からなる群集墳であったが、宅地造成によって2基を残して消滅している。また、倉敷インターチェンジの北方山腹に位置する笹池東1号墳<sup>(11)</sup>は、一辺12m程の方墳で、全長4.5mの横穴式石室を持っている。部分的に切石を用い、その隙間に漆喰が残る石室は終末期古墳として重要である。

平安時代に編纂された『和名類聚抄』によると、祐安・西岡・浅原は窪屋郡美和郷、生坂と西坂は窪屋郡阿智郷に比定される。現在の水田地帯は古代においても、「阿智潟」と呼ばれる浅瀬が広がる海であったと考えられている。菅生小学校裏山遺跡で検出された建物跡や遺物から、奈良時代から鎌倉初期にかけてもこの遺跡が地域の中心的な存在の一つであったことが推定されている。奈良時代の遺物には、硯や文字の刻まれた須恵器が含まれ、港に関係する公的施設の存在がうかがえる。平安時代では、緑釉陶器や丹塗土器、銅印などが出土し、有力寺社や貴族の荘園との関連が想定されている。

平安時代には山上仏教が盛んとなり、朝原寺をはじめ、福山寺や西岡庵寺等の寺院が営まれるようになる。朝原寺跡では1980年にも一部発掘調査が行われ、礎石建物や石積基礎が検出されている<sup>(12)</sup>。また、出土した軒先瓦には平安京で出土するものと同文のものがあり、中央との密接な関係もうかがえる。

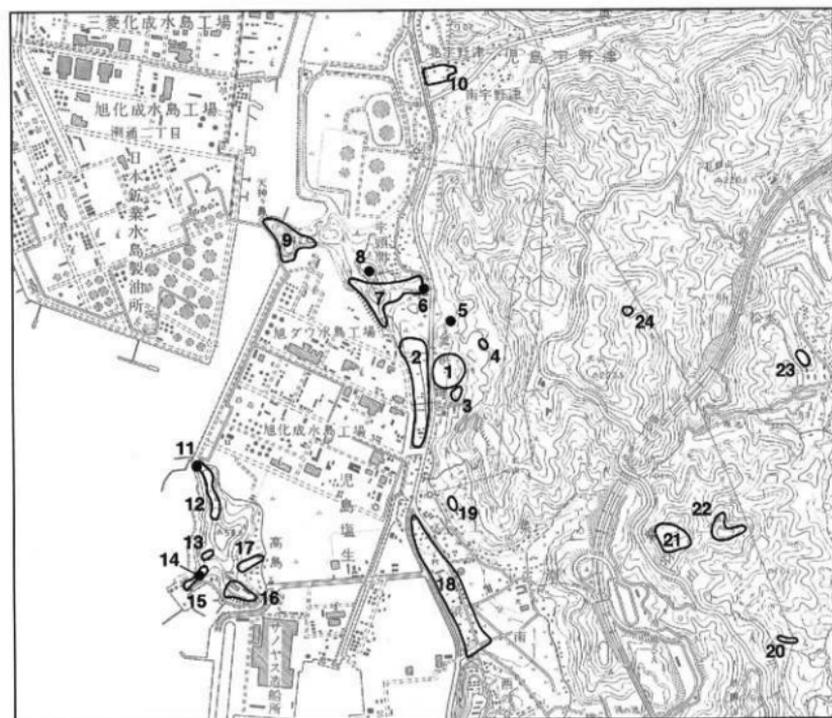
また、安養寺裏山経塚群<sup>(13)</sup>から出土した瓦経には「応徳三年（1086）」「安養寺」という銘が刻まれており、この時期に安養寺が存在していたことがわかる。安養寺は朝原寺として存在した多数の僧坊のなかの一有力寺院でなかったかと推定されており、朝原寺が破却された後の享保二年（1717）にこの地に移転してきている。

これらの山岳寺院はその後の南北朝の戦乱、応仁の乱などによってほとんどが廃絶の道をたどる。建武三年（1336）、城郭に改造されていた福山寺（福山城）は、九州から東上する足利軍によって攻め落とされる。このときの福山合戦で朝原寺も毘沙門堂一字を残して焼失してしまったとされる。その後も朝原寺は存続するが、寛文七年（1667）に池田光政の寺社整理によって破却されてしまうのである<sup>(14)</sup>。

## 第2節 溝落遺跡

溝落遺跡は見島塩生字金浜大岡2959-2外に所在している。平成12年度に実施した分布調査によって、畑地にサヌカイトの剥片や須恵器片が散布することが確認され、新たに遺跡として認識されたものである。

遺跡の所在する見島は縄文時代から近世初期までは島として独立しており、特にその西岸部は海に迫る山と小規模な入江が連続し、農耕に適した平地は限られている。見島西岸のやや南よりに所在する溝落遺跡の立地も例外ではなく、東側に標高223mの大山が控える海沿いの狭小な扇状地形あるいは海岸段丘上に位置している。現在は遺跡の西側の海面は埋め立てられて、工業地帯となっている。



- |            |            |           |              |             |
|------------|------------|-----------|--------------|-------------|
| 1 溝落遺跡     | 2 金浜遺跡     | 3 溝落谷古墳群  | 4 金浜新池古墳群    | 5 金浜古墳      |
| 6 宇頭間古墳    | 7 金浜上遺跡    | 8 天神山古墳   | 9 本太城跡       | 10 宇野津遺跡    |
| 11 高島北の鼻古墳 | 12 高島北の鼻遺跡 | 13 高島西遺跡  | 14 高島エビス鼻1号墳 | 15 高島エビス鼻遺跡 |
| 16 高島南遺跡   | 17 高島東遺跡   | 18 塩生遺跡   | 19 馬乗場古墳群    | 20 ドンド遺跡    |
| 21 八反墓群    | 22 神水城跡    | 23 武歩ノ奥遺跡 | 24 堂の谷廃寺     |             |

第3図 周辺の遺跡2 (S=1/25,000)

児島の海に突き出た岬の上や丘陵上には旧石器時代の遺跡が多く確認されているが、この地域も例外ではない。金浜上遺跡や高島の尾根上の遺跡からはナイフ形石器などが採集されている<sup>(65)</sup>。瀬戸内海のまだ形成されていないこの時代、丘陵上から眼下に広がる草原を見下ろし、狩りを行っていた人々の残したものであろう。

縄文時代になると、瀬戸内海の形成とともに児島北岸部に船元貝塚、磯の森貝塚、彦崎貝塚など多くの貝塚が出現する。児島西岸部ではやや北寄りに福田貝塚が形成されるが、南部には貝塚は確認できない。山間部から多量の土砂を運んでくる高梁川などの河川から遠く、遠浅の海岸が形成されなかったからであろう。ただ、広江・浜遺跡<sup>(66)</sup>や本書で述べる溝落遺跡などでは特に縄文後期の遺物が多く出土しており一定の居住人口があったことは間違いない。

児島西岸部には開けた地形が少ないためもあってか、弥生時代前期の遺跡は多くない。広江・浜遺跡や塩生遺跡で前期の土器が少量出土しているだけである。これらの遺跡は砂洲上に立地しており、その後背地にあたる湿地においていち早く小規模な水田経営が行われたものと推定されている。続く弥生時代中期には、特に児島の内陸部に多くの遺跡が認められるようになる。高梁川や足守川のような沖積平野を形成する河川のない児島では、内陸部の谷間に営まれた水田が集落の基盤となったと考えられる。第3図からは外れるが郷内地区の前山遺跡<sup>(67)</sup>や味野地区の仁伍遺跡<sup>(68)</sup>などはそうした集落遺跡であろう。また、児島は青銅製品の出土で注目されている。種松山出土の銅鐔や由加山から発見された5本の銅剣である。広江・浜遺跡でも銅剣の破片や銅剣が出土している。これら青銅器の集中については、児島が瀬戸内海の海上交通の要所であったことに起因すると考えられている。

弥生時代末期の児島では郷内地区の向木見遺跡<sup>(69)</sup>など特殊器台を伴う墳墓が見られるが、続く古墳時代前期の有力な古墳は知られていない。岬の先端や島嶼部に見られる箱式石棺が前期に属するのではないかと推定されている。高島北の鼻古墳もそうした箱式石棺の一例である。溝落遺跡の北西の海上にある高島の北に延びる岬の先端に所在する長さ1.8m程の箱式石棺であるが、遺物などは不明である。宇頭間の天神山古墳は径10m程の円墳で、埋葬施設は不明であるが、児島では数少ない埴輪を伴う古墳である。これまでは中期の古墳とされていたが、埴輪を検討した結果、後期古墳の可能性が高くなった。横穴式石室導入直前の古墳かもしれない。

溝落遺跡の北の尾根上に存在した金浜古墳<sup>(70)</sup>は土砂採取によって消滅してしまっただが、市内でも古い時期の横穴式石室であった。玄室が幅広く、比較的小ぶりの石材を持ち送りに積むという特徴をもった石室である。児島西岸には他にも高島エビス鼻1号墳・広江南1号墳・古城池南古墳<sup>(71)</sup>など古式の横穴式石室墳があり、やや古い特徴を持った横穴式石室が集中している地域と言える。

続いて溝落古墳群や湾戸古墳群<sup>(72)</sup>、古城池古墳群など臨海性の群集墳も形成されていく。こうした古墳が築かれた背景には、児島西岸に発達した砂洲上で営まれた製塩があったと考えられる。古墳の眼前に位置する海辺には湾戸遺跡や塩生遺跡<sup>(73)</sup>、金浜遺跡などの製塩土器を出土する遺跡がある。塩生遺跡では多量の製塩土器が厚さ30～40cmに堆積した状態で検出されており、その繁栄ぶりが偲ばれる。

また、文字資料からは児島一帯の製塩業が古代から中世にかけても盛んであったことがわかる。平城京から出土した木簡には、児島郡賀茂郷・三家郷・小豆郡から塩が貢納されたことが示されている。

広江・浜遺跡などから出土する器壁の薄い小形の製塩土器は古代のものと考えられており、都に運ばれた塩を生産していたものかもしれない。また、塩生遺跡では内側に粘土を張った土壌や灰跡が検出されており、相伴した土器などから鎌倉時代末頃に営まれた製塩関連の遺構と推定されている。

戦国時代の見島は瀬戸内の要衝に位置することから、常に周辺勢力の争奪的となっていた。本太城跡はその見島西岸から西に向かって突出する岬上に築かれた城である<sup>(24)</sup>。倉敷市内の中世城郭では最も頻繁に古文獻に登場する城の一つでもある。それらによると、毛利氏による見島支配の足がかりとして重視されていたことがわかる。見島西岸における海上交通路を押さえた城であろう。

## 註

- (1) 中野雅美ほか「山陽自動車道建設に伴う発掘調査5」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告81 岡山県教育委員会 1993
- (2) 鎌木義昌「岡山県鷺羽山遺跡調査略報」『石器時代31 石器時代文化研究会 1956
- (3) 藤原好二ほか「王子が岳南麓遺跡」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第3集 倉敷市教育委員会 1995
- (4) 間塚忠彦「高梁川下流域の無土器時代遺跡」『倉敷考古館研究集報第2号』(財)倉敷考古館 1966
- (5) 平井勝「第三章 縄文時代」『岡山県の考古学』(株)吉川弘文館 1987
- (6) 「山陽新幹線建設に伴う調査Ⅱ(岡山以西)」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書第2集 岡山県教育委員会 1974  
【川入・上東】岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16 岡山県教育委員会 1977  
【上東遺跡】岡山県埋蔵文化財発掘調査報告158 岡山県教育委員会 2001
- (7) 間塚忠彦「沼津・水江遺跡」『倉敷考古館研究集報第8号』(財)倉敷考古館 1973
- (8) 物部茂樹「岡山県豊山古墳群中の積石塚」『田中義昭先生退官記念文集 地域に根ざして』  
田中義昭先生退官記念事業会 1999

(9) 註(1)と同じ

- (10) 藤原好二「行願院義山古墳測量調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報4』倉敷埋蔵文化財センター 1997
- (11) 福本明・白石純「漆喰を使用した横穴式石室の一例」『環瀬戸内の考古学—平井勝氏追悼論文集』  
古代吉備研究会 2002

福本明「倉敷市西坂笹池東一号墳の再検討」『倉敷の歴史第13号』倉敷市 2003

- (12) 福本明ほか「浅原寺跡」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第1集 倉敷市教育委員会 1984
- (13) 石田茂作ほか「安養寺瓦経の研究」安養寺瓦経の研究刊行委員会 1963
- (14) 岡山県立博物館編「朝原山安養寺」安養寺 1986
- (15) 註(7)と同じ
- (16) 間塚忠彦ほか「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報第14号』(財)倉敷考古館 1979
- (17) 鎌木義昌「岡山県那内村前山の弥生式遺跡」『吉備考古80』吉備考古学会 1950
- (18) 山本要一「倉敷市仁佐遺跡」『倉敷考古館研究集報第8号』(財)倉敷考古館 1973
- (19) 高橋謙「見島市向木見遺跡発見の二、三の遺物」『考古学手帳12』1960
- (20) 間塚忠彦ほか「金浜古墳」『倉敷考古館研究集報第14号』(財)倉敷考古館 1979
- (21) 鏡谷守秀ほか「古城池南古墳」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第9集 倉敷埋蔵文化財センター 2000
- (22) 片岡弘平ほか「溝ノ7号墳」倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第7集 倉敷埋蔵文化財センター 1998
- (23) 小野雅明「塩生遺跡発掘調査報告」『倉敷埋蔵文化財センター年報1』倉敷埋蔵文化財センター 1994
- (24) 『岡山県文化財総合調査報告(倉敷市)』岡山県文化財保護協会 1989

## 参考文献

『新修倉敷市史 第一巻 考古』倉敷市 1996

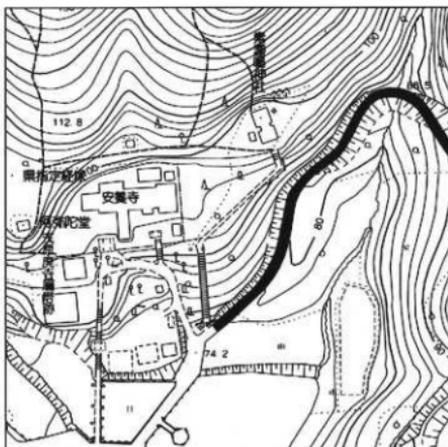
『新修倉敷市史 第二巻 古代・中世』倉敷市 1999

## 第2章 朝原寺跡

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### 1 調査に至る経緯

昭和60年11月、農林水産部農政課より、朝原寺跡の範囲内において林道浅原線の建設計画があり、これに係る遺跡の取り扱ひについての照会があった。朝原寺跡は、倉敷市浅原にある安養寺の境内を中心とする、平安～中世にかけての山岳寺院跡として知られ、昭和55年に実施した庫裏改築工事に伴う発掘調査では、小規模な面積にもかかわらず、軒瓦を含む大量の瓦や古代から中世にかけての遺物が出土している<sup>1)</sup>。計画された浅原線は、安養寺南側の平坦地から北東方向へ向かって山谷を蛇行しながら進む幅約5mの林道で、その最初の部分である約150mの区間が遺跡の範囲に入っていた。こうした状況を踏まえ、まず当該区域内にお



第4図 林道浅原線位置図 (S=1/2,500)

ける遺跡の存在状況を明らかにするため、トレンチによる確認調査を実施したところ、現在桃畑となっている平坦地を中心に、主として中世の遺構が残っていることが判明した。この結果を受けて農政課と保存のための協議を行ったが、林道建設に対する地元住民の要望が強いことや地形の関係から計画の変更は困難であることなどから、やむを得ず遺構が残存する部分について全面発掘調査を行い、記録保存を行うこととなった。

#### 2 調査の経過と概要

昭和60年11月29日から12月4日にかけて、トレンチによる事前の確認調査を行った。トレンチの規模は2m×2mとし、遺跡の範囲にかかる路線予定区域内の平坦地を中心に8カ所設定した。調査の結果、トレンチ2・3及び6からは、平安～中世にかけての遺物とともに柱穴、溝、土坑等の遺構が検出された。一方、他のトレンチからは遺構が検出されず、大量の瓦片や中世土器などの遺物が出土したものの、それらは主として耕作土及び流土中に含まれるもので、調査区上方の平坦地となっている部分からの流れ込みである可能性が強いと考えられた。こうした確認調査の結果を踏まえ、トレンチ2・3が位置する平坦地（第1地点）とトレンチ6が位置する平坦地（第2地点）の合わせて約210m<sup>2</sup>について、全面発掘調査を行うこととなった。

第1地点は林道の起点から北東へ50m程の地点で、調査面積は約130m<sup>2</sup>である。排土置き場の都合

上南北に二分し、南側をA区、北側をB区として、昭和61年1月9日から1月31日にかけて発掘調査を実施した。

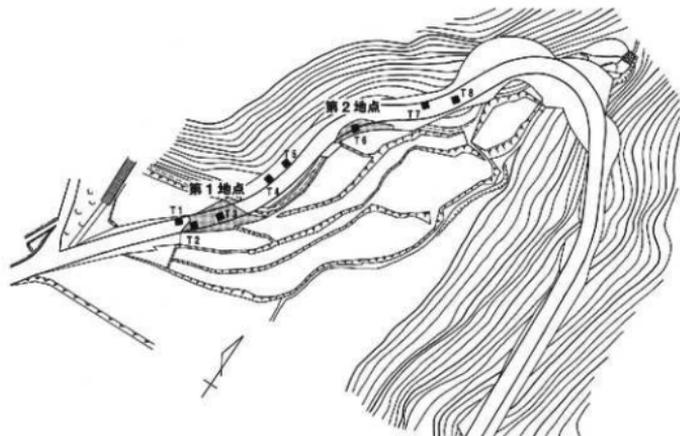
A区では、北端でほぼ東西に延びる石列とこれに平行する細い溝が検出された。また、石列西半部の南側に接して土器溜まりが検出され、炭や灰に混じて多量の土器器柄や小皿などが出土した。石列の南側のほぼ全面からは90基を越える柱穴が検出され、柱痕が残存するものも多数あったが、建物としては2×4間以上のもの1棟と2×3間以上のもの1棟が想定できた。

B区はA区より一段上がった平坦面で、山寄りの北側部分では、耕作土下は地山が削平され岩盤となっていた。遺構としては、調査区南半を中心として柱穴群と土坑群が検出された。確認された柱穴は70基を越えるが、建物としてのまとまりをもつものは認められなかった。また、土坑は調査区の南端で5基が検出されたが、その内2基には人頭大の角礫が数個入っていた。遺物としては土師器を中心に瓦片や須恵器等が出土したが、A区に比べその数は概して少なかった。

第2地点は第1地点の北約50m、素盞鳴神社の下方にあたり、調査区の面積は約80㎡である。第1地点と同様、排土置き場の関係から調査区を南北に二分し、南側をC区、北側をD区として、昭和61年1月31日から2月12日にかけて調査を実施した。

C区では、山寄りの西半部は表土下約20cmで岩盤が露出し、東に向かって急激に落ち込んだ後、徐々に低くなっていた。東半部の岩盤直上の包含層からは、内面黒色土器柄を含む土師器が多数出土した。この包含層上には厚さ約40cmの茶褐色系の土が堆積しており、この土層をベースに中世の溝や土坑が確認されたが、その数は少なかった。

D区においても、岩盤は東に向かって落ち込んでおり、この岩盤直上の包含層から中世の遺物が出土した。C区同様、この包含層上には茶褐色系の土が認められ、この面から溝や土坑、柱穴などが検出された。



第5図 トレンチ・調査区位置図 (S=1/1,500)

## 調査日誌抄

昭和60年11月29日	確認調査開始。	1月30日	B区全体写真。土坑内遺物取り上げ。
11月30日	トレンチ1・4・5終了。	1月31日	東壁断面実測。C区調査開始。
12月2日	トレンチ2・3終了。	2月4日	遺構検出、掘下げ開始。
12月4日	トレンチ6～8終了。	2月6日	包含層掘下げ開始。
昭和61年 1月9日	全面調査開始。A区表土剥ぎ。	2月8日	C区全体写真。南壁・東壁断面実測。D区調査開始。
1月10日	溝・石列・土器溜まり検出。	2月10日	遺構検出、掘下げ開始。
1月14日	柱穴群検出、掘下げ開始。	2月11日	南壁断面実測。遺構平板測量。
1月24日	A区全体写真。西壁断面実測。 B区調査開始。	2月12日	D区全体写真。機材搬出。
1月27日	柱穴群、土坑群掘下げ開始。		

## 第2節 第1地点の調査

## 1 A区の概要

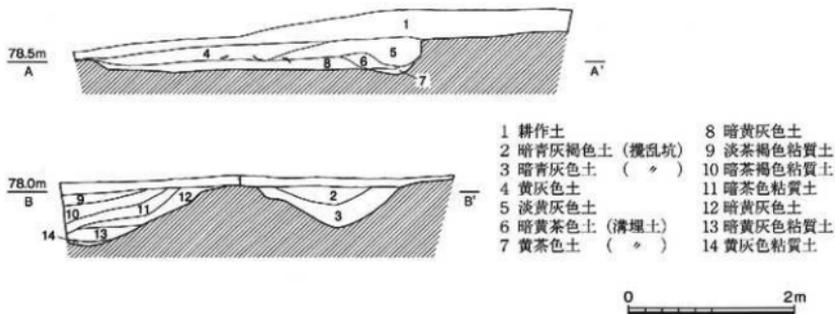
A区は第1地点の南半部で、ほぼ三角形の調査区であったが、遺構の検出状況により一部を西側に拡張している。現況は、北から南にかけて緩やかに傾斜する桃畑となっている。

調査区の層序は、北端部では耕作土の直下で地山となっているが、一段低い中央部では地山上に厚さ30cm程度の遺物包含層がみられ、古代後期～中世にかけての遺物が多く含まれていた。調査区の南端部では南に向けて地山が急激に落ち込んでおり、その最深处付近からは奈良時代末頃の遺物が出土している。検出された遺構としては、石列、溝、土器溜まり、掘立柱建物、柱穴群などがあるが、そのほとんどが地山面から検出されたものである。

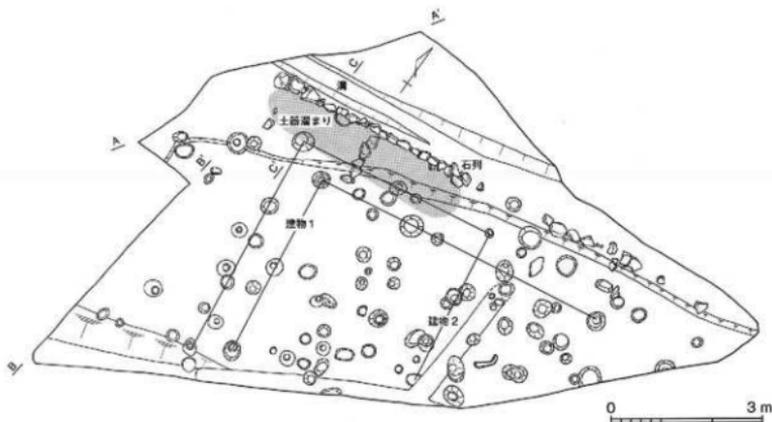
## 2 A区の遺構と遺物

## (1) 石列と溝

調査区の北端で、ほぼ東西方向に長さ10mにわたって延びる石列を検出した。石材の大きさにはややばらつきがあるものの、同様の花崗岩の角礫を用い平らな面が上に向くように設置されていた。



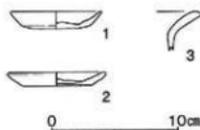
第6図 A区西壁断面図 (S=1/60)



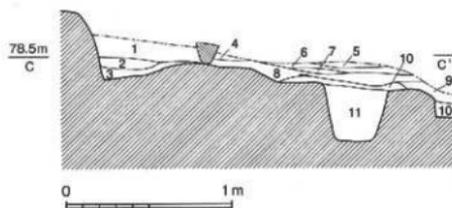
第7図 A区遺構全体図 (S=1/100)

石列西半部の残存状況は良好で、一直線状にきれいに並んでいるが、東半部では石材が一部消失していたり、ラインに少し乱れが認められる。また、石列西半部のほぼ中央あたりから、同様の石材5個が直角になるように南北方向に並べられていた。遺構図をよく観察すると、この直角の石列から西へ約2mの地点と東へ4m及び6mの地点にも単体ではあるが石材が存在し、また、東へ2mの地点では、東西石列の南に接してラインを少し乱すように石材1個が認められることから、約2m間隔で南北方向の石列が取り付いていた可能性も考えられる。

東西石列の北側に接して、平行に延びる幅約50cmの溝を検出した。溝は一段高い北側から掘り込んでいるため、北側からの深さは約40cmと深い。石列のある南側からの深さは、最も深い西壁付近でも約10cmと浅い。そして東に行くにつれてさらに浅くなり、西壁から約3.5mの地点で南側の掘り方は消滅している。溝中からは、わずかではあるが中世の小皿(1・2)や土鍋片(3)等の土器が出土している。



第8図 溝出土土器 (S=1/4)



- |               |                    |
|---------------|--------------------|
| 1 暗黄灰色土       | 7 黄灰色混地山土          |
| 2 黄灰色混礫土(溝埋土) | 8 黄灰色混炭灰土          |
| 3 暗黄灰色混礫土(*)  | 9 黄灰色土             |
| 4 暗黄灰色土       | 10 暗黄灰色土           |
| 5 黄灰色混地山土     | 11 暗黄灰色土<br>(柱穴埋土) |
| 6 炭灰層         |                    |

第9図 石列・溝断面図 (S=1/30)

## (2) 土器溜まり

東西に延びる石列西半部の南側に接して、東西約4.5m、南北約0.9mの範囲で遺物の集中が確認された。この土器溜まりの東端と、残存状態のよい石列の東端がほぼ同じ位置であることから、本来はさらに東へ延びていた可能性もある。土器溜まりは炭や灰を多く含む土（第9図第6層～第8層）に混じって検出されたが、この炭灰層は土器溜まりの西半では南に少し膨らむように広がっていた。出土した遺物の中には2次焼成を受けたものも認められたが、土器溜まりと接する石列の石材や周囲の土に火を受けた痕跡がないことから、他の場所で焼けたものをこの場所に廃棄した可能性が高い。

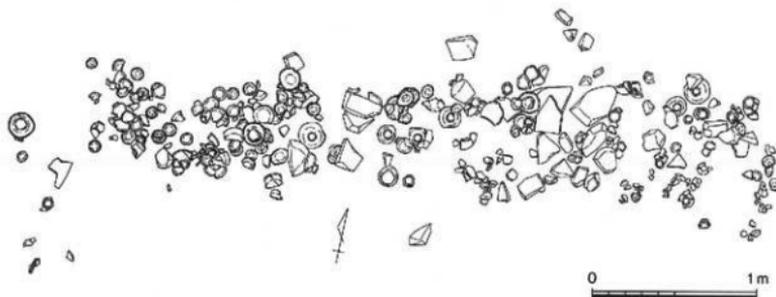
出土した遺物としては、土師器の碗・杯・皿のほか瓦や須恵器などがあり、整理用コンテナで6箱程度である。

4～18は高台付の碗で、19～25についても底部は不明であるが、その形態的特徴から輪高台を持つ碗になると思われる。概して器表面が荒れたものが多く、細かな調整が確認できない個体も少なくない。口縁部の直径が復元できたもののうち、15cm以上のものが2個体で、残りは14cm台が8個体、13cm台が8個体、13cm未満のものが2個体と、13～14cm台のものが多い。また、器高のわかる15個体のうち、その高さが5cmを越えるものが2個体、4cm台のもの10個体、3cm台のもの3個体と、4cm台のものが多い。口径については完形に接合できた個体がなく、残存率が1/4以上のものも多くはないため、復元数値にやや正確性を欠く面もあるが、全体的なプロポーシオンとしては口径に比して器高が低く、浅い感じを呈するものが多いようである。

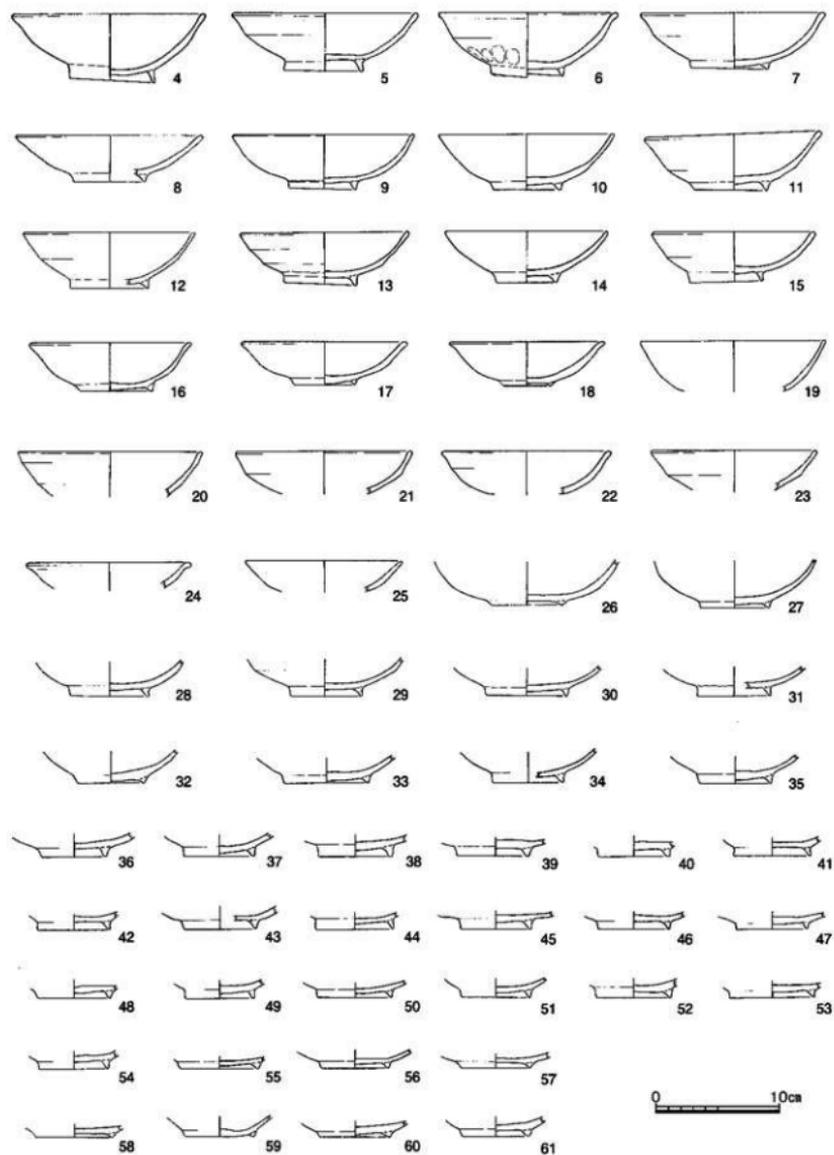
碗の形態としては、緩やかなカーブをもって内湾するものがほとんどであるが、8のようにほぼ直線的にひらき、皿に似た形態のものもある。口縁端部はどれも丸く収めるが、6・24では丸く肥厚させた端部を折り曲げるように外反させて、玉縁状としている。5・11・13には、内面に赤褐色を呈する重ね焼きの痕跡が認められる。

26～61は高台付碗の体部と底部である。高台径としては、最大のもの(33・58)が6.9cm、最小のもの(36)が5.3cmである。全体的には高台径が5.5～5.9cmのものが21個体あり、全体の約1/3を占める。

高台の形状は逆三角形のものが多いが、逆台形を呈するもの(36～40・49)や、同じ逆三角形でも端部を外反させ、しっかり踏んばるタイプ(28・41)などがある。



第10図 土器溜まり検出状況 (S=1/30)

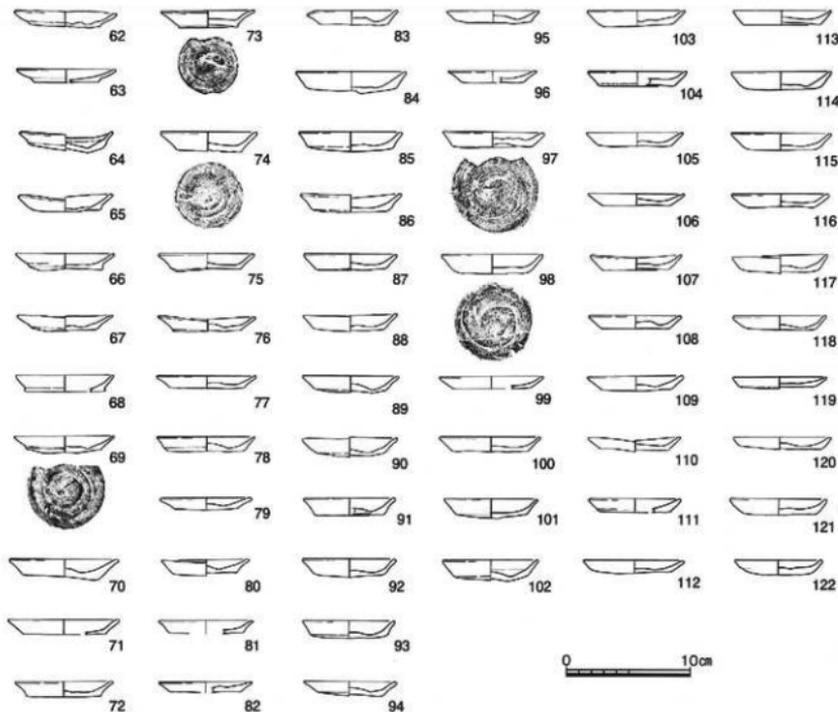


第11図 土器溜まり出土遺物1 (S=1/4)

62～122は小皿である。椀と同様器表面が荒れてもろくなったものもみられるが、完形で残存状態が良いものも10個体以上ある。色調は白色系を呈するものが多いが、黄橙色系のものも1/3程度ある。焼けひずみ等による変形が認められるものも少なくないため、口径や器高の比較はやや正確さを欠くと思われるが、おおむね、口径としては7.5～7.7cm、器高としては1.2～1.4cm程度の値を示すものが多いようである。

器形としては、底部から比較的シャープな屈曲をもって外反し口縁に至るもの(70～85)、底部からやや丸みを帯びた屈曲をもって立ち上がり、口縁部が外反するもの(86～96)、口縁部がほぼ直線的に延びるもの(97～119)、口縁部が内湾気味に立ち上がるもの(120～122)などがある。また、62～69は、円盤高台状に肥厚させた底部を有している。第12図に拓本を掲載した以外にも、底部にヘラ切り痕が認められるものは多く、その数は掲載土器の半数近くのはるが、糸切り痕を残す個体は確認できなかった。

123～129は杯である。いずれも器表面の摩滅が激しく、細かな調整については不明であるが、



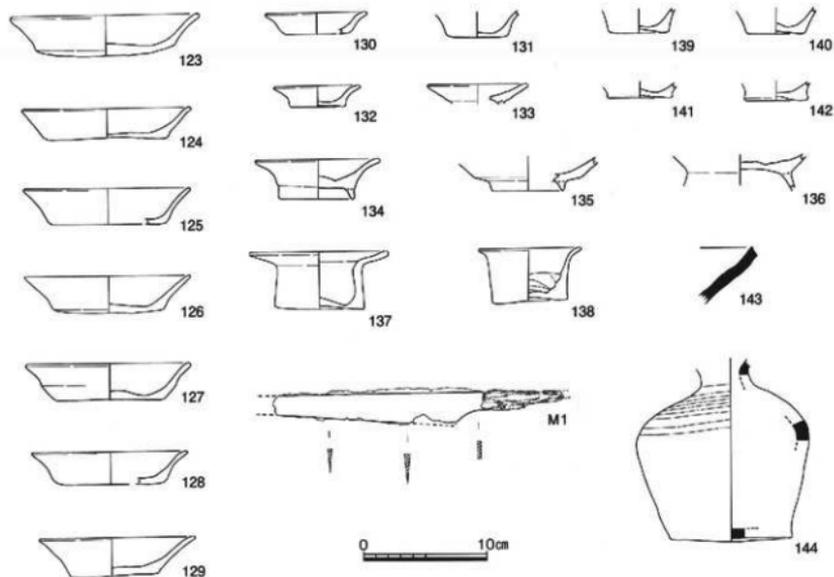
第12図 土器溜まり出土遺物2 (S=1/4)

126・127については底部にヘラ切りの痕跡がわずかに認められる。色調は灰白色系の明るいものが多いが、123は2次焼成により褐灰色を呈している。器形は、底部から緩やかに外反しながら立ち上がるものが多いが、ほぼ直線的に立ち上がるもの(124)もある。口径15.3cm、器高3.4cmを測る123を除けば、他は口径12.3～13.6cm、器高2.7～3.0cmの範囲内に収まる。

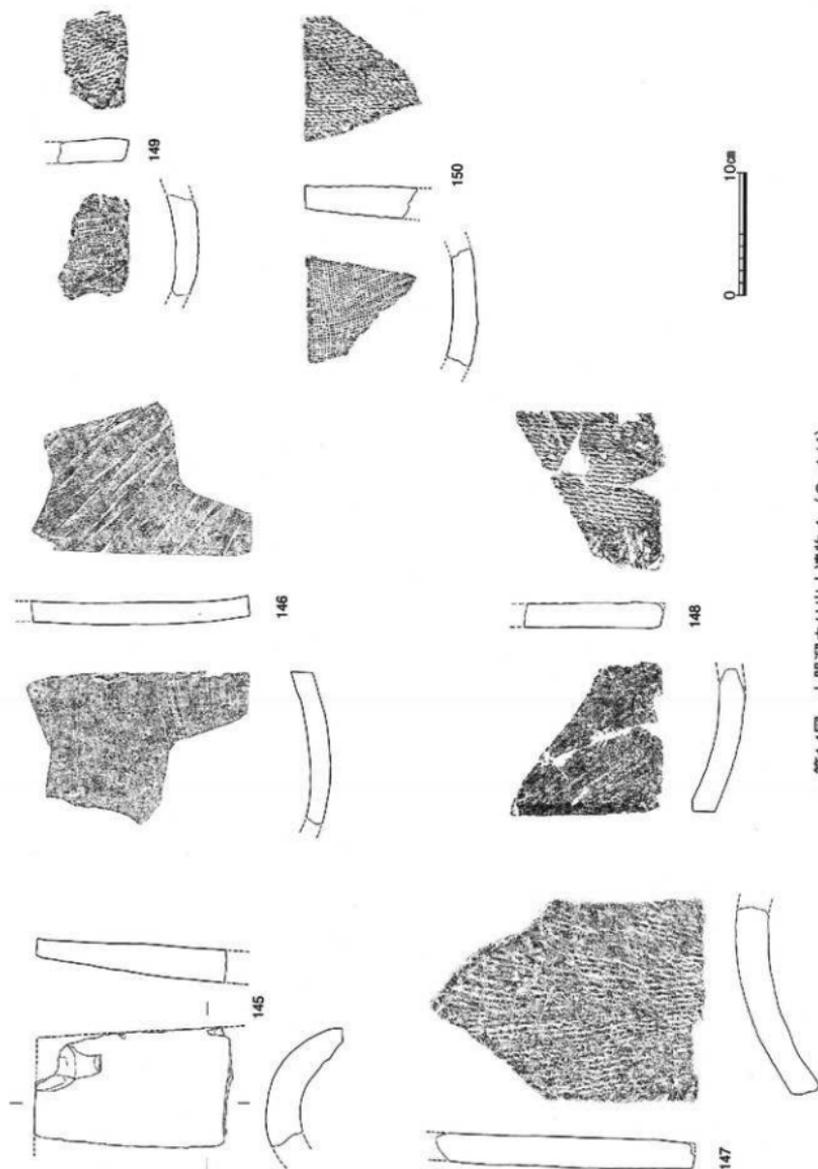
130～132は小型の皿である。底径に比して器高が高い点で、いわゆる土師質小皿とは異なる。杯と同様、器壁の摩滅が著しく調整については不明であるが、131・132の底部にはヘラ切りの痕跡が認められる。

133～136は高台付皿である。133は直線状にひろく体部を有する小型の皿で、高台部を欠いている。内外面に丁寧なナデを施し、焼成は良好でにぶい黄橙色を呈する。134は、口縁部が大きく外反する皿にはほぼ垂直方向に延びる高台が付く。胎土には1mm程度の砂粒を多く含み、焼成はやや不良である。135は体部上半を欠くが、わずかに屈曲して浅く開く皿になると思われ、似たタイプのものがC区区の包含層より出土している。136は大高台を有する大型の皿の底部と思われる。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良好である。

137・138は脚台である。137は、垂直に立ち上がる胴部から「く」の字状に強く折れ曲がり、直線的に大きく広がる口縁部を持つ。摩滅のため調整は不明瞭であるが、底部はヘラ切り後ナデにより仕上げているようである。138もほぼ垂直に立ち上がる胴部を有するが、口縁部はわずかに折り返した



第13図 土器溜まり出土遺物3 (S=1/4)



第14図 土器溜まり出土遺物4 (S=1/4)

だけである。内面下半部には、ヘラ状工具により強く掻き取った痕が明瞭に残っている。底部外面中央にヘラ起しの跡が認められる。

139～142は底部のみの破片であるが、底外面には138と同様のヘラ起しの痕跡が確認でき、形状としては138の器高を少し低くしたタイプになると思われる。

143・144は須恵器のこね鉢と壺である。144は細く短い頸をもつ壺で、肩部より上の胴部上半には、布状のものを用いて指先もしくは細いヘラ状の工具により強く押しなでた痕が何重にもみられる。全体的に器表面に細かな凹凸が目立ち、また、肩から頸にかけて残るナデの幅が一定でないことから、低速な回転台を使用し、粘土紐の巻上げにより成形されたものと考えられる。

M1は刀子である。刃部と茎部の両先端を欠くが、残存長約23cmの大型のものである。断面が長三角形を呈する刃部の最大幅は復元値で約2.6cmで、断面が長方形の茎部には木質が残存している。

145～150は瓦で、軒先瓦は出土していない。145は丸瓦で、凹面には布目痕が残り凸面は縦方向のナデにより仕上げる。146～150は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄目を残すものが多いが、146の凸面には無文の叩き目がみられる。

土器溜まりから出土した土器は、その形態の特徴からおおむね2時期に分けることができる。すなわち、第13図に掲載した一群については11世紀初め頃、第11図及び第12図の一群については若干の幅がみとめられるものの、12世紀末を中心とする時期と思われる。

### (3) 柱穴と掘立柱建物

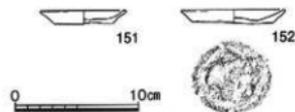
柱穴は、東西に延びる石列の南側で大小合わせて90基あまりが検出されている。これらはすべて地山もしくは地山直上層の面で確認されており、調査区の特定のエリアに集中することはないが、東半にやや多いようである。柱痕が確認できたものは全体の約1/4程度あり土器等も出土したが、細片が多く図示できるものは少なかった。

検出された柱穴のうち、建物としてのまとまりが認められたものが2棟あった。

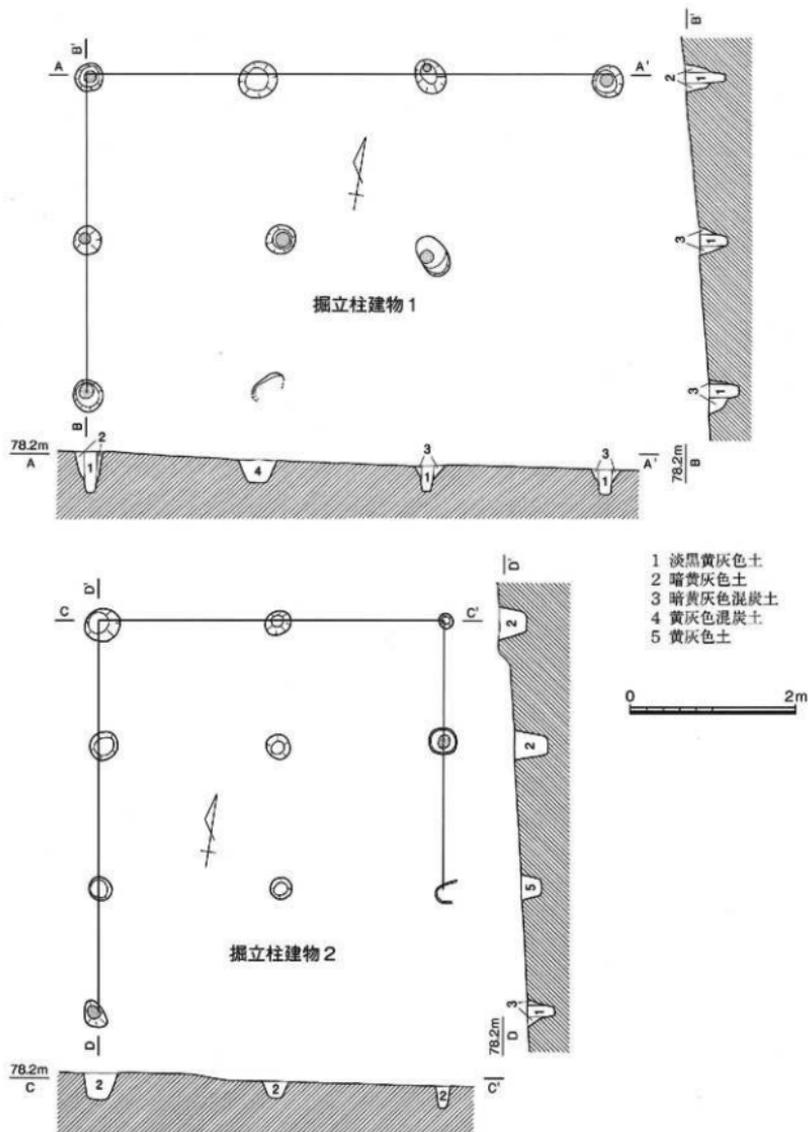
掘立柱建物1は、現状で東西3間南北2間の総柱建物であるが、調査区外の東及び南方向へさらに拡大する可能性がある。柱穴には柱通りやや悪いものもあるが、柱痕を持っているものも多く建物に伴うものとした。出土遺物としては中世の小皿が2点ある。152は器表面の摩滅が著しいが、完形形で底部にヘラ切り痕が認められる。

掘立柱建物2は、建物1とほぼ重なり合う位置で検出した。現状で東西2間南北3間の総柱建物であるが、建物1と同様、南方向に調査区外へさらに拡大する可能性がある。柱痕を伴う柱穴は1基のみで、深さも総じて浅い。時期のわかる出土遺物はないが、建物2の柱穴はすべて地山面からの検出であるのに対し、建物1の柱穴には地山直上層から検出されたものがいくつかあることから、建物1に先行するものと考えられる。また、建物1と建物2の柱の方向がほぼ一致していることから、建物2からそれほど時期を空けることなく建物1が建てられたものと思われる。

なお、先に記した石列の東西ラインもこれら建物の東西ラインにほぼ平行しており、この石列は建物に伴う可能性が強いが、南北に延びる石列の先端が建物2の内部にまで入っ



第15図 建物1出土遺物 (S=1/4)



第16図 振立柱建物1・2 (S=1/60)

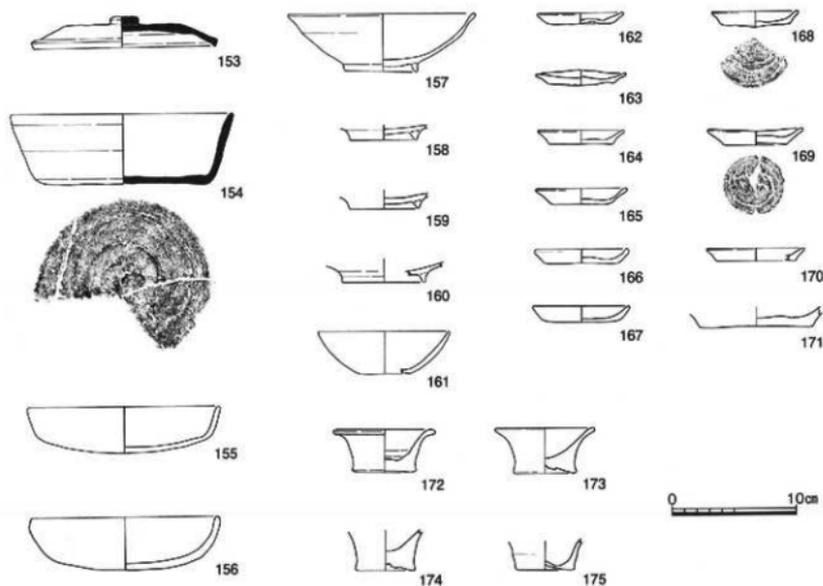
てきているものの建物1にまでは及んでいないことから、石列自体は建物1に伴うと考えたい。また、石列の西半部で確認された土器溜まりも、その範囲は建物2の柱穴上に及んでいるものの建物1までは及ばず、柱列の北辺付近に沿って東西に広がっていることを考えれば、建物1の時期に形成された可能性が強い。

#### (4) 包含層出土遺物(第17図、図版6・7)

掲載したのは、153～156が調査区南端部の落ち込み(第6図13層)から、157～175が調査区平坦部の遺物包含層(第6図4・8層)から出土した土器である。

153・154は、須恵器の杯蓋と杯身である。153は口径15.0cm、器高2.5cmを測り、扁平な柱状のつまみが付く。平らな天井部からゆるく屈曲して口縁部に至り、その先端をわずかに肥厚させている。焼成はやや不良で灰白色を呈し、器表面の磨滅が目立つ。154は、口径18.0cm、底径14.0cm、器高5.8cmを測る。平らな底部から緩やかに屈曲して直線的に立ち上がり、口縁端部はそのまま丸く収めている。焼成はやや不良で灰白色を呈し、器表面の磨滅が激しいが、底部外面には回転ヘラ切りの痕跡が認められる。153と154は、胎土、焼成、色調および器表面の磨滅具合が酷似しており、口径はやや異なるもののセットになると思われる。

155と156は土師器の杯である。155は、やや丸みを帯びた底部からゆるく屈曲して口縁部に至り、その先端は丸く収めている。内外面に丹塗りを施し、外面の調整は磨滅により不明であるが、内面は



第17図 包含層出土遺物 (S=1/4)

丁寧なナデにより仕上げている。口径は15.6cmを測る。156は、やや丸みを持つ底部からゆるく内湾しながら立ち上がる口縁部を有する。口径は15.0cmを測り、焼成はやや不良で、にぶい黄橙色を呈する。なお、155と156の口縁部はどちらも小片のため、口径については若干前後する可能性がある。

157～161は碗である。157は口径15.0cmを測る高台付の浅い碗で、器表面の磨減が激しい。160の高台は径6.8cmを測り、断面は逆台形形で丁寧な作りである。161は高台の付かない碗で、底部外面をわずかに凹ませている。

162～171は小皿で、底部にはヘラ切りの痕を残すものが多い。171は口縁端部を欠くが、外反する低い立ち上がりを持つやや大きめの皿と思われ、底径は9.2cmを測る。

172～175は脚台である。いずれも底部から垂直近く立ち上がる胴部と外反する口縁部を有する。内面は、173・174がゆるやかな曲線を示すのに対し、172は胴部下半に強いナデを行っており、底部と体部の境が明瞭である。底部外面は、172がヘラ切り後ナデ仕上げであるが、173・174の中心部にはヘラ起しの跡が認められる。175は口縁部を欠き器表面の磨減が著しいが、底部外面に押圧による凹みが認められる。

これら包含層出土遺物の時期については、須恵器の杯蓋と杯身及び土師器の杯が8世紀末頃、その他の土器は、171に古い要素が認められるもの、おおむね13世紀後半から14世紀初頭頃と思われる。

### 3 B区の概要

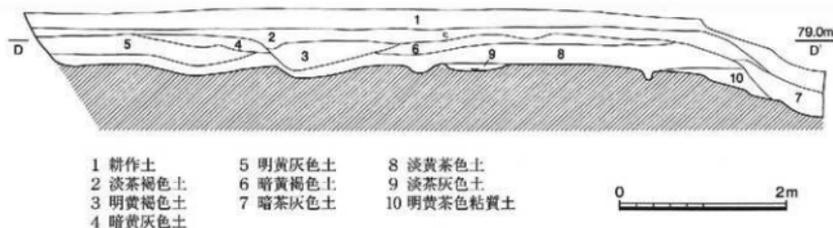
B区は第1地点の北半、A区の北側にあたり、一段上がった平坦面である。排土をA区に移動して調査を行ったため、A区とB区の境は正確には一致していない。

調査区の地形は、北から南に向けて緩やかに傾斜しており、最も高い山側では、耕作土の下は岩盤となっていた。やや地形が低くなる調査区南半を中心として、地山直上で中世の遺物包含層（第18図8層）が確認されたが、遺物の密度はそれほど高くなかった。検出された遺構としては、土坑と柱穴群があるが、すべて地山面で確認されたものである。

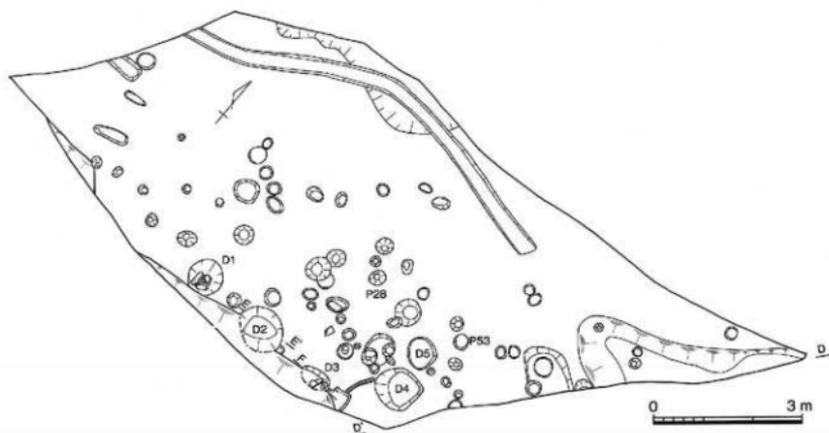
### 4 B区の遺構と遺物

#### (1) 土坑

調査区中央部の南端付近で、5基の土坑を検出した。土坑は、南端の段により一部破壊を受けていたものもあるが、おおむね径70～100cm、深さ30～50cm程度の大きさで、底は平らのものが多かった。また、土坑1と土坑3には人頭大の角礫が数個入っていた。



第18図 B区東壁断面図 (S=1/60)



第19図 B区遺構全体図 (S=1/100)

土坑2

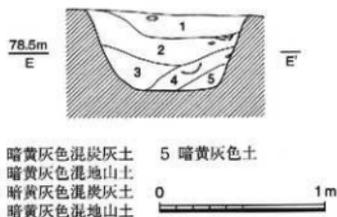
段により南半部を削平されているが、現状で径約95cm、深さ約45cmを測る。埋土は、炭や灰混じりの土層と地山である花崗岩バイラン土混じりの層に大別される。遺物はほぼ全層から出土したが、図化できたのは7点である。

176～178は小皿である。いずれも底部にヘラ切り痕を残す完形品で、口径は7.5～8.0cm、器高は1.3～1.5cmである。

179・180は皿である。一般的な小皿に比べて外反する立ち上がりが大きく、器高はどちらも2.4cmを測る。179は、底部内面の中心に、ヘラ状工具により丸く掻き取ることでできた、直径2cm、高さ5mm程度の円盤状の突出がみられる。底部外面には、ヘラ切り後にナデを施している。180は器表面の摩滅が激しいが、ほぼ179と同様の作りと思われる。

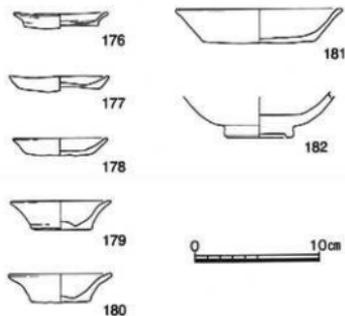
181は平らな底部から直線的に立ち上がる体部を持つ杯で、口径は13.6cmを測る。器壁の摩滅が激しく調整は明らかではないが、底部はヘラ切りようである。

182は青磁片で体部上半を欠くが、器形は椀になるとされる。内面には花びらと思われる文様の一部が



- 1 暗黄灰色混炭灰土
- 2 暗黄灰色混地山土
- 3 暗黄灰色混炭灰土
- 4 暗黄灰色混地山土
- 5 暗黄灰色土

第20図 土坑2断面図 (S=1/30)



第21図 土坑2出土遺物 (S=1/4)

確認できる。円柱状の底部を削り出して、幅7mm程度の輪高台としている。

これらの土器の特徴から、土坑2の時期は13世紀前半頃と思われる。

### 土坑3

土坑2の東70cmに位置し、段により大きく破壊を受けているが、現状で長さ約75cm、深さ約45cmを測る。埋土には炭や灰が多く含まれているが、遺物はそれほど多くなかった。また、土坑の底近くで、人頭大の角礫3個と河原石1個がかたまった状態で出土した。

図化できたのは碗2点である。183は口径9.4cm、高さ3.2cmを測る小型の碗で、内外面には2次焼成による黒斑が認められる。小さめの平底から内湾しながら立ち上がり、その先端を丸く収めている。184も無高台の碗で、底部外面の指頭圧により内面に浅いヘソ状の隆起がみられる。

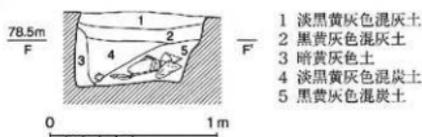
これらの土器の特徴から、土坑3の時期は13世紀末～14世紀初頭と思われる。

### (2) 柱穴

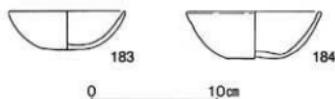
調査区の南東部を中心として、全部で70基を越える柱穴が検出されたが、柱痕が確認できたものは3基のみで、建物としてまとまりを持つものも確認できなかった。埋土に炭や灰が混じるものも多かったが、土器の出土は概して少なく、掲載できたのは6点のみである。

185・186は柱穴28から出土したものである。185は浅い碗で、断面逆三角形のやや開いた高台が付く。体部の中ほどには、粘土紐を継ぎ足し口縁部を成形した痕が緩い稜となって巡っている。186は東播系の須恵器で、欠損のため明らかでないが、片口の鉢になると思われる。口径24.3cm、底径8.6cm、器高8.8cmを測る。口縁端部は大きく上下に肥厚され、幅約1.8cmの平坦面を形成している。体部外面には成形時の凹凸が目立つが、内面は丁寧なヨコナデにより仕上げている。底外面には糸切りの痕が残る。これらの土器は、13世紀末～14世紀初頭に属すると思われる。

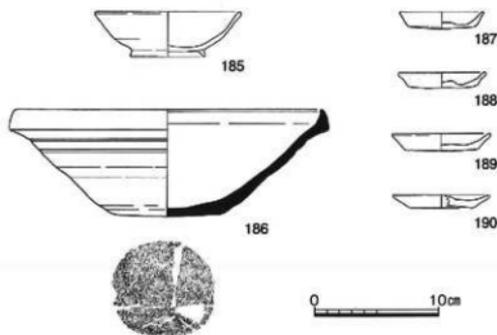
187～190は柱穴53から出土した小皿である。いずれもほぼ平らな底部から斜め上方へ立ち上がり、その端部を丸く収めている。188は、底部成形時の核となる円盤状粘土の盛



第22図 土坑3 断面図 (S=1/30)



第23図 土坑3 出土遺物 (S=1/4)



第24図 柱穴出土遺物 (S=1/4)

り上がりが顕著で、189の底部には板目痕が残っている。190の立ち上がりの角度は非常に浅く、身の深さは5mm程度である。これらの出土遺物から、本遺構の時期は柱穴2とほぼ同じと考えて差しつかえないと思われる。

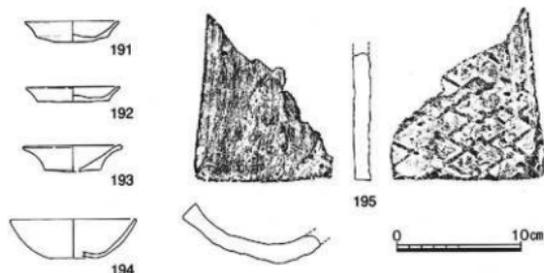
(3) 包含層出土遺物

地山直上層である淡黄茶色土を遺物包含層としたが、全体的に遺物の密度は低く、細片を除けば図化できる遺物は少なかった。出土した土器は、おおむね13世紀～14世紀初頭に属すると思われる。

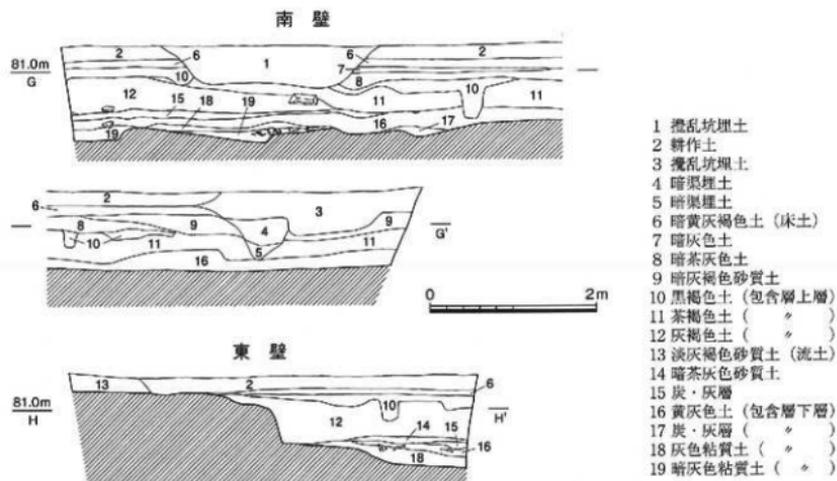
191～193は皿である。191・192は小皿で、どちらも口径7.6cmを測る。191の底外面は、核となる円盤状粘土が少し突出しており、その境が明瞭である。192は一部摩滅により確認できないが、内外面に丹塗りがされているようである。

194は無高台の碗で、口径10.2cmを測る。器表面の摩滅が激しく、調整については明らかでない。底部外面を少し凹ませている。

195は薄手の平瓦で、色調は灰～灰白色を呈し、焼成はやや不良である。凸面には、一辺約2.5cm

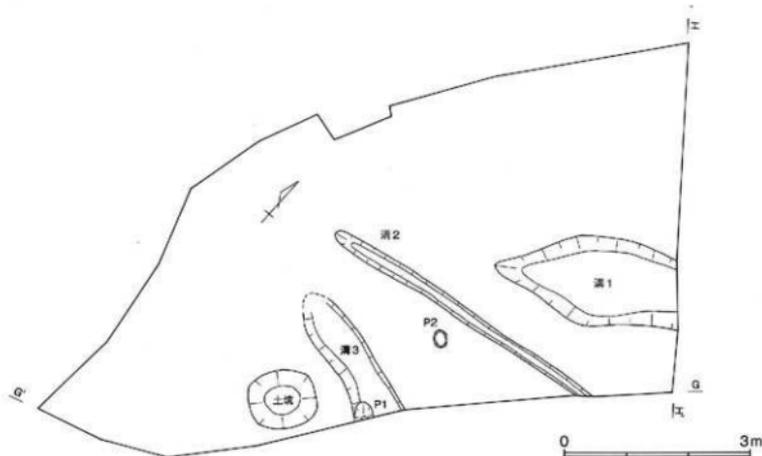


第25図 包含層出土遺物 (S=1/4)



第26図 C区南壁・東壁断面図 (S=1/60)

- 1 攪乱坑埋土
- 2 耕作土
- 3 攪乱坑埋土
- 4 暗渠埋土
- 5 暗渠埋土
- 6 暗灰褐色土 (床土)
- 7 暗灰色土
- 8 暗茶灰色土
- 9 暗灰褐色砂質土
- 10 黑褐色土 (包含層上層)
- 11 茶褐色土 ( " )
- 12 灰褐色土 ( " )
- 13 淡灰褐色砂質土 (流土)
- 14 暗茶灰色砂質土
- 15 炭・灰層
- 16 黄灰色土 (包含層下層)
- 17 炭・灰層 ( " )
- 18 灰色粘質土 ( " )
- 19 暗灰色粘質土 ( " )



第27図 C区遺構全体図 (S=1/80)

の大型斜格子の叩き目が残りに、凹面は布目をナア消しているようである。

### 第3節 第2地点の調査

#### 1 C区の概要

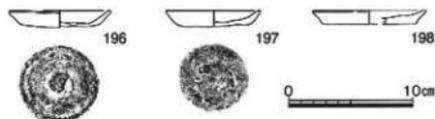
第2地点は第1地点から北へ約50m離れた桃畑で、確認調査で遺構が検出されたトレンチが位置する平坦面をその対象としたため、南北に細長い不定形となっている。第1地点と同様、排土置場の完形から南北に二分し、その南半をC区とした。

桃畑は、西から東へ向かって延びる丘陵を削って造られており、C区の西半は、耕作土を除去するとすぐに地山(岩盤)となっていた。この岩盤は調査区の中ほどで約60cm急に落ち込んだ後、東に向かって緩やかに傾斜している。岩盤上には、黄灰色～暗灰色系の土層が厚さ20～30cmにわたって数層存在し、内面黒色土器碗をはじめとする古代後期～中世にかけての遺物が多数出土した。これらの層の上には、主として中世の遺物を含む茶褐色あるいは灰褐色を呈する土層が40cmあまり堆積しており、この上面から溝や土坑などの遺構が検出された。なお、落ち込んだ岩盤上面を精査したが、遺構等は確認できなかった。

#### 2 C区の遺構と遺物

##### (1) 遺構

検出された遺構としては、土坑、溝、柱穴などがあるが、これらは全て表土下40cmあたりに存在する茶褐色あるいは灰褐色土(第26図11・12層)の上面で確認された。



第28図 遺構出土遺物 (S=1/4)

土坑は調査区南半の南壁近くで1基検出された。長さ約1.1m、幅約0.9mの隅丸方形状を呈するが、深さは約35cmと浅めで、土器片等の遺物は出土しなかった。

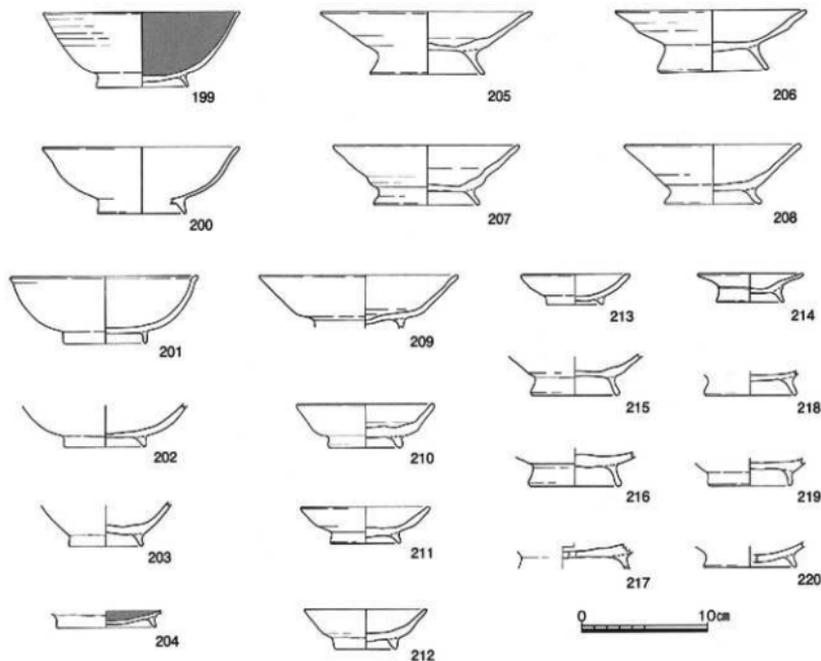
溝は全部で3基検出されたが、溝2・3については深さが5～6cmと非常に浅く、わずかな凹みとして確認されたものである。溝1はD区へと続くもので、最大幅は約1.5mであるが深さは15～20cmと浅く、底は平らである。この溝から小皿が1点(196)出土している。

柱穴は、調査区の中ほど南壁寄りで2基検出された。このうち柱穴1は南壁にかかって検出され、径は40cm程度で柱痕は確認できなかった。埋土からは小皿が2点(197・198)出土している。このうち198は、底部が比較的厚めで口径9.0cmを測るやや大きめの小皿である。

これら遺構から出土した土器は、積極的根拠に乏しいがおおむね13世紀台のものとしておきたい。

## (2) 包含層出土遺物

ここで包含層として報告するのは、溝や土坑などの中世の遺構を含む土層(第26図10層)及びそれら遺構のベースとなる土層(第26図11～12層)と、調査区東半の岩盤上で確認された、主として古代後期の遺物を多く含む土層(第26図16～19層)である。前者と後者は、土層的に明確な差はなく、また、調査区の多くの部分で連続する土層となっていた。したがって、調査時において厳密に区別し



第29図 包含層下層の遺物1 (S=1/4)

て遺物を取り上げたわけではないが、整理の段階で後者にやや古い遺物が多く含まれる傾向が明らかとなったため、便宜上、遺物包含層を前者と後者の二つに分け、それぞれ包含層上層及び包含層下層と呼称して報告する。

#### 包含層下層の遺物（第29・30図、図版7～9）

199～204は高台付碗で、このうち199と204は内面黒色土器である。全形のわかる199は、口径15.8cm、器高6.2cmを測る。体部外面上半には成形時の凹凸が少し残り、口縁部上面を強くすることで、内面にはにぶい稜線が巡る。内面はナデにより仕上げられているようで、明瞭なヘラミガキの痕跡は認められない。外面もナデ仕上げで、一部に丹塗りの痕跡が認められる。204は底部の破片であるが、高台は真円に近い丁寧な作りで、径も8.0cmと大きい。図化できなかったが、これと同一個体と思われる口縁部の小片があり、内面には細かなヘラミガキと思われる痕跡が認められる。201は腕曲率が高めの体部を有し、口縁端部を少し外方へ屈曲させ、上部にわずかな平坦面を作っている。202は器壁がやや厚く灰黄色を呈する軟質のもので、いわゆる白色系土師質土器碗とはやや趣が異なる。203は、体部が直線的に立ち上がる小ぶりな碗になるとと思われる。

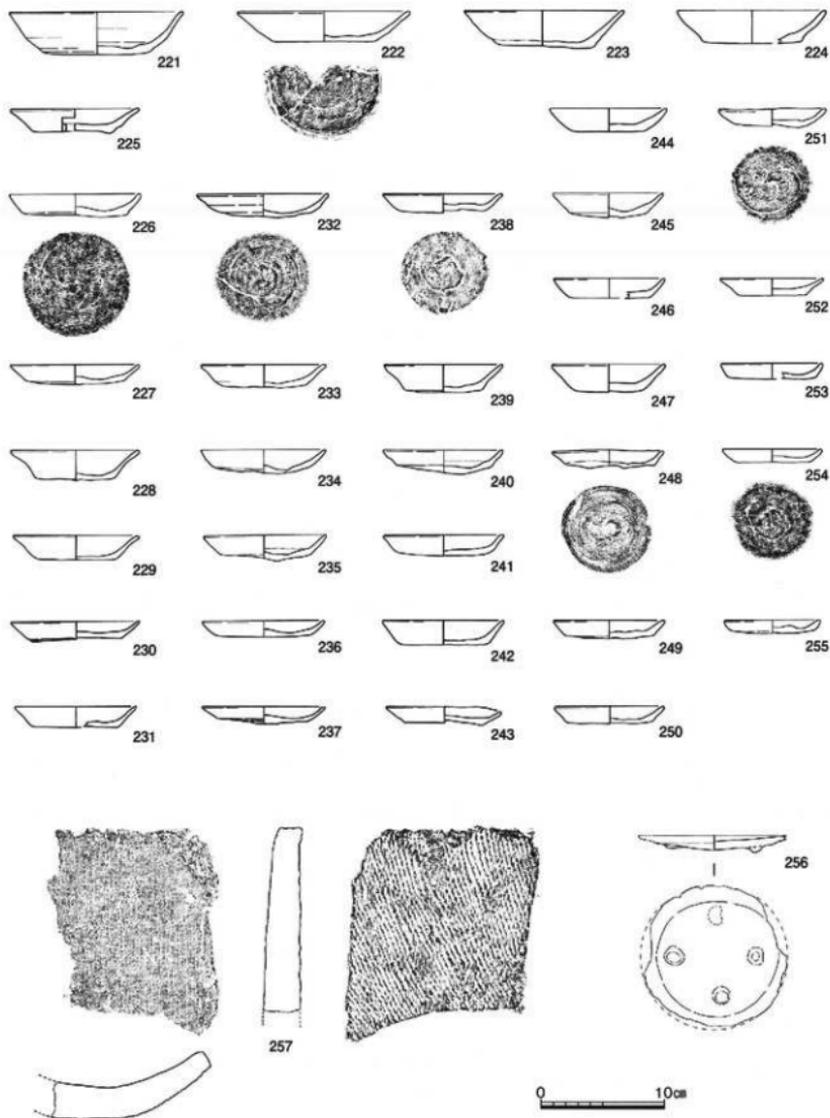
205～214は高台付皿で、大型のもの（205～209）と小型のもの（210～214）がある。

大型のものは、口径14～17cmの皿に、「足高」と呼べる径8～10cm程度の高台が付く。底部からは直線的に開く体部を有し、206は体部の中に、209は体部の下部にそれぞれ屈曲部を持つ。内外面は主としてナデにより仕上げているが、外面に成形時の凹凸を残すものが多い。206と209の内面には板状工具により撫でた痕がわずかに確認できる。色調は、橙色系のもの（205・208・209）と灰黄色系のもの（206・207）があり、焼成は橙色系が良好で灰黄色系がやや不良である。209の外面には、丹塗りの痕跡が少し残っている。

小型の高台付皿には、口径が10～11cm程度のもの（210～212）と9cm弱のもの（213・214）がある。前者は、高台近くで緩く屈曲し直線的に立ち上がる体部を有し、210・211では内底面が平坦となるが、212では緩やかな弧状となる。いずれも体部下半から底部にかけての器壁がやや厚く、内外面ともナデにより仕上げている。色調は黄褐色～黄茶色で、焼成はやや不良である。213は、浅めの高台付碗をそのまま小さくしたような形で、灰白色を呈し焼成は良好である。214は、器高に比べて高めの高台を持ち、体部は大きく開く浅めの皿となる。高台外面を強くすることでによりできた粘土の盛り上がりがあり、細い凸線となって体部との境を巡っている。全体的に丁寧な作りで、高台外面には丹塗りの痕跡が認められる。

215～220は底部で、215～118は高台付皿、219・220は高台付碗になるとと思われる。

215・216は、直径7.5cm弱、高さ1.5cm程度の「足高高台」を持つもので、どちらも焼成は良好であるが、色調は215が橙色、216はにぶい黄色である。217は高台径が9cmを越える大型のもので、底部中央に直径5mm程度の焼成前の穿孔がみられ、燭台として使用された可能性がある。胎土は精良で、焼成も良好である。218の高台は、215・216に比べればやや小ぶりであるが、真円に近い丁寧な作りである。器壁は比較的薄く焼成は良好だが、胎土には1mm程度の砂粒を多く含んでおりやや粗い。219は、体部が直線的に立ち上がるタイプの碗になると思われ、色調は灰黄色で焼成はやや不良である。高台接合部の外面が厚く作られているため、高台の外見上の高さや底外面からの高さがかかなり異なっている。



第30図 包含層下層の遺物2 (S=1/4)

221～224は杯である。221は、平らな底部からやや内湾気味に立ち上がる深めの身を持ち、口縁端部は丸く収めている。底外面はヘラ切り後ナデ仕上げで、体部内面にはヘラ状工具によるヨコナデが施されている。焼成はやや不良で、ぶい黄色を呈し、胎土もやや粗い。222は、平らな底部から直線的に浅く開く体部を持つ。底部にヘラ切り痕を明瞭に残すが、他の部分は丁寧なナデを行っている。胎土は精良で焼成も良好で、色調は明るい橙色を呈する。223と224は、円盤高台状に少し出っ張った底部に、223は直線的な、224はやや内湾する体部が付く。どちらも焼成は不良で色調はぶい黄色系を呈し、全体的に粗雑な作りである。

225～255は、小皿である。口径は最小のもの(255)が7.8cm、最大のもの(231・232)が10.8cmで、平均は9.5cmとなり、一般的な小皿に比べてやや大きめのものが多い。色調は、浅黄色からぶい黄橙色を呈するものが多いが、焼きが甘く褐灰色のものもある。全体的に、器表面が荒れているため細かな調整が不明なものも多いが、ほとんどの底部外面にはヘラ切り痕が認められ、糸切りの個体は確認できない。器形としては、平らな底部から短く立ち上がる口縁部を有するものが多いが、押圧により底部が少し丸みを帯びたもの(232・234・235・240・245)や、口縁部の立ち上がりが大きく深めの身を持つもの(225・228・229・239・242・247)などがある。特に228と239は、しっかりとした底部から大きく外販して高く立ち上がる口縁部を有しており、一般的な小皿とはやや趣が異なる。

225は底部に径6mm程の焼成前の穿孔を持つもので、燭台としての用途が考えられる。胎土は精良で色調は灰白色である。また、わずかであるが外面には丹塗りの痕跡が認められる。この他に丹塗りが確認できるものが3点(236・237・241)あるが、胎土や焼成、色調などに特に共通点は認められない。235と240の内面には、底部と口縁部との境に浅い溝状の凹みが巡っており、1枚の帯状の粘土を底部に貼り付けることで口縁部を作った際の接合痕と思われる。249・251・255の底部内面には、底部の核となる円盤状粘土の盛り上がり明瞭である。

256は円形の盤で、箸置きとしての用途が考えられる。径1～1.5cm程の扁平な球状の足が4個付くが、ひとつは剥がれてその痕跡のみが残る。器表面の荒れが激しく口縁端部も所々欠いているが、直径約12cmに復元できる。底部外面にはヘラ切りによると思われる段差がわずかに認められるほか、端部から約1cm内側の部分に、鈍い稜が1条巡っている。胎土はやや粗く、1～2mmの砂粒を多く含んでいる。

257は平瓦で、凸面には縄目、凹面には比較的細かい布目圧痕が残る。焼成は良好で、色調は内外面とも明るい橙色である。

包含層下層から出土した土器については、少なくとも2時期に分けることが可能である。第29図掲載のうち、200～202の高台付椀については12世紀後半頃と思われるが、それ以外の内面黒色土器椀や高台付皿などはやや古く、おおむね11世紀初め頃に比定できる。杯については、222が高台付椀とほぼ同じ12世紀後半、それ以外が内面黒色土器と同じ11世紀初め頃と思われる。また、小皿については、口径が10cmを越え「中皿」とも呼べる大型のものも多く、これらの土器も11世紀初め頃と考えていだろう。

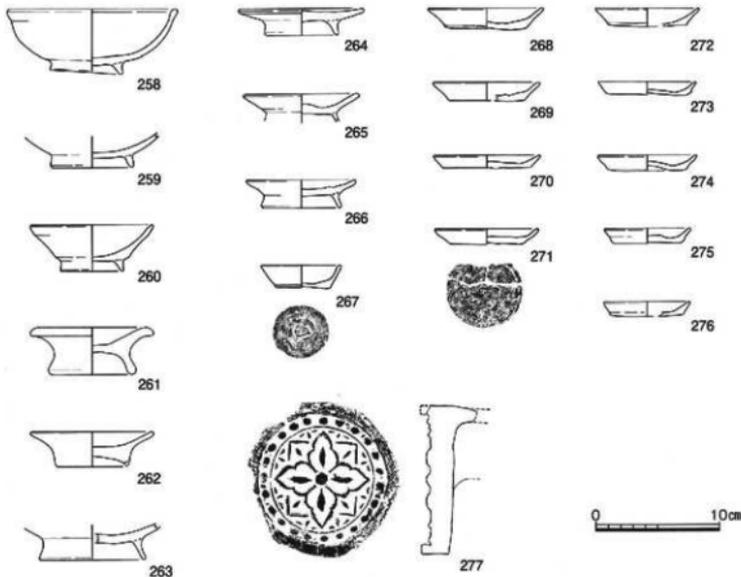
包含層上層の遺物(第31図、図版9)

258～260は高台付椀である。258は、湾曲率がやや高い体部と端部を少し肥厚させて丸くした口

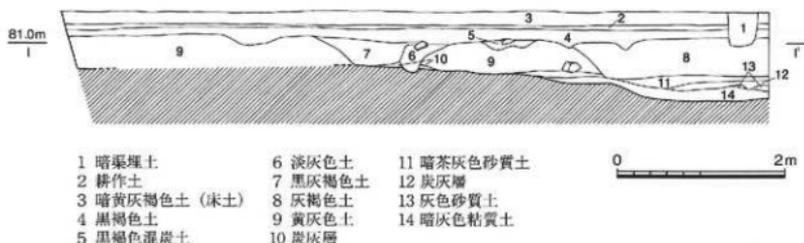
縁部を持つ。色調は灰白色で、焼成は良好。259は直径6.8cmを測るしっかりとした高台を有し、色調は灰白色を呈する。260は小型の椀で、底部から屈曲して直線的に立ち上がる体部を持つが、内面は口縁部から底部にかけてゆるやかな曲線を描く。焼成は良好で、色調は灰白色である。

261～266は、高台付皿である。263は、高台径や器壁の厚みから大型の皿になると思われるが、他はいずれも小型の皿である。261は、器壁の厚い体部と口径に近い大きさの高台を有する。口縁端部は斜め下方にやや拡張するように折り曲げられており、高台は端部を少し肥厚させその先端を丸く収めている。262は、体部の器壁に比べ底部がかなり厚く作られており、高台はつまみ出されたように先端が細くなっている。264は体部が水平近くに開いており、身の深さがほとんどなく、盤に近い形になっている。266は底内面に粘土紐の巻き上げ痕が見られ、底外面にはヘラ切りの痕跡が認められる。

267～276は小皿である。267は、立ち上がりの角度が急な口縁部を有する完形の皿で、口径5.5cm、底径4.4cm、器高1.9cmを測る。胎土は精良、焼成も良好である。底外面には細い粘土紐を巻き上げて成形した痕が明瞭に残るが、内面はきれいにナデ消されている。268～276は一般的な小皿で、口径は7.0cm～9.4cmのものがある。270・274・275の底内面には円盤状粘土の盛り上がりが見られ、274の底外面には押圧による凹みが認められる。色調は、269と271が褐色系の濃い色を呈するが、他は灰白色系の明るい色である。



第31図 包含層上層の遺物 (S=1/4)



第32図 D区南壁断面図 (S=1/60)

277は、瓦当面径約12cmのやや小型の宝相華文軒丸瓦である。中央に剣菱形の花弁を4葉配し、中心部には大粒の蓮子一つ置く。先端が直角の間弁を4葉の花弁の間に配し、間弁全体では四角形を表す意匠である。花弁の外側には圏線が1条巡り、花弁と圏線の間には3個1対の小さな子葉が内向きに8ヵ所配されている。瓦当の外周及び表面はナデによる成形を行う。胎土は精良で焼成は良好、色調は灰色を呈する。

包含層上層出土土器の時期については、264～266の高台付皿にやや古めの要素が認められるが、おおむね12世紀後半を中心とする時期に収まると思われる。

### 3 D区の概要

D区はC区から北東方向へ続く平坦面であるが、排土を移動しての調査であるため、両区の境は正確には一致していない。

基本的な層序はC区と同じで、地形の高い北西側が削られており、調査区の北西半では、耕作土の下は地山(岩盤)となっている。地山は南東に向けて徐々に下がり、最も深い調査区南端では地表下1.2mの深さとなる。調査区の南半では、耕作土下に黄灰～灰褐色の土層が30cm程度堆積しており、この上面で、土坑、溝、柱穴などの遺構が検出された。また、地山上には中世の遺物を含む土層が数層みられたが、概してその量は少なかった。C区と同様、地山上面の精査を行ったが、遺構等は確認できなかった。

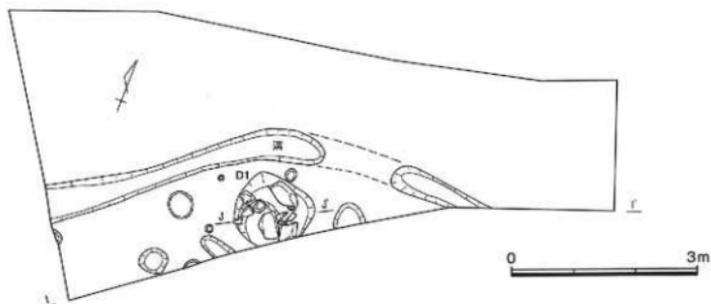
### 4 D区の遺構と遺物

#### (1) 遺構

検出された遺構としては、土坑、溝、柱穴などがあるが、これらは全て調査区南半の耕作土下に存在する、黄灰色土あるいは灰褐色土の上面で検出されており、その状況はC区と同様である。

溝は、調査区の南壁から西壁にかけて延びるが、削平により一部途切れている。幅は30～50cmあるが、深さは5～10cmと非常に浅い。位置的關係から、C区の溝につながるものと思われる。遺物としては、小皿が1点(278)出土している。口径7.0cmを測る小ぶりの小皿で、立ち上がりの角度は比較的急である。底内面は円盤状粘土の盛り上がりが見られ、外面には丹塗りの痕跡が認められる。

土坑は、調査区のはほぼ中央南端で、その一部が調査区の南壁断面にかかる状態で検出された。平面



第33図 D区遺構全体図 (S=1/80)

は、一辺約12mの隅丸方形状を呈し、深さは約30cmである。土坑上面には、拳大～人頭大の角礫が10個近くみられたが、意図を持って並べたような状況ではなかった。出土遺物としては、高台付椀が2点ある。279は口径13.0cm、器高5.5cmを測る。身は浅く、口縁端部をわずかに肥厚させている。体部内面は平滑であるが、外面には小さな凸凹が目立つ。底部はヘラ切り後、ナデ調整を行っている。280の底内面には、赤褐色の重ね焼き痕が認められる。これらの土器は、おおむね13世紀前半頃と思われる。

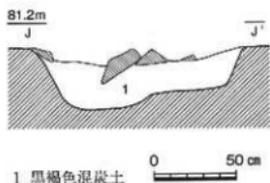
柱穴は、溝の南側で不定形なものも合わせて全部で9基が確認された。穴の深さは概して浅いものも多く、遺物も図化できるものはなかった。

#### (2) 包含層出土遺物 (第35図、図版9)

図化できたのは4点(281～284)で、すべて調査区南西部の地山直上層(第32図14層)から出土したものである。

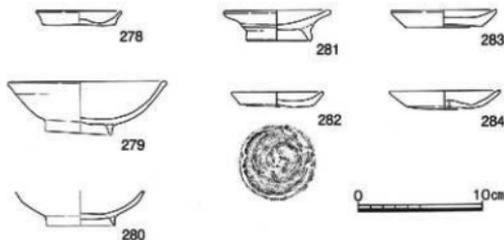
281は高台付皿である。口径8.7cmの小型の皿で、大きく開く浅めの体部を持つ。高台外面を強くなでることにより、粘土の盛り上がりか鈍い稜となって体部との境を巡っている。底外面にはヘラ切りの痕が残る。

282～284は小皿である。282の底部外面には粘土紐巻き上げの痕が明瞭に残っている。283の口縁部内面は、板状工具によるナデによってほぼ直線となっている。284の内面は、底部の円盤状粘土の端から口縁部の立ち上がりが始まっており、外面における立ち上がりの長さかなり異なっている。これら包含層出土の土器は、C区における土層の状況などから、11世紀初め



1 黒褐色泥炭土

第34図 土坑断面図 (S=1/30)



第35図 遺構・包含層出土遺物 (S=1/4)

頃のものと考えられる。

#### 第4節 まとめにかえて

今回実施した調査は2地点に分かれており、発掘面積も両地点合わせて210㎡と小規模なものであったため、遺構の全体像や相互関係などについては不明な部分も多かった。また、遺物についても包含層出土のものが多く、遺構に伴う一括性の高いものは少なかった。したがって、遺跡の内容や性格については多くの部分について明らかにすることはできなかったが、最後に新たに得られた知見をもとに若干のまとめを行いたい。

今回の調査では、A区の土器溜まりとC区及びD区の包含層から11世紀初め頃と思われる土器が出土したが、これらの組成をみると、内面黒色土器碗をはじめ杯、皿などの供膳具がほとんどを占めている。特に皿については、「中皿」とも呼べる径10cm前後のものを含み、高台が付くものには大型と小型の二つのタイプが存在するなど、種類が豊富である。平安時代の土器については、これまで岡山県内では出土例が少なくその時期や性格などについては不明な点が多かったが、近年当該期の調査例が増えるに従いその様相が次第に明らかになり<sup>(1)</sup>、編年の位置付けも進みつつある<sup>(2)</sup>。しかし、それらの多くは官衙の性格を有する遺跡や集落跡からのもので、朝原寺跡のような山岳寺院からの出土例は、県内ではほとんど知られていない。したがって、今回の出土例に見られる器種の多様性が、山岳寺院に共通したものかあるいは朝原寺跡特有なものかについては不明であるが、こうした組成は宗教的性格を色濃く反映したもの<sup>(3)</sup>との指摘もあり、今後平安時代における山岳寺院の調査例が増えることで明らかになることを期待したい。

朝原寺については、安養寺裏山経塚群出土の経瓦<sup>(4)</sup>や文献史料などから、少なくとも11世紀後半には存在していたと考えられるが、その創建時期についてはほとんどわかっていない。今回の調査において、11世紀初め頃の土器がある程度まとまって出土したことから、その頃には既に存在していた可能性が高まったと言えるが、一方で、当該期の瓦はこれまで確認されておらず、「寺」としての存在を断定するまでには至らなかった。したがって、その創建時期についてもなお不明と言わざるを得ないが、今回を含め2度の調査で平安前期と思われる瓦や土器等が出土していない<sup>(5)</sup>ことから、11世紀初め頃を大きくさかのぼるとは考えにくく、現時点では10世紀台にその成立時期を想定しておきたい。

#### 註

- (1)『浅原寺跡』倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告第1集 倉敷市教育委員会 1984
- (2)『津寺遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116 岡山県教育委員会 1997  
『窪木遺跡2』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告124 岡山県教育委員会 1998
- (3)『奥坂遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告15 総社市教育委員会 1999
- (4)総社市教育委員会 武田恭彰氏のご教示による。
- (5)『安養寺瓦経の研究』安養寺瓦経の研究刊行委員会 1963
- (6)C区包含層から出土した、8世紀末頃と思われる須恵器の杯蓋・杯身及び土師器の杯については、朝原寺成立以前のものと考えている。

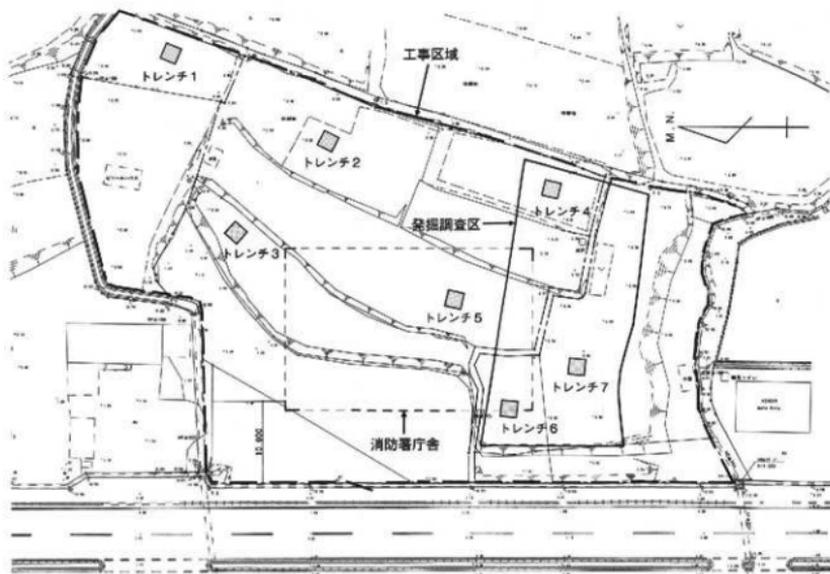
## 第3章 溝落遺跡

### 第1節 調査に至る経緯と経過

#### 1 調査に至る経緯

溝落遺跡の発掘調査は、倉敷市児島塩生字金浜に計画された倉敷市臨港消防署の新築移転事業に伴い実施されたものである。

倉敷市児島塩生の高島港に所在する倉敷市臨港消防署は、築後30数年が経過し、建物の老朽化と狭隘化の対策が課題となっていた。そこへ、平成16年の台風による高潮浸水被害を受け、一時的に機能不全に陥る事態が発生した。立地条件の問題も表面化したため、高潮被害の恐れが無い適地への移転が計画された。ところが、用地の選定から買取交渉へと進展するうちに、予定地が溝落遺跡の範囲内であることが判明し、平成17年10月に倉敷埋蔵文化財センターと市消防局との間で開発事前協議が行われた。土地の造成工事計画の詳細は未定であったが、西接する国道430号線の高さに合わせて切り土造成を行う方針が示された。そのため、開発予定地全域を対象として遺跡の性格や残存状況を把握することを目的に確認調査を実施し、その結果を踏まえて遺跡の保存協議を行うことが決められた。



第36図 確認調査トレンチ配置図・発掘調査区位置図 (S=1/600)

確認調査は平成18年5月30日から6月2日にかけて倉敷埋蔵文化財センターにより実施された。溝渚遺跡については縄文時代～中世の散布地として認識されていたが、発掘調査歴がないため、重点をおいて調べる場所や予想される遺構等も把握できていなかった。そのため、開発予定地（面積約3,200㎡）の7ヵ所に2m×2mのトレンチを任意に設定し、土層の観察を中心に遺構、遺物の確認を行った。調査の結果、開発予定地の南側に設定したトレンチ4、6、7から縄文土器を中心とした遺物が出土し、トレンチ4では古墳時代に属する可能性のある遺構が検出され、同時代の製塩土器も出土した。遺物は耕作土直下の土層に多く含まれ、その下の堆積層にも縄文時代前期から後期の遺物がわずかに含まれることが確認された。他のトレンチからは遺物の出土は全くなく、遺構も検出されなかった。トレンチ1、2、3では地表下数十cmの深さで地山が確認されたのに対し、それより南側の地点では扇状地に堆積した厚い土層が存在し、遺物包含層はその上に堆積する土層であることが明らかとなった。この結果を受けて、開発予定地の南側の部分を遺跡の保存対象区と決定した。

確認調査後の協議では、保存対象区を開発予定地から除外することや全域を盛土工法とするなどの計画変更は困難であり、事業の目的が市民の生命と財産を守る消火・救急・防災機能に関わることから、やむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することが決定された。そして、平成18年6月9日付けで倉敷市消防局長から埋蔵文化財発掘の通知が提出され、発掘調査が実施されることとなった。

## 2 調査の経過

発掘調査は、平成18年7月6日から8月31日にかけて実施された。調査面積は660㎡である。調査区は段々畑の東西二段で、低位西段を1区、高位東段を2区とし、2区西端からの落差約80cmの1区から着手した。耕作土を除去すると縄文土器が点々と現れたが、遺物は現位置をとどめていないと判断され、出土位置について1点ずつの記録は行わなかった。遺物の取り上げについては、便宜的に調査区を田の字状に分割して北東区、南東区、北西区、南西区とし、深さ15cmを日安に東半区を2次、西半区を3次に分け、順次取り上げていった。出土遺物の時期は縄文時代早期、前期、中期、後期である。前期は羽島下層式、中期は船元Ⅰ式から中期末まで、後期は中津式から彦崎Ⅱ式までが出土した。特定の場所で集中して船元Ⅱ式や津雲A式が出土することもあるが、これは1～3個体程度が破片となったもので、概して各型式がランダムに出土する状況であった。土器以外では石鏃、石匙、スクレイパー、サヌカイト製板状剥片、石斧、磨石、凹石、球状耳飾などが出土した。縄文時代以外では、南西区および北西区の西端部分で中近世～近現代の土器の小片が出土しており、後世の攪乱を受けていることが知られた。また、1区北東区には埋没した現代の水田が検出された。包含層の掘り下げを終え、扇状地堆積層の上面が露出したところで、精査を行うも、縄文時代の遺構は確認されず、北東区で時期不明のピット3基が検出されたのみである。また、扇状地堆積層について部分的な深掘りを試みたが、遺物の出土量は極めて少なかった。

2区の調査は8月5日から開始した。この調査区では、みかんなどの果樹が植えられ、肥壺や井戸が据えつけられるなど深く掘り返された場所がある。東側においては縄文時代の包含層が削り取られるなどの破壊を受けている。1区と同様に、4分割して段階的に掘り下げを進める方法をとったが、耕作や現代の造作物による影響のため縄文時代包含層の調査は十分に行えなかった。遺構としては、

古墳時代の溝が検出され、埴土から製埴土器が出土した。これは、確認調査のトレンチ4で検出された遺構と同一のものである。また、溝の西側では黒褐色土の分布が認められ、古墳時代の小形丸底甕の小片や高杯が出土したが、遺構検出には至らなかった。この部分も耕作による破壊、攪乱を受けていると考えられた。この層から1区と同様に扇状地堆積層の上面が露出したところで全体的な掘り下げを終了した。8月31日に機材を撤収し、発掘調査を完了した。

#### <調査日誌抄>

- 平成18年7月6日 機材搬入。1区で重機による耕作土の除去作業。  
 7月7日 遺物包含層の1次掘り下げを南東区から開始。  
 7月12日 北東区で現代水田の耕作土と床土を除去し、ピット2基検出。  
 7月22日 2次掘り下げを南東区から開始。  
 7月26日 南西区で津雲A式等出土。  
 7月27日 北西区で船元Ⅱ式等出土。  
 8月1日 北東区で袂状耳飾出土。  
 8月3日 3次掘り下げを南西区で行う。  
 8月4日 写真撮影、セクション実測を行い、1区の調査完了。  
 8月5日 2区で重機による耕作土の除去作業。  
 8月10日 1次掘り下げを南東区から開始。  
 8月11日 北東区で溝を検出。  
 8月17日 北西区でトレンチ調査するも遺構は検出されず。  
 8月22日 2次掘り下げを南西区から開始。  
 8月30日 写真撮影、セクション実測を行い、2区の調査完了。  
 8月31日 機材撤収。

#### 溝落遺跡発掘調査委員会

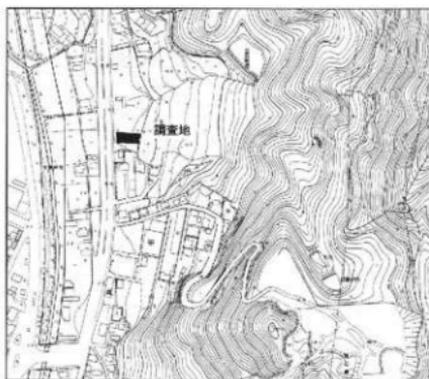
委員長	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会 会長
副委員長	中山公司	倉敷市教育委員会 教育次長
〃	三木秋夫	倉敷市消防局 局長
専門委員	河本 清	倉敷市文化財保護審議会 委員
監 事	久山 優	倉敷市教育委員会 生涯学習部長
〃	梶原賢二	倉敷市消防局 次長
事務局長	福本 明	倉敷埋蔵文化財センター 館長
事務員	鍵谷守秀	倉敷埋蔵文化財センター 主任
調査員	小野雅明	倉敷埋蔵文化財センター 主任
〃	藤原好二	倉敷市教育委員会文化財保護課 学芸員
〃	藤原憲芳	〃

(肩書き及び役職名等はいずれも調査当時)

## 第2節 調査の概要

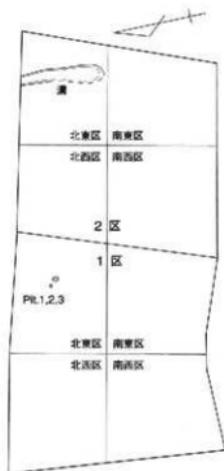
### 1 調査の概要

溝落遺跡は、倉敷市と玉野市を結ぶ国道430号線沿いの畑地に存在する。サスカイト剥片をはじめ須恵器、中世土器などの遺物が採集されることから縄文時代から中世にかけての散布地として周知されている。遺跡は、西に水鳥瀬を望む山裾に形成された標高7～9mの小さな扇状地上に存在する。その範囲は地形的に見ても東西、南北とも150m程度におさまると考えられる。地形図を見ると、金浜新池からそのまま海岸に向かう谷筋と、その南の打越中池、下池から北西に降りながら谷口付近で流路を西に変える谷筋が看取される。今回の調査地点は、南の谷筋に形成された扇状地の谷口に位置している。



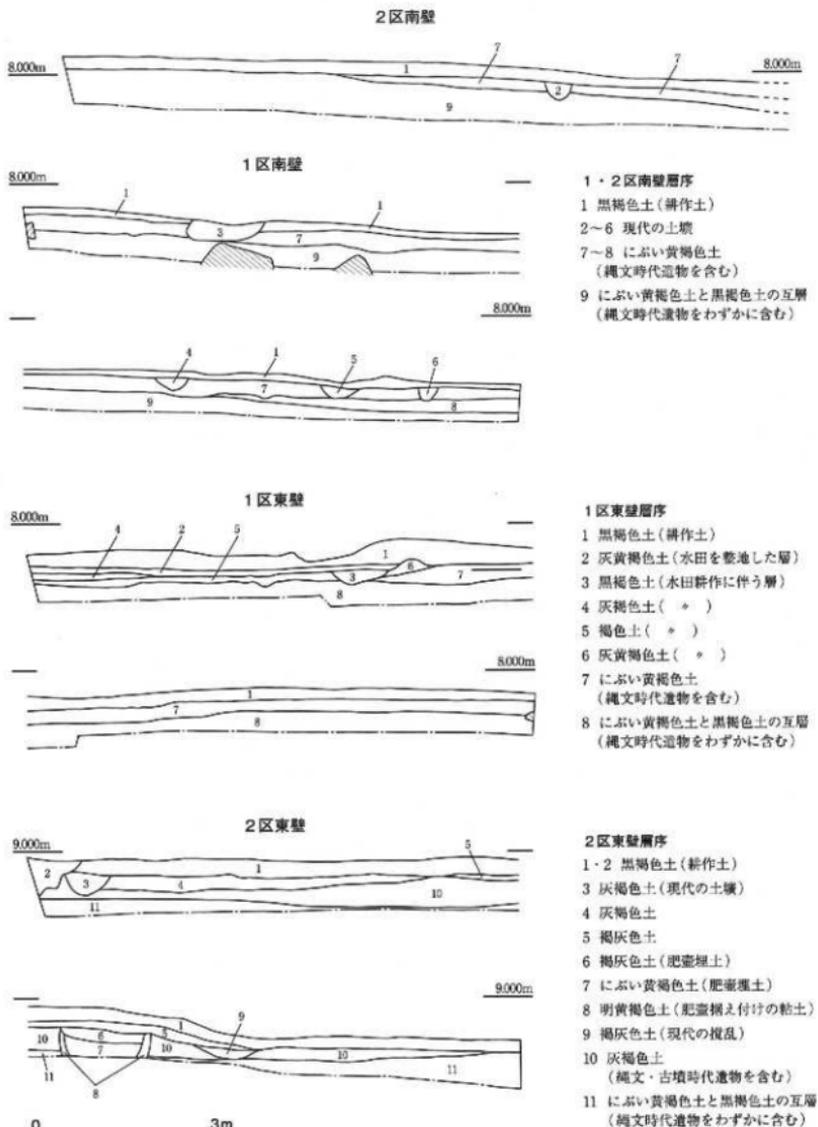
第37図 調査地位置図 (S=1/7,500)

発掘調査区の現況は段々畑の南端で、休耕地となった野菜畑、果樹園、畦道が含まれる。南側と西側は削り取られており、これが耕作地の境界となっている。基本的には西面する傾斜地であるが、調査区北東においての畑の段を取り込む形となったため、この段を南に延長することで低位西段を1区、高位東段を2区とした。1区の北東では水田によって包含層が失われ、2区の東側では、開墾により包含層が削り取られ、肥壺、井戸などの施設による攪乱を受けるなど少なからず耕作の影響が及んでいる。



第38図 調査区全体図 (S=1/400)

調査区の土層観察は、1区・2区の南壁、1区東壁、2区東壁により行った。基本層序は、耕作土の直下に厚さが現状で30～40cmのいぶい黄褐色土がみられ、この土層には縄文時代早期から後期までの遺物が含まれている。いぶい黄褐色土の下には、厚さ4～6cmのいぶい黄褐色土と厚さ1～3cmの黒褐色土が交互に縞状に現れるラミナが観察され、水流によって運ばれてきた土砂が堆積したことを示す。この層の厚さは1区の中央あたりで60cmを測る。上位では前期(羽鳥下層式)、後期(時期不明)などの土器がわずかに含まれることが確認されたが、縄文時代の遺構は発見されなかった。今回調査を行った遺物包含層は二次堆積層の可能性が高いと考えられ、縄文時代の生活跡が近い場所にあったことがうかがえる。2区では縄文時代の包含層は部分的にしか残ってお



第39図 土層断面図 (S=1/80)

らず、後世の削平を受けているが、古墳時代中期の遺物を含む灰褐色土層とこの層を切り込む溝が検出されるなど当時の活動跡が発見された。しかし、灰褐色土層も耕作による破壊を受けている。

出土遺物の大半は縄文時代に属するもので、縄文土器については、早期は押型文土器、前期は羽島下層式、中期は船元Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ式、里木Ⅱ、Ⅲ式、中期末、後期は中津式、福田Ⅱ式、津雲Ⅰ式、彦崎Ⅰ式、彦崎Ⅱ式（先行段階を含む）がある。土器以外ではサヌカイト製の石鏃、石匙、スクレイパー、板状剥片や石斧、磨石、門石などの石器類、補修孔のある状状耳飾などが出土した。古墳時代の遺物については小形丸底蓋、高杯、製塩土器が少量出土した。製塩土器には、古墳時代前期の脚台付きのものと古墳時代中期とされる薄手のコップ形のものがあり、後者は溝に伴うものである。調査区より100m西の海岸にある金浜遺跡から多量に出土する古墳時代後期の師楽式製塩土器は1片も発見されていない。その他、中世の土器も少量出土した。

1区における縄文土器の出土状況を把握するため、型式のわかる土器片の出土位置について表1に示した。1回の掘り下げを深さ15cm程度に定め、東半区で2回（2次）、西半区で3回（3次）行った結果をまとめると、遺物が西半区に偏在することが明らかとなった。このことから、開墾など人為により遺物包含層が西側に寄せられている可能性も否定できない。

2区における縄文土器の出土状況については、先述したように包含層が破壊されているため、攪乱層から古墳時代の遺物と共に出土したものが大半であり、摩滅の著しいものが多い。

検出された遺構としては、1区で時期不明のピット3基、2区で古墳時代の溝1条がある。

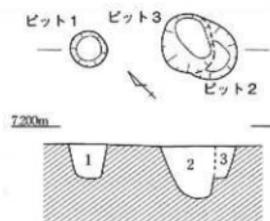
ピット1は直径45cm、検出面からの深さ40cmである。ピット3の直径は60cm、検出面からの深さ65cmである。ピット2はピット3に切れ、検出面からの深さ40cmである。これらのピットの埋土は黒褐色土で、粒状の焼土が混入する。遺物は出土しておらず時期は不明である。

溝は2区の北東区で検出された。西肩が明瞭でなく、竪穴状に広がる遺構または落ち込みの可能性も考えられたが、埋土が溝内におさまることと、西肩が削平されている状況を想定して溝と判断した。

	早期		中期						後期				合計	
	押型文	羽島下層	船元Ⅰ	船元Ⅱ	船元Ⅲ	船元Ⅳ	里木Ⅱ・Ⅲ	中期末	中津	福田Ⅱ	津雲Ⅰ	彦崎Ⅰ		彦崎Ⅱ
北東区1次									1					1
北東区2次		1		1				2	1				1	6
南東区1次					1					2				3
南東区2次		2						2	1				1	6
北西区1次								1				1	1	3
北西区2次		2	1	18	1			6	2	6			3	39
北西区3次	1	1		37		1		5					1	46
南西区1次			1	1	1				4	2			6	15
南西区2次			2				1	4	2	5			7	21
南西区3次		4	1	1	1		5		4	1	1	1	2	20
合計	1	10	5	58	4	1	6	20	17	14	2	22	160	

表1 1区の縄文土器出土状況

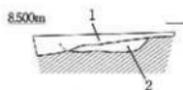
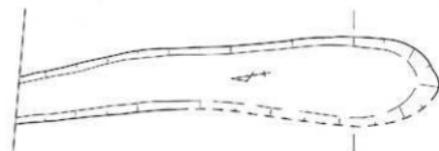
\*同一個体でも接合しないものは1片ずつ集計。彦崎Ⅱ式は先行段階を含む。



1~3 黒褐色土(粒状の焼土を含む)

第40図 1区 ビット1・2・3  
実測図 (S=1/30)

調査区北壁から6.8mで取戻し、幅は80cm~140cm、検出面からの深さは20cm程度である。底面に密着して製塩土器(第41図)が出土した。1はほぼ完形で、口径8.8cm、器高9.8cmを測る。ずん胴に近い器形で、いびつな丸底となる。器厚は1~2mmで、内面に削り寄せがある底部中央を除き2mmを越える部分はない。外面調整は上半部には平行叩き、下半部には指頭大の凹凸が残る。内面はヘラ削り後ナデ調整が施される。工具を斜めに動かしながら削っているのが観察され、底部は工具痕が螺旋状に残る。全体の色調は浅黄色で、口縁部には橙色となる部分がある。2は底部のみ残存するが、1と同様の製塩土器であろう。色調はにぶい黄橙色を呈する。



1 褐色土  
2 黒褐色土(製塩土器出土)



0 10cm

第41図 溝実測図 (S=1/80)・出土遺物 (S=1/4)

## 2 土器

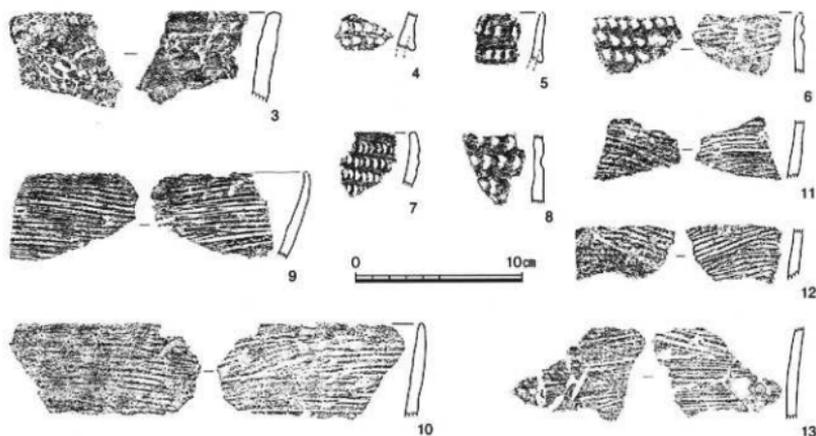
### (1) 1区包含層出土の土器

#### 早期・前期の土器(第42図)

3は押型土器で、径8mm×3mm程度の楕円文が右下がりに配される。内面は横位の粗いナデ調整となる。4・5の口縁部は粘土貼り付けにより外面が肥厚する。4・6~8には竹管状工具によるD字形爪形文が付けられ、8は施文の凹凸が内面に現れている。5には、先端中央を窪ませたヘラ状工具による刺突文が付けられる。9~13は内外面に二枚貝条痕がみられる。4~13は羽島下層式と考えられる。

#### 中期の土器(第43・44図)

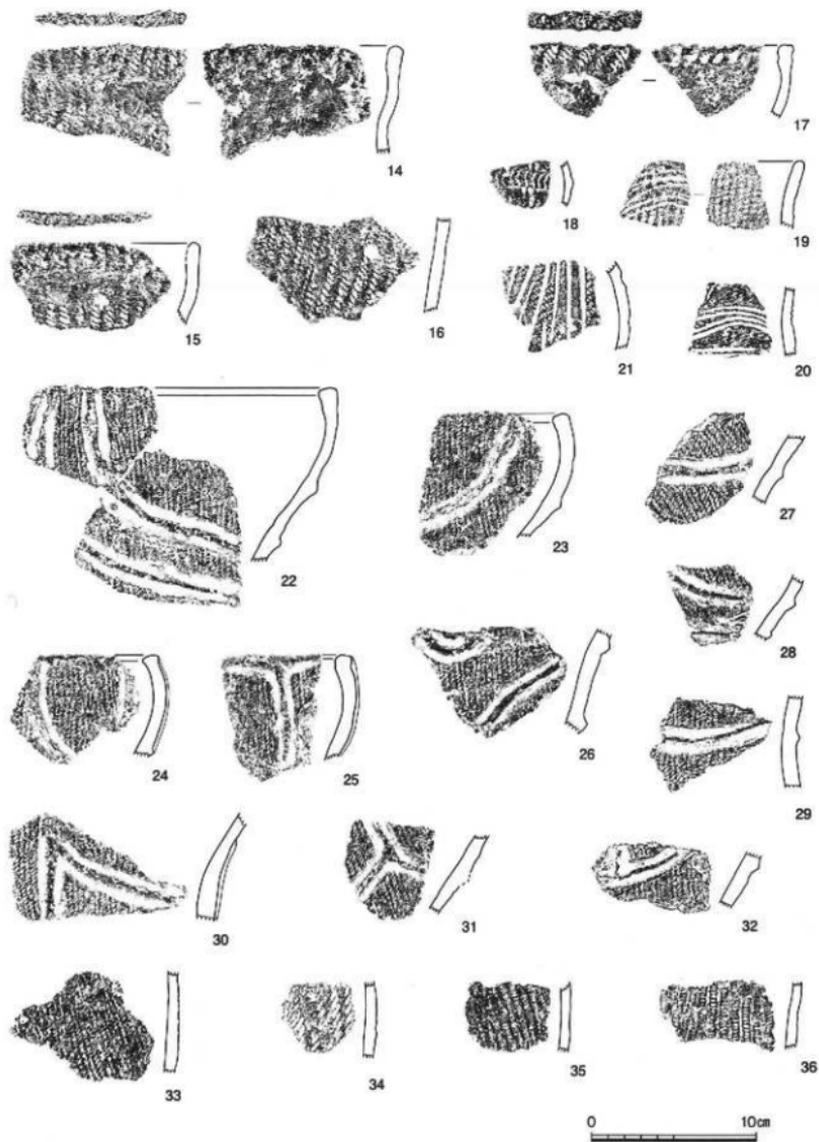
14~17は厚さ6mm前後で、節の大きなLR縄文が縦位に付けられる。14・15・17は口縁内側にも同じ縄文が帯状に施文される。18は縄文を地文とし、低い貼り付け突帯の上にC字形爪形文を付ける。14~18は船元I式と考えられる。19・20はRL縄文を地文とし、半截竹管による平行沈線と弧状の曲線や直線が描かれる。19の内面にはRL縄文がみられる。21はLR縄文を地文とし、沈線によ



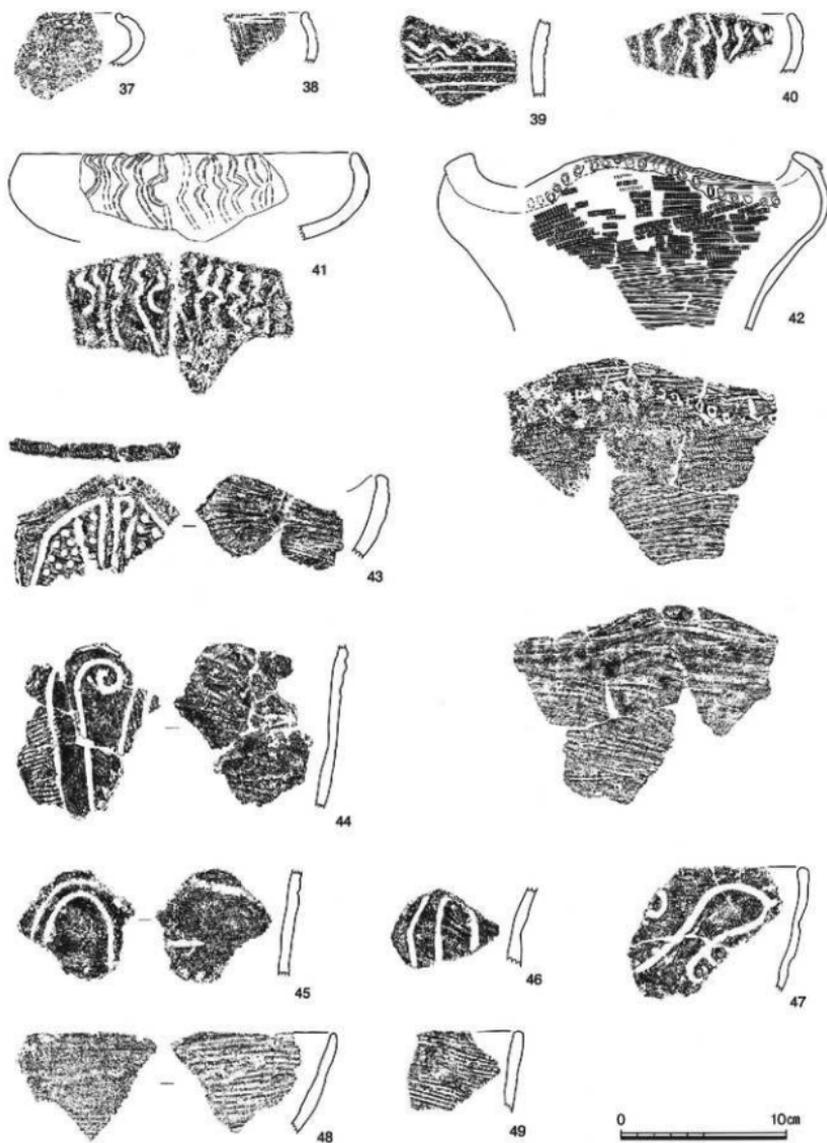
第42図 1区出土の土器1 (S=1/3)

り縦位の条線が描かれる。19～21は船元Ⅲ式と考えられる。22～33は厚さ7～10mmの比較的厚手の土器で、全て1区北西区から出土した。おそらく、2個体程度の断片であろう。縦位につけられたRL縄文を地文とし、断面三角形の貼り付け突帯により、曲線を主とした文様が描かれる。20～31は船元Ⅱ式と考えられる。34・35は節の大きい縄文が縦位に付けられる。36に付けられた縄文は、浅く太い条と深く細い条とが交互に現れており、船元Ⅳ式と考えられる。

37は摩滅のため不明確であるが、地文として撚糸文が付けられているようである。内湾する口縁に半截竹管による細かい波状文がめぐり、波間に小さな凹形刺突が配される。その下には平行沈線で弧状曲線が描かれている。38は細い条線文を地文とし、口縁には幅約2mmの弱い沈線が一条めぐり。39の地文は不明であるが、幅2～3mmの平行沈線で横位の波状文、直線文が描かれる。40・41は同一個体の可能性がある。剥離のため不明な部分が多いが、地文と思われるRL縄文が付けられているのが観察できる。内湾する口縁部には、蛇行文のような曲線が幅約3mmの沈線で縦位に描かれている。この線は弧をつなぐようにぎくしゃくと曲がりながら垂下し、くびれ部近くでは間延びする。42は口縁部がキャリパー状に強く内湾し、胴部上部がくびれる器形の深鉢形土器である。波状となる口縁部は粘土貼り付けにより若干肥厚し、巻貝条痕が筋状に付けられる。口縁肥厚部の下端には段がつくられ、この位置に管状工具によるいびつな楕円形の刺突文をめぐらせる。それ以下の口縁部外面には巻貝回転による擬似縄文が付けられ、文様の間からは施文前の巻貝条痕調整がみられる。胴部および内面にも巻貝条痕調整が施される。施文、器面調整に使用された巻貝は同じ種類と考えられ、周辺貝塚で出土する貝種から候補を選ぶならば、影らんだ螺層に縦方向の隆起がめぐる貝殻のフトヘナトリが当てはまる。同じ巻貝は43～47のいずれかにも使用されているかもしれない。43は波状をなす口縁部で、幅約4mmの沈線により区画文が描かれる。文様構成は、波頂の最上位に上側が開く半円状の曲線を小さく描き、その直下に上端が「P字」のような形をした縦線を垂下させる。これを中心線



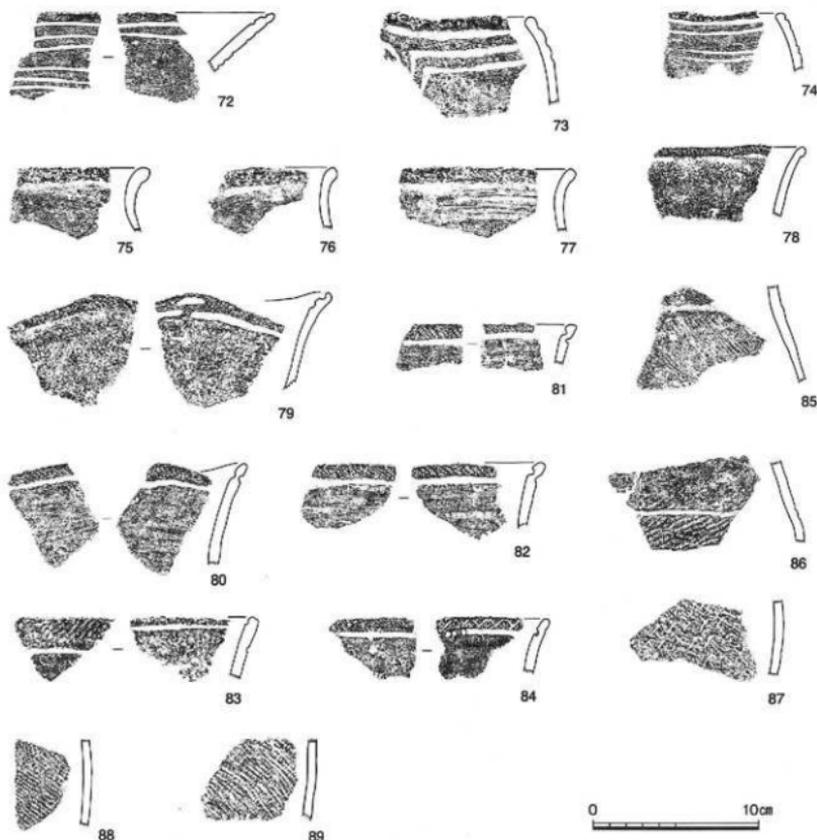
第43図 1区出土の土器2 (S=1/3)



第44図 1区出土の土器3 (S=1/3)

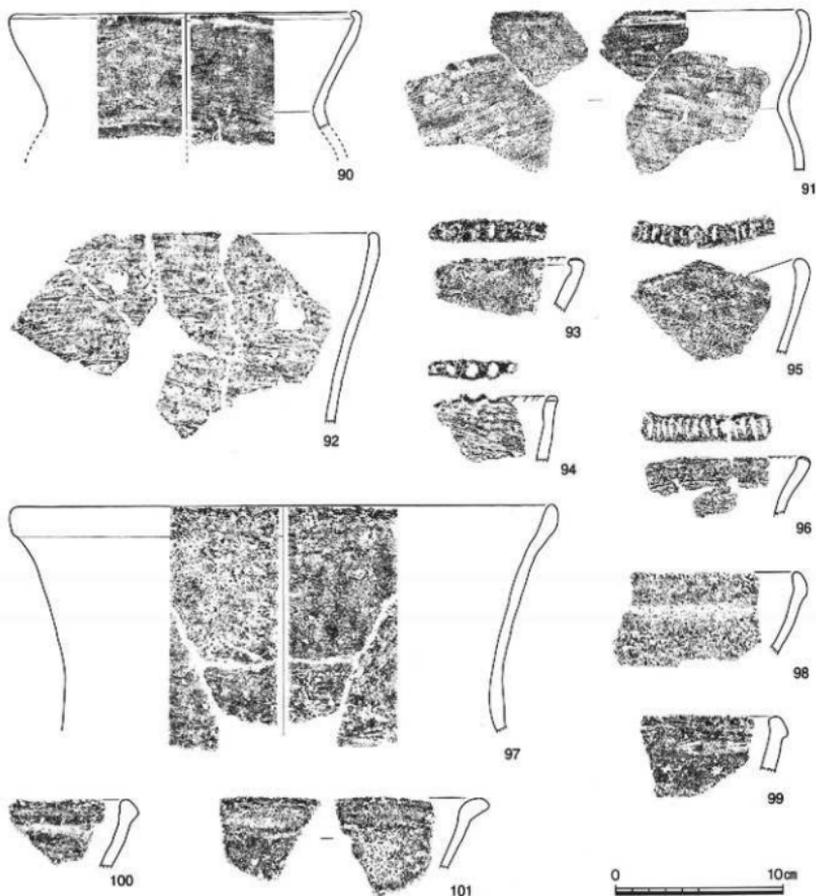


第45図 1区出土の土器4 (S=1/3)



第46図 1区出土の土器5 (S=1/3)

として左右対称に区画が描かれるが、右区画の上端部は「P字」に阻まれて線が途切れ、左区画線も上端部では完全につながっていない。内側には区画線を縁取るように径約4mmの円形刺突が配され、左右の区画間にはLR縄文が施文されているようである。口縁端面にもLR縄文が付される。内面は巻貝条痕調整が顕著で、外面にも同様の調整を施文前に行っているようである。44は幅3～4mmの沈線により縦長楕円形の区画文が描かれ、内側には渦巻文を伴う。沈線間にLR縄文を充填する磨消縄文土器である。内面には巻貝条痕調整が施される。45・46も縦長の楕円形区画文をもつと思われる。45は沈線間にLR縄文が付けられ、磨消縄文とみられるが、詳細は不明。内面に巻貝条痕調整が施される。47は幅4～5mmの沈線で曲線や渦巻文が描かれ、胎土、色調が44に似ている。外面は施文前の巻貝条痕調整が認められる。内面は調整がナア消され、外面から沈線に押されてきた畝が残る。

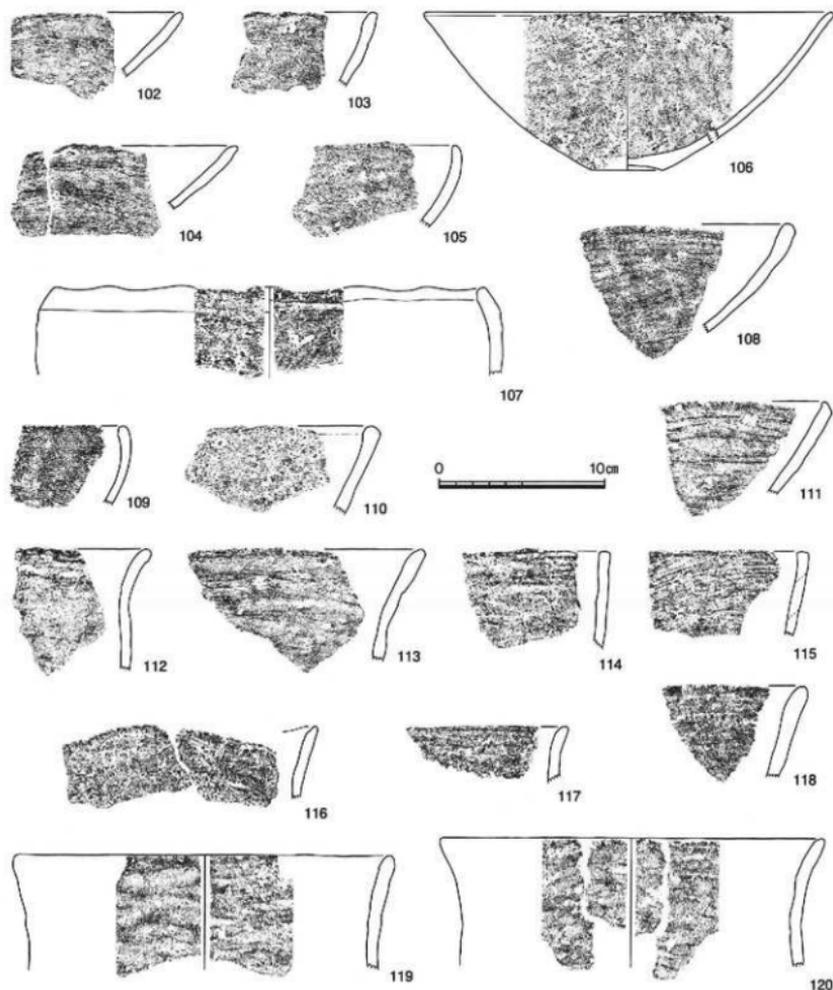


第47図 1区出土の土器6 (S=1/3)

37は里木Ⅱ式、38・39は里木Ⅲ式、40～47は中期末の矢部與田式に相当すると思われる。48・49は無文の鉢または深鉢で、二枚貝条痕調整が施される。48は内外面に調整が認められ、外面にはナデ調整が加わる。49は外面に調整が認められる。46・47については中期末に位置づけられるかもしれないが、今回報告する資料では判断材料が乏しい。

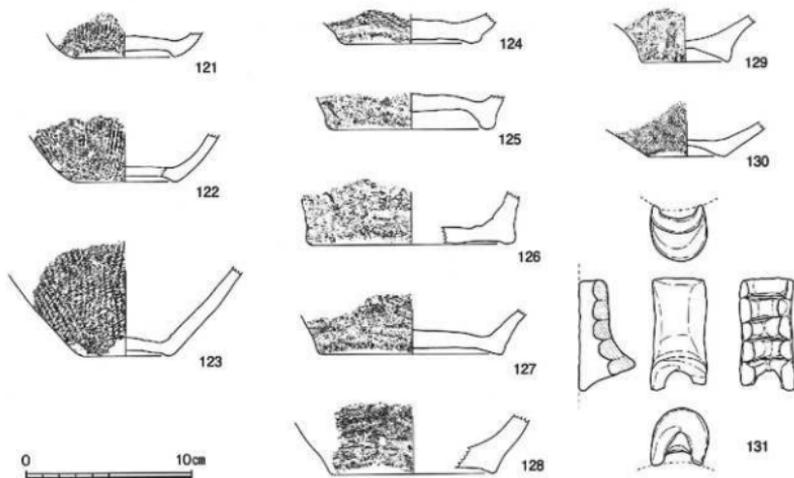
後期の有文土器(第45・46図)

50～53は2本沈線の狭い間に縄文が施文される磨消縄文土器である。50・51は波状口縁となり、50は口唇部内側が大きく肥厚する。55には巻貝回転による擬似縄文が付けられる。57～59は3本



第48図 1区出土の土器7 (S=1/3)

沈線の磨消縄文土器である。57の口唇部には口縁に斜行する刻目がみられるが、剥離のため詳細は不明。60の磨消縄文は口唇部にまで及ぶ。50～60は中津式(新相)～福田KⅡ式の時期と考えられる。61～71は口縁の外側に屈曲、肥厚させるなどして文様帯をつくる縁帯土器である。61～63は波状口縁となり、RL縄文を地文とする。61・62は波頂下に中央をくぼませた円文を置き、その外側に対向弧文、横長の区画文が配される。63も同じような文様意匠をもつが、左右の弧文が整ってお



第49図 1区出土の土器8 (S=1/3)

らず、区画文の部分が横二本の沈線だけで表現されている。64～69は、図に示す部分は平縁状であるが、波状口縁を有するものも含まれるであろう。69は地文としての縄文は付けられず、65は摩滅のため不明であるが、他はRL縄文が付けられる。64の口縁は屈曲して大きく肥厚し、深い沈線により対向弧文が描かれる。67は口縁下端に沈線が描かれる。61～69は津雲A式と考えられる。70・71は同一個体と思われる。70の入れ子状に重なる鉤形の文様は方形区画文の可能性はある。

72は浅鉢形で、3本沈線内にRL縄文が飾られる磨消縄文土器である。口縁内側には二本の沈線間に縄文を付ける。73・74は口縁部が内湾する鉢形土器で、73は3本沈線による磨消縄文が飾られる。口縁の文様帯は渦巻文を取り込んでおり、この部分が波頂となるようである。口縁に平行する線と渦巻文との交点には円形刺突が付けられる。74は2本沈線の磨消縄文土器である。75～77は、くびれる形の頸部の下に丸く膨らみ胴部を作る鉢形土器で、外反した口縁の端部と胴部にRL縄文が付く。78は75～77と共通した器形をもつ深鉢形土器。79～84は外反する口縁をもつ深鉢形土器で、79・80は波状口縁となる。79は口縁端外側を少し肥厚させ、RL縄文を付ける。同じ場所の内側にも縄原体を転がし、下端に横位沈線を引く。波頂部では沈線が少し途切れ、その直上に1本の短線で内文が描かれる。80～82は口縁の内外面にRL縄文帯を有し、その下端は沈線で区画される。83は口縁外面の少し下の位置に横位沈線を引き、やや広めのL縄文帯としているが、内面は沈線だけとなっている。84は口縁の内外面に横位沈線を引き、内面は縄文帯となる。その文様は小さな放物線状の縄圧痕が連続し、各々の右端は隣のものに切られている。放物線の中には斜行縄文が2、3条現れる。縄文原体として、1段の縄(L)を軸の縄(RL?)に左撚りに巻き絡げたものが想定され、ループ状になった末端部を用いたと考えられる。口唇の狭い範囲にRL縄文が施文されるが、口縁外面は巻貝条痕と思われる調整がみられるだけで縄文帯とはならない。内面の沈線は土器片の左端で途切れ、こ

の場所の沈線内には3つの円形刺突が並ぶ。85・86は深鉢形土器で、頸部と胴部の境に太めで浅い沈線を引き、85の胴部にはR L縄文、86の胴部にはL無節縄文が付けられている。87～89は深鉢形土器の胴部と思われる。87には84と同様の縄文が密に付けられる。88・89にはR L縄文が施文される。72～89は概ね彦崎K II式を中心とし、先行する段階のものが含まれると考えられる。

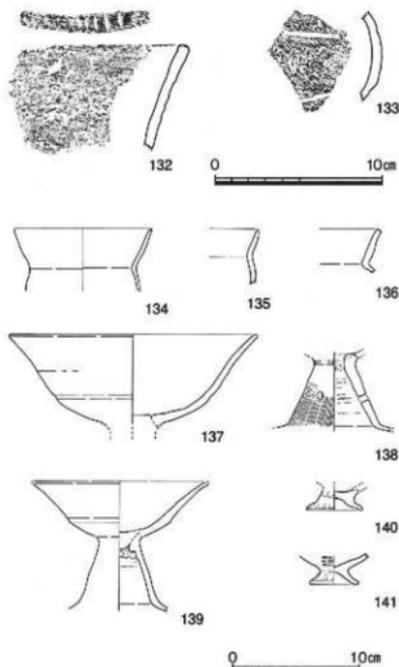
#### 後期の無文土器(第47・48図)

90は胴部が丸く膨らむ器形と予想され、福田K II式の深鉢形土器に類例が求められる。91は器面調整が90と共通し、胎土がよく似ている。92は大きめの砂粒が含まれ、作りの粗さが目立つ。外面には巻貝条痕調整が施される。93～96は口唇部に刻目をもつ。95は波状口縁となる。97～100は口縁を外側に肥厚する形態から津雲A式に伴うと考えられる。101は文様が確認できないため無文土器に含めたが、頸部に垂下条線などの施文がある有文土器かもしれない。口縁内側を肥厚する形態から彦崎K I式に伴うと考えられる。

102～112は鉢あるいは浅鉢の器形と思われる。106の復元値は、口径24.6cm、器高9.6cm、底径4.2cmである。107の口縁は小さな波状をなし、口縁端内側には面取りが加わる。111の外面には横方向に面取りするような強いナデ調整が施される。112は外反する口縁の端部外側に面を作る。胴部の張りは弱いが、75～77と同じような器形と思われる。113～120は深鉢形土器と思われる。113は口縁に弱い肥厚帯をもち、内側は面取りされる。114・115の口縁端は角張った形状で、115の口縁端面には巻貝条痕調整が施される。116は波状口縁をなし、口縁端は尖った形状。117～120は111と同様に強いナデ調整が内外面に施される。102～120の多くは彦崎K II式もしくはそれに先行する段階のものに伴うと思われる。

#### 底部・その他(第49図)

121～123は特徴的な凹底を呈する中期の土器である。121・122の胴部には燃糸文が縦走り、黒木II式と考えられる。123には、22～33と同じ縄文原体を用いたと推測されるL R縄文が付けられ、船元II式に属すると考えられる。124～130は文様の有無や調整等が不明である。高台をもつもの(124～126)、中央がわずかに凹む平底に近いもの(127・128)、小さい凹底で、中央にへソ状の窪みをもつもの(129・130)がある。131は土製品の一部あるいは土器の装飾部分が剥離したのと考えられる。円筒を縦割りにしたような形で、一方の端が急に厚みを増して張り出す。



第50図 2区出土の土器(S=1/3)

粘土帯を5本つないで成形した痕が内面に残る。横置きで安定するが、基底部の形状から円筒に近い曲面に貼り付けられていたと考えられる。ただし、接着面積は狭く、貼り付け粘土の付着はみられない。表面は摩滅しているため文様は確認できないが、別の個体の断片には縄文の圧痕がわずかに認められる。長さ6.8cm、幅3.2cm、高さ1.6cm～3.3cmを測る。側面観のイメージから土面の「鼻」を候補に挙げたいが、鼻孔の表現がなく、眉間とのつながりが理解できないなど疑問点が多い。

(2) 2区包含層出土の土器(第50図)

132・133は縄文土器である。132は口唇部に刻目をもつ。133は内湾する口縁部で、沈線に囲まれた内側に1区出土の84・87の文様とよく似た縄文が付けられている。

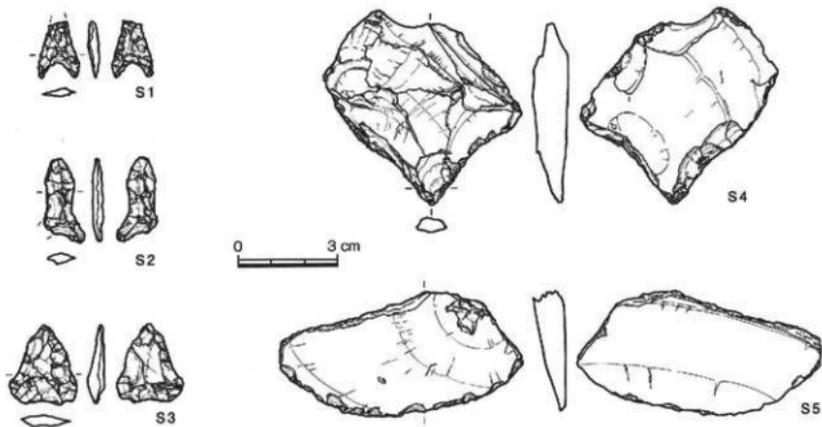
134～141は古墳時代の土器である。134～136は小形の丸底壺と思われる。137～139は土師器の高杯である。138の脚部の中央の高さに三方向の円孔が開けられる。140・141は製塩土器の脚台で、器表には指痕が残る。141では体部に平行タキが認められる。

3 石器

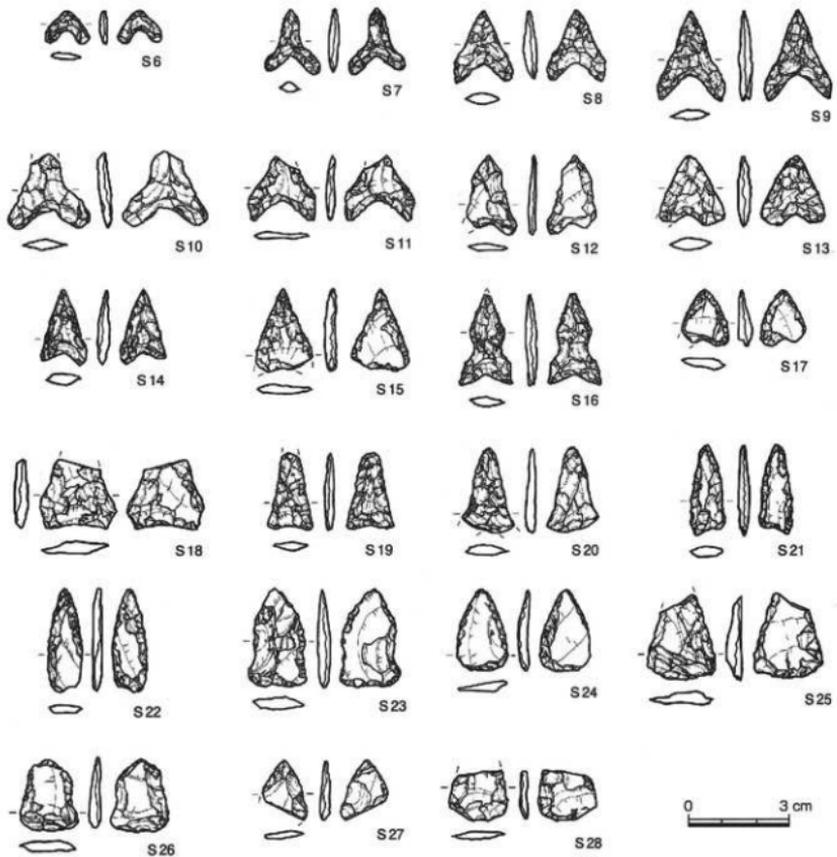
(1) 確認調査出土の石器(第51図)

確認調査においてはトレンチ6・7から計78点のサヌカイト製石器、そして3点の流紋岩剥片が出土している。サヌカイトの総重量は637.1gである。器種として明確なものはトレンチ6から石鏃2点、スクレイパー1点、二次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片1点、トレンチ7から石鏃1点、使用痕のある剥片1点が出土している。

S1～S3は石鏃である。S1・S2は凹基鏃である。S1の抉りはやや深く、逆刺が鋭く作り出されている。S2の形状は縦長で、側縁はS字状を呈し、抉りは浅い。表面はよく風化している。S3は平基鏃である。調整は比較的粗雑で背面・腹面共に素材面を残している。基端部は尖っておらず、削り落としたかのような形状を呈する。



第51図 確認調査出土の石器 (S=2/3)



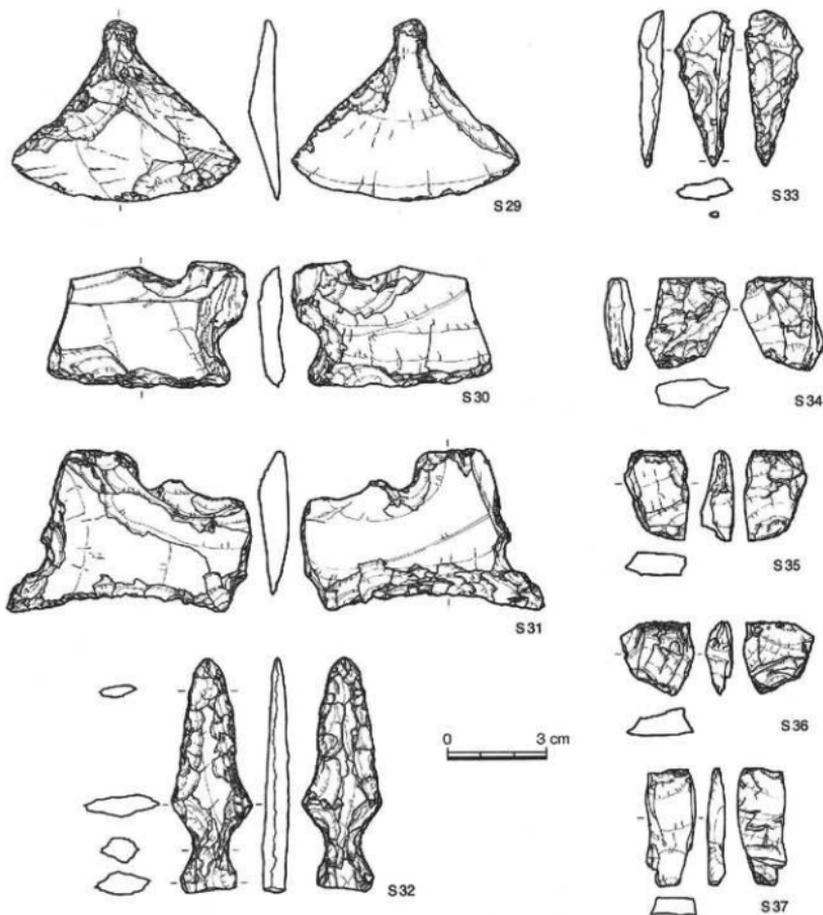
第52図 1区出土の石器1 (S=2/3)

S4はスクレイパーとしたが、図の下方を尖らせる意図を持って加工が行われているようであり、単に切ったり削ったりする以外の用途を想定して製作された可能性がある。鏝としては尖鋭度が低く、使用痕も認められない。

S5は使用痕のある剥片である。原礫面を打面とした剥片を用いており、刃部には細かいが不連続な剥離が認められる。

#### (2) 1区出土の石器(第52～67図、図版16～19)

1区からはサヌカイト製石器・剥片など796点のほか、流紋岩製石器・剥片他38点、黒曜石剥片2点、粘板岩製石斧1点、砂岩などで作られた磨石類が出土している。サヌカイトの総重量は13.1562g



第53図 1区出土の石器2 (S=2/3)

である。流紋岩は611.4g、黒曜石は5.4gである。石材の産地分析は行っていないが、サヌカイトは地理的条件から香川県からもたらされたものがほとんどであると考えてよいであろう。石鏃を除く流紋岩については、緑灰色を呈しガラス質が強いという特徴から市内玉島黒崎で産出するものと考えられる。黒曜石はやや白っぽく節理が入っているという特徴から大分県の姫島産と推定できる。器種として明確なものは石鏃23点、石匙3点、異形石器1点、楔形石器12点、スクレイパー23点、二次加工のある剥片18点、使用痕のある剥片7点、敲石1点、石斧1点、磨石類7点などがある。また、石器製作の素材として香川県側から搬入されたと考えられる板状剥片や原石も出土している。

S6～28は石鏃である。S15が流紋岩製である以外は全てサヌカイト製である。S6～S20は凹基鏃である。S6～S11は挟りがやや深く、S12～S20は浅めである。S6は小型で幅広い形状から前期に属するものと推定される。S8・S9・S11は側縁部が先端から基端に向かってやや内湾し、基端の手前でもう一度内側に屈曲する形状を呈する。S8・S9は細かく丁寧な調整加工が施されていることから前期に属すると考えられる。S10～S12は腹背面両面に素材面を残し、調整剥離も粗雑であることから後期のものである可能性が指摘できる。S15も腹背面両面に素材面を残し、周縁部にのみ細かい加工を施して形を整えており、先端は鋭く尖っている。石材である流紋岩は火砕流堆積物の固まったもので、玉島黒崎地区で産出するガラス質の流紋岩とは異なっており、産地は不明である。S16は縦長で両側縁に挟りが入る形状である。側縁はわずかに鋸歯状を呈する。S18は幅広く、先端を欠損しているが、基端部を削り落としたかのような形状を呈する。S19・S20はやや長細い形状を呈し、特にS20は基辺付近が外反するようである。S21・S22はやはり細長い形状であるが、基端は内向きで基部に若干の挟りが認められる。腹背面両面に素材面を残し、周縁部にのみ細かい加工を施して形を整えている。

S23～S26・S28は平基鏃である。いずれも調整は粗雑で外周部に浅い加工を施して形を整え、背面・腹面共に素材面を残したものが多。S23・S26は側縁に変換点があり五角形状を呈する。S24は椎突状の平面形を呈している。

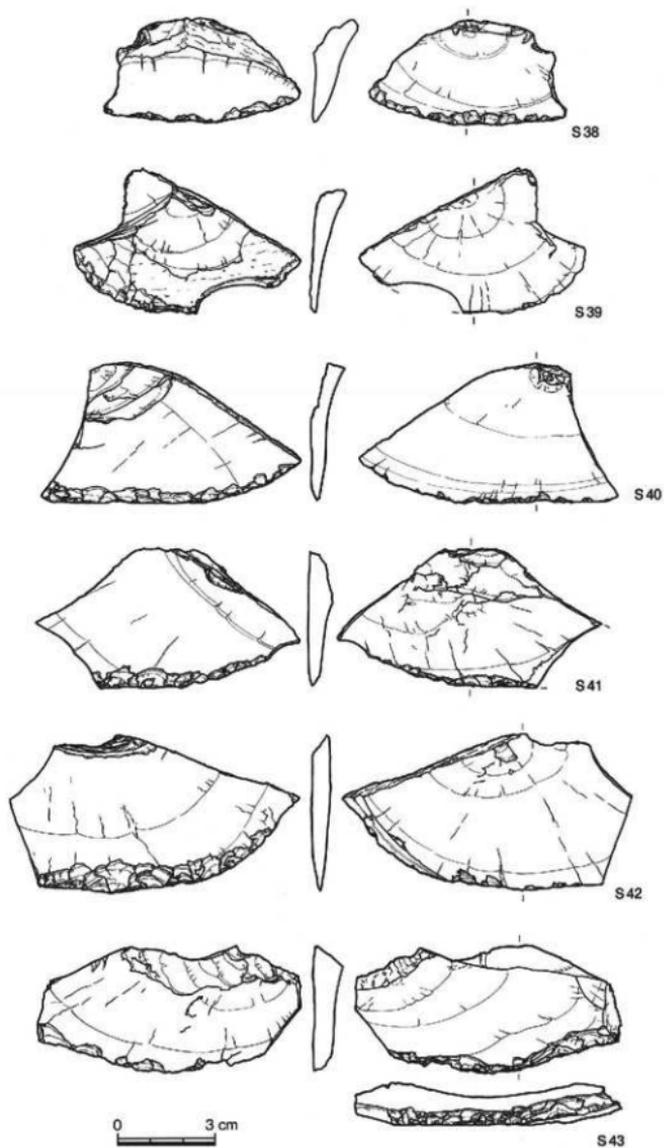
S27は基部を欠損しており、形態は不明である。

S29～S31はサヌカイト製の石匙である。S29は二等辺三角形の頂角部につまみを設けた形状を呈するもので、中部瀬戸内地域においては前期(磯の森式期)に特有の石匙である。つまみ部は小さく、細かい加工で作り出されている。一方、刃部に目立った加工は施されておらず、外反する刃部は素材となった剥片の縁をほぼそのまま利用している。S30・S31は刃部に対して斜め方向につまみ部が位置するものである。両方とも長方形に加工された素材の隣り合う長辺と短辺に挟りを入れて大きめのつまみを作り出している。S30の刃部は交互剥離によって作り出され、ほぼ直線状を呈している。一方、S31の刃部はやはり交互剥離によって作り出されているが、内反している点が異なっている。また、挟りのある辺の一方を尖らせるように加工しており、刺突具としての使用も考慮して作られていると考えられる。

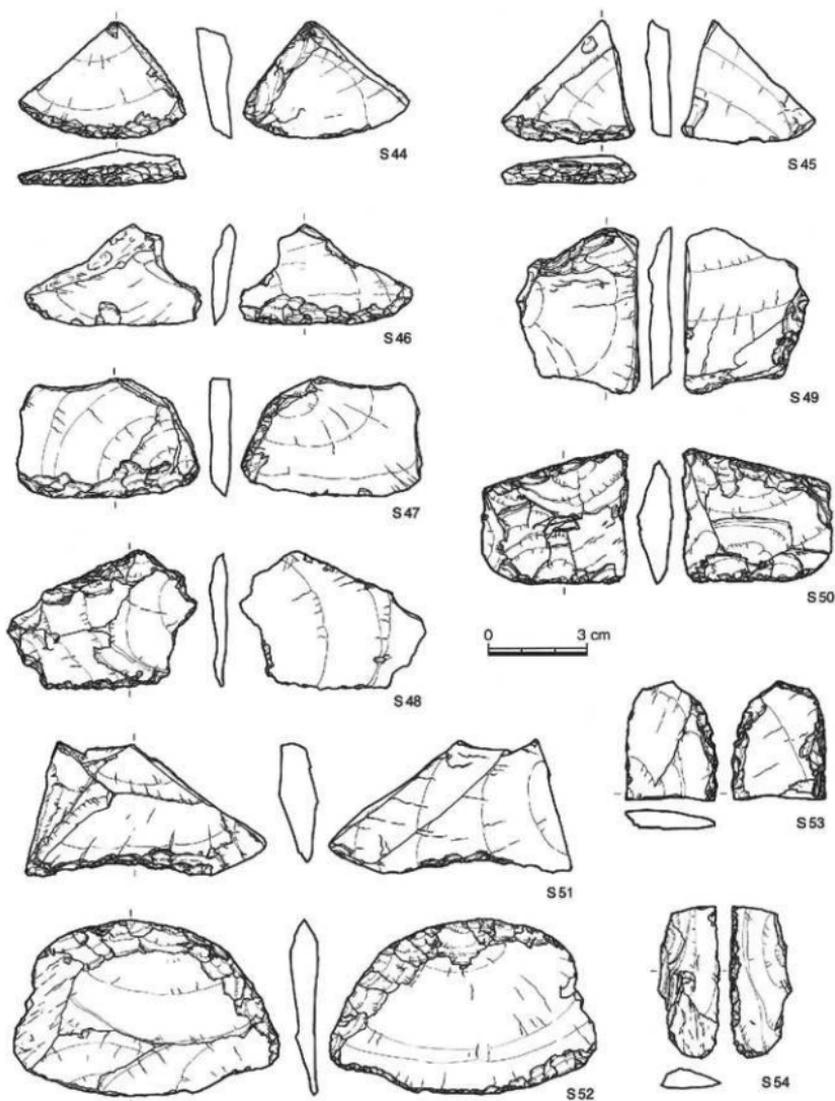
S32はサヌカイト製で、石槍の両側縁に挟りをいれたかのような形状を呈する。図の下端部が折れており、これが意図的なものか破損なのかは不明である。この部分をつまみとすれば石匙と言えないこともないが、周辺地域での類例は認められない。また、挟りの上方は一度外側に張り出した後に刃部へとつながる。刃部は交互剥離によって丁寧に作り出されているが、先端も丸く作られ石槍としても鋭利さに欠けているように見受けられる。こうした点から、本稿では異形石器とした。

S33はサヌカイト製の石錐である。刃部を細長く作り出したものではなく、素材となった剥片の打点も残っており、素材剥片の形状をある程度留めている。基部と刃部の境は不明瞭であるが、交互剥離によって丁寧に成形されている。先端4mmほどには回転動作による使用痕も明瞭に残されている。

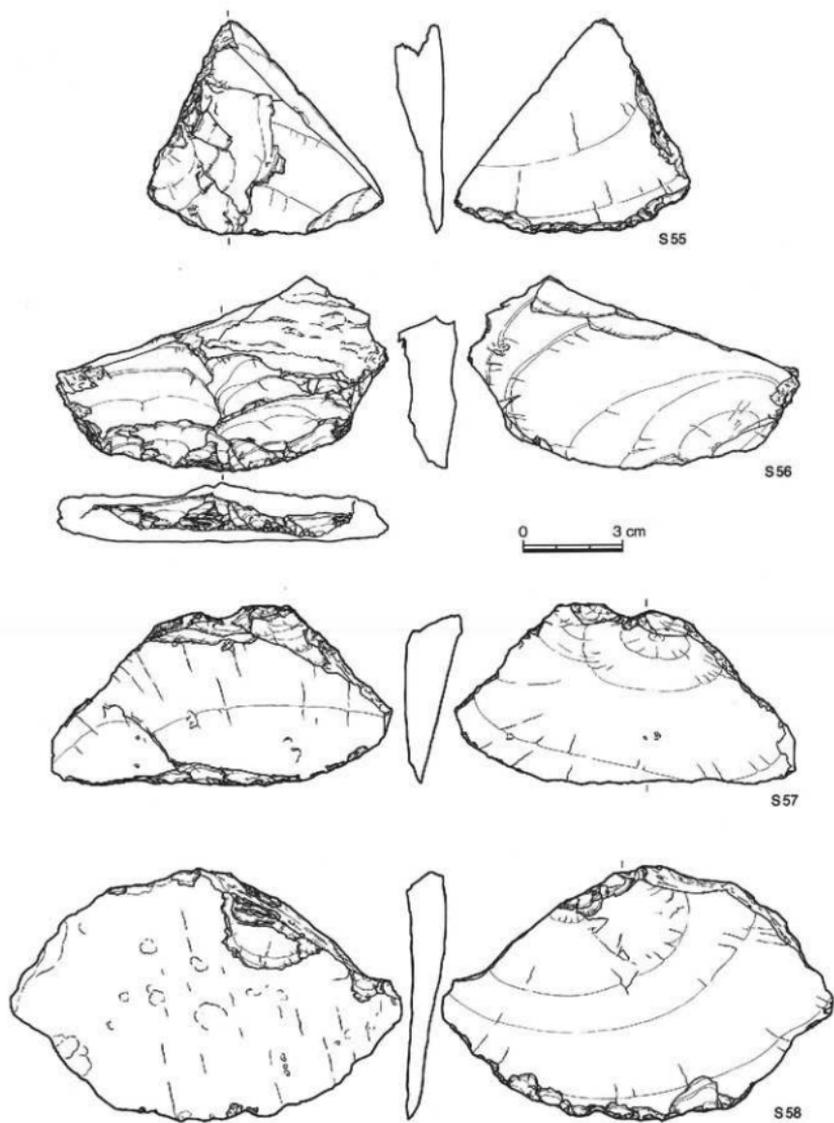
S34～S37はサヌカイト製の楔形石器である。Ⅰ区で楔形石器としたものは12点であるが、このうち4点を図化した。S34・S35は上下がつぶれており、両側縁に剪断面を持つ。S36もやはり上下が



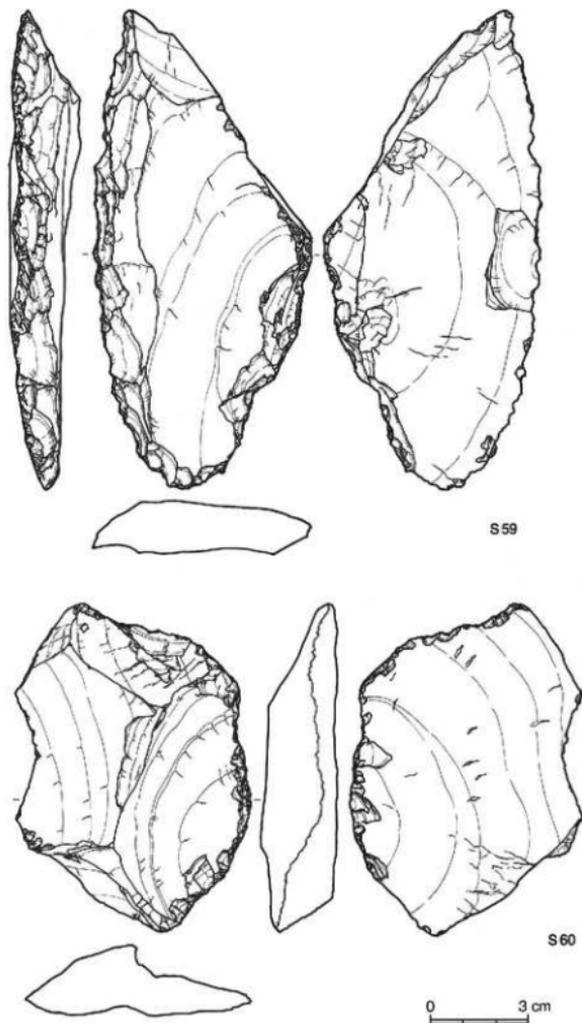
第54図 1区出土の石器3 (S=2/3)



第55図 1区出土の石器4 (S=2/3)



第56図 1区出土の石器5 (S=2/3)

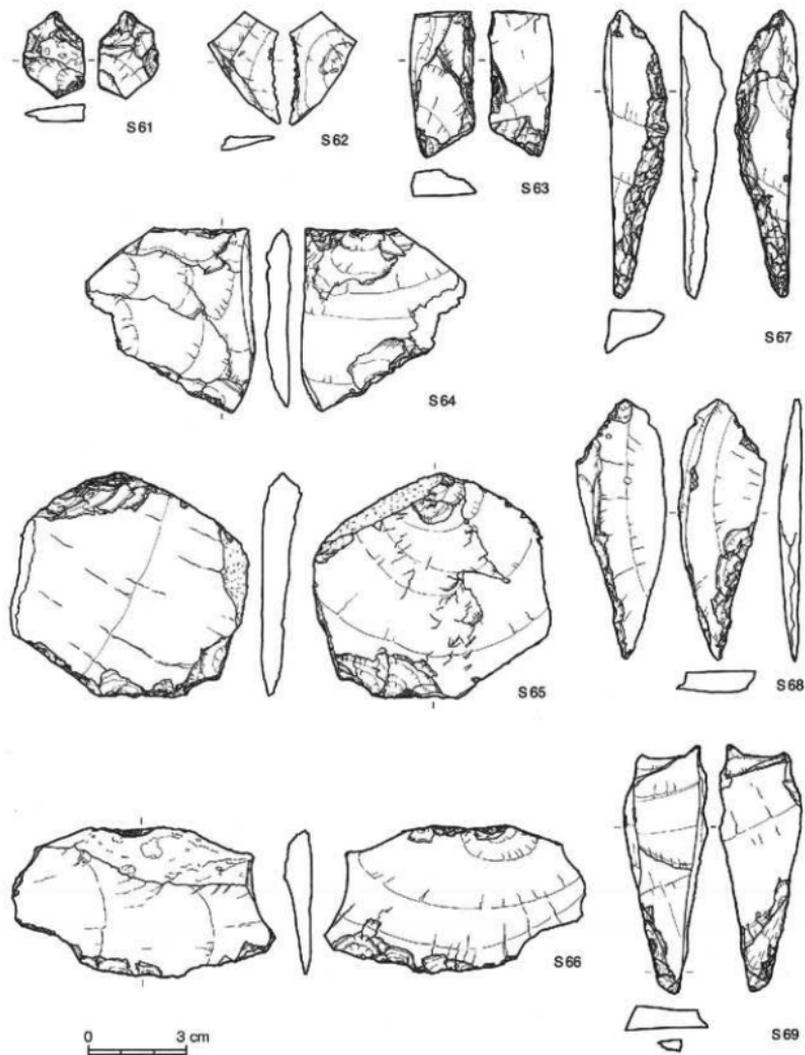


第57図 1区出土の石器6 (S=2/3)

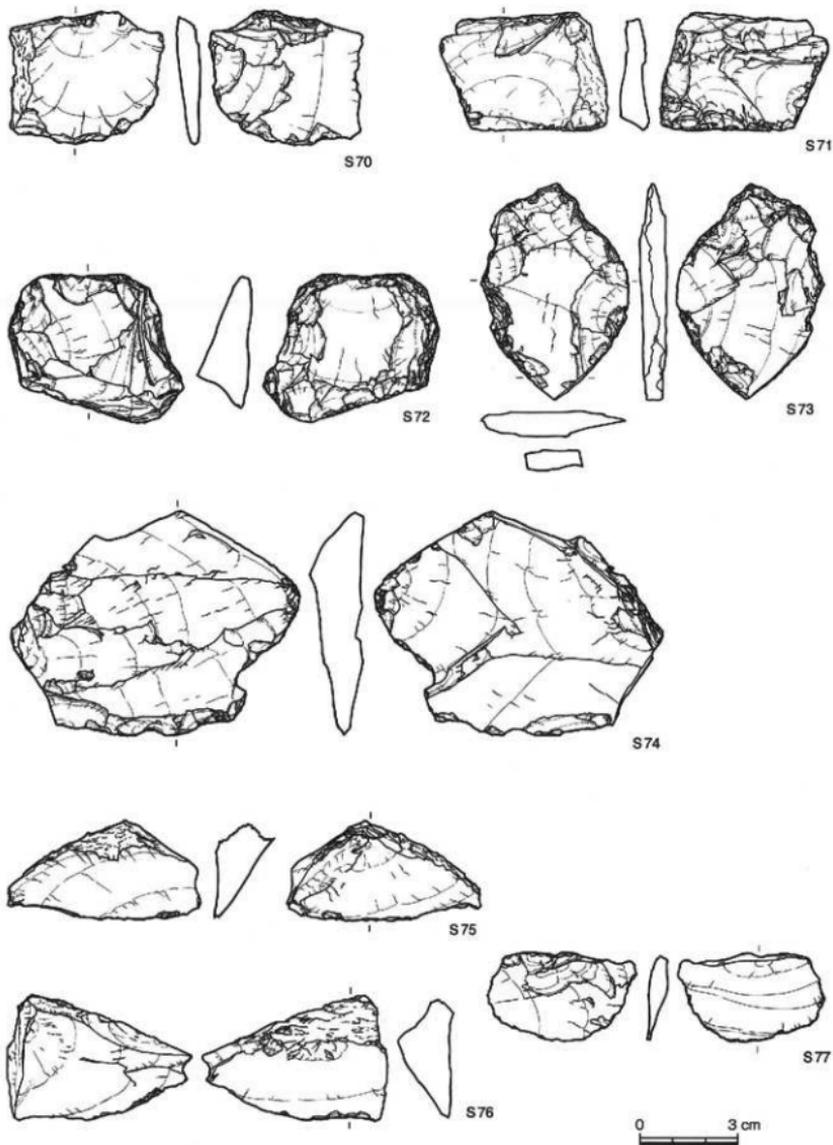
むしろ端辺に丁寧な交互剥離を行って木葉形の形状を作り出している。S55の刃部は外反しており、腹面側に角度の急な加工で作られ出されている。素材となった剥片の打点は折り取られている。S56～S60は大型の剥片を素材としたものである。スクレイパーよりもむしろ、他の石器の素材となる板状

つぶれているが、剪断面は片方の側縁のみに認められる。S37は縦長の形状を呈し、上下は潰れている。剪断面は片方の側縁のみ認められ、もう一方の側縁は折り取られたものようである。

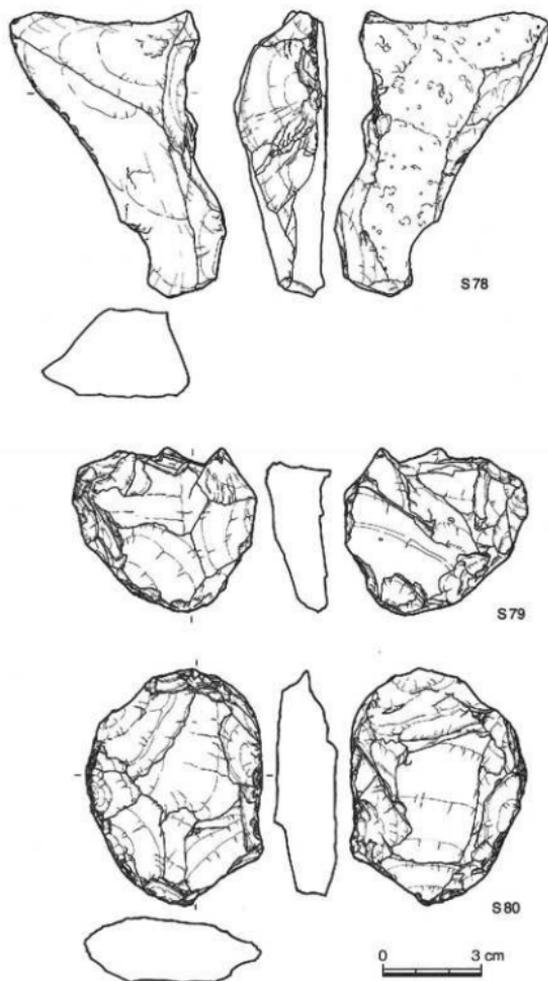
S38～S60はスクレイパーである。S60が流紋岩製である以外は全てサヌカイト製である。S38～S44・S47は素材となった剥片の打点を残しており、刃部は外反している。S38・S40～S42の刃部は両面加工ではあるが、S38は背面側、S40・S42は腹面側の加工が弱い。S39・S43～S49は片面加工である。特にS43～S45・S47は刃部を急な角度で加工している。S50は上下を交互剥離によって丁寧に加工しており、一辺は剪断面となっている。楔形石器に分類すべきか、あるいは石槍などの未製品かもしれない。S51はやや厚手の剥片を利用しており、刃部は両面加工でやや内反している。S52はやや大型の剥片を用いており、刃部よりも



第58図 1区出土の石器7 (S=2/3)



第59図 1区出土の石器8 (S=2/3)

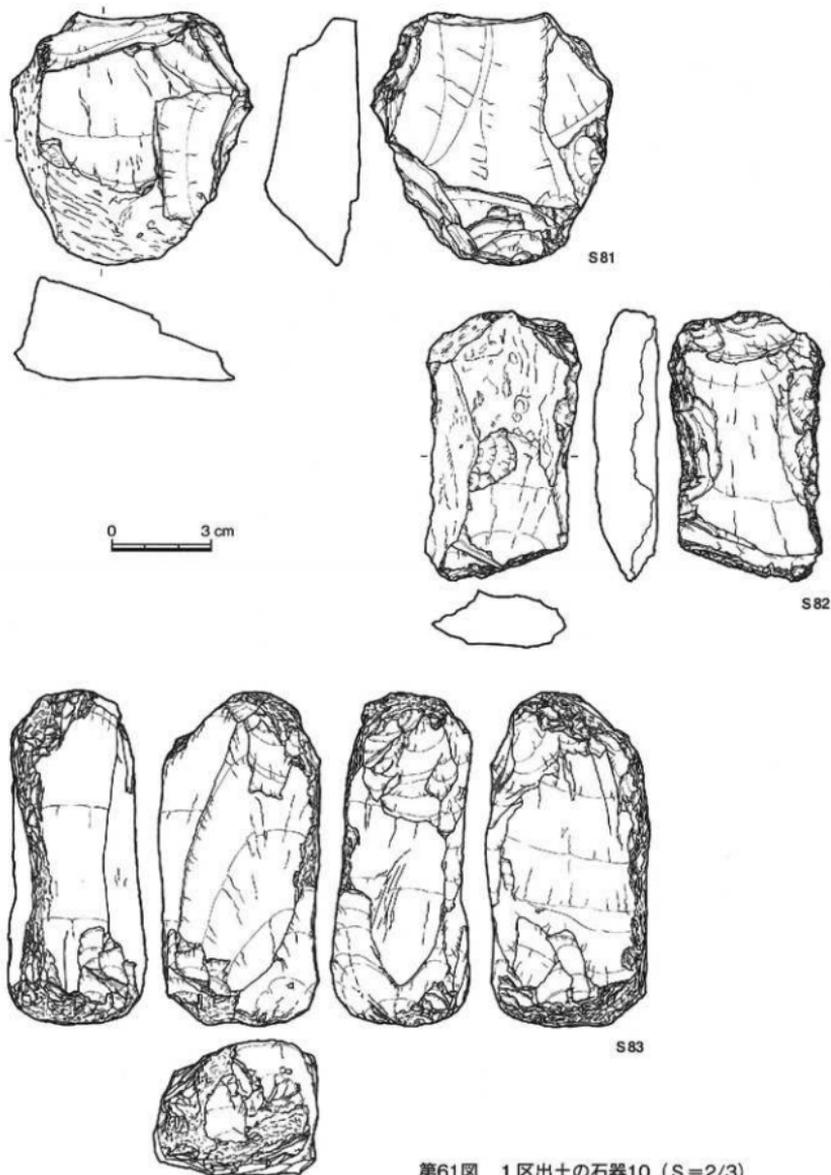


第60図 1区出土の石器9 (S=2/3)

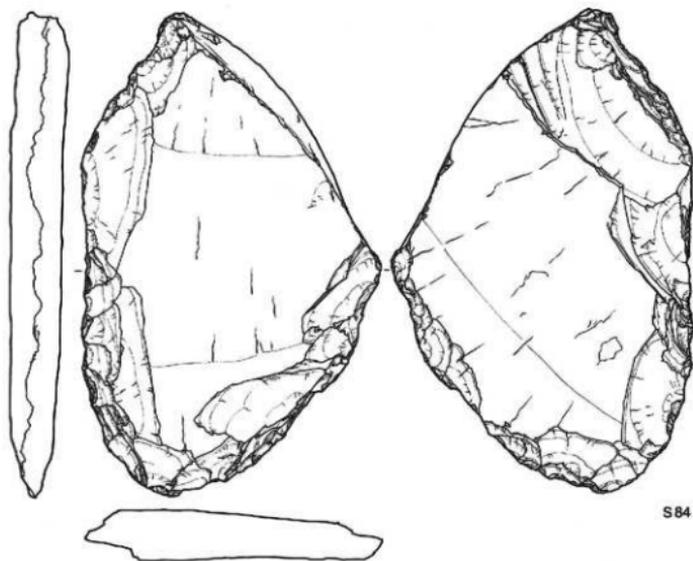
で、交互剥離による刃部が作り出されているが、スクレイパーとするにはやや加工が粗雑なようであるので、ここに含めた。S67は厚手の剥片の一边を交互剥離によって丁寧に加工したものである。何らかの刺突具のようでもあるが、錐にしては使用痕もなく、尖鋭度も低い。S68は打点を折り取った薄手の剥片の一边に交互剥離を施している。S71は上下に若干の加工と潰れが認められることから楔

剥片に分類すべきものも含まれている可能性がある。S56～S59はサヌカイト製で、素材となった剥片の打点を残し、刃部は片面加工である。S56は厚手で、打点のある側面の背面側に急な角度の刃部加工が施されている。S58の背面は原礫面で、腹面側に角度の緩やかな刃部加工が施されている。S59は横長、厚手の大型剥片で、角度の急な刃部加工が背面側に施されている。S60は流紋岩製で、分厚い不定形剥片を素材としている。刃部は打点のある側面に細かい両面加工を施して作り出している。

S61～S74は二次加工のある剥片である。すべてサヌカイト製である。S61は交互剥離によって尖頭部を作り出しており、石鏃か石錐の未製品の可能性がある。背面側に原礫面を残している。S62は一边に腹面側から鋸歯状の加工が施されている。S63は交互剥離によって刃部が作り出されており、スクレイパーの破片の可能性もあるが、腹面側に研磨痕が認められる。S66は打点を残す横長の剥片

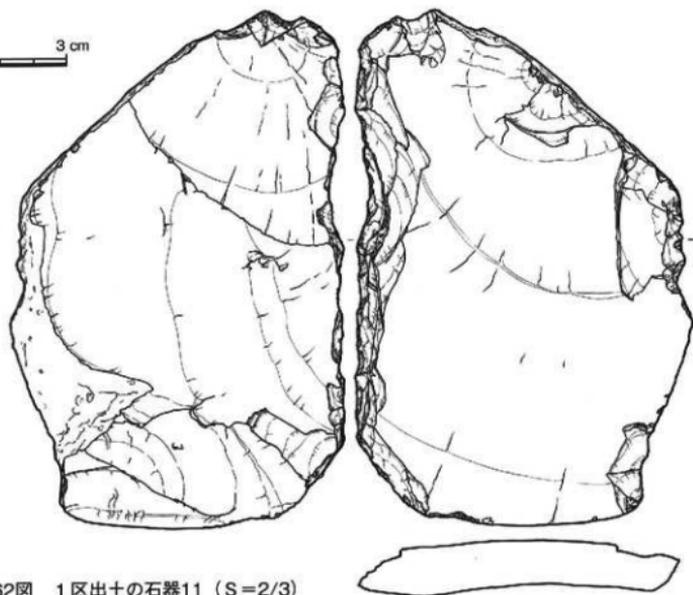


第61図 1区出土の石器10 (S=2/3)



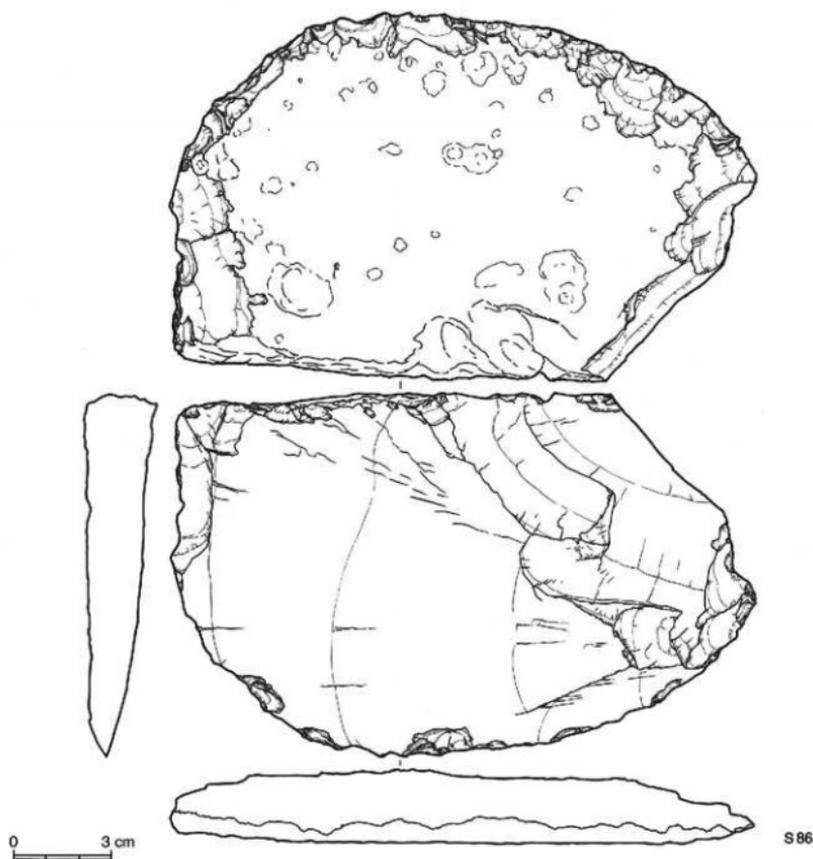
S84

0 3 cm



S85

第62図 1区出土の石器11 (S=2/3)

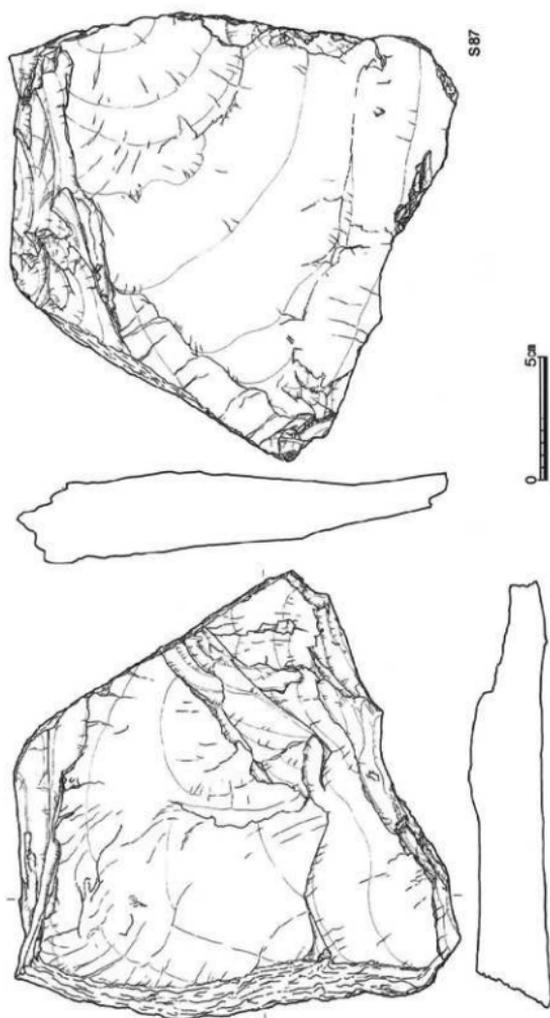


第63図 1区出土の石器12 (S=2/3)

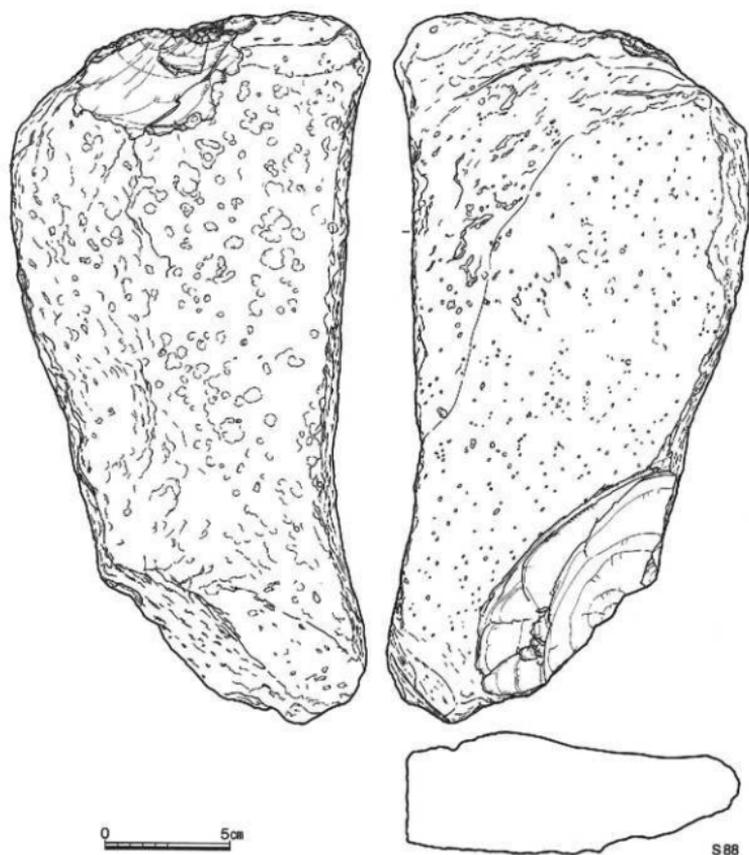
形石器の可能性もあるが、左右に剪断面が認められないことから、ここに含めた。S72は全周に渡って細かい剥離およびつぶれが認められる。残核とすべきかもしれない。S73は折れ面となった部分を交互剥離によって加工していく途中で放棄されたものようである。石匙等の未製品の可能性がある。

S75～S77は使用痕のある剥片である。S75・S76はサヌカイト製で、礫面を打面とする横長の剥片を使用している。S77は流紋岩製の不定形剥片を用いたものである。

S78～S82はサヌカイト製の石核である。S78は原礫面を打面として不定形剥片を剥離している。S79～S81は求心状に不定形剥片を剥離していくもので、特にS80は円盤状になっている。S79は風化が著しく、剥離の前後関係が不明確である。S81は原礫面が残っており、大型の板状剥片から石



第64図 1区出土の石器13 (S=1/2)

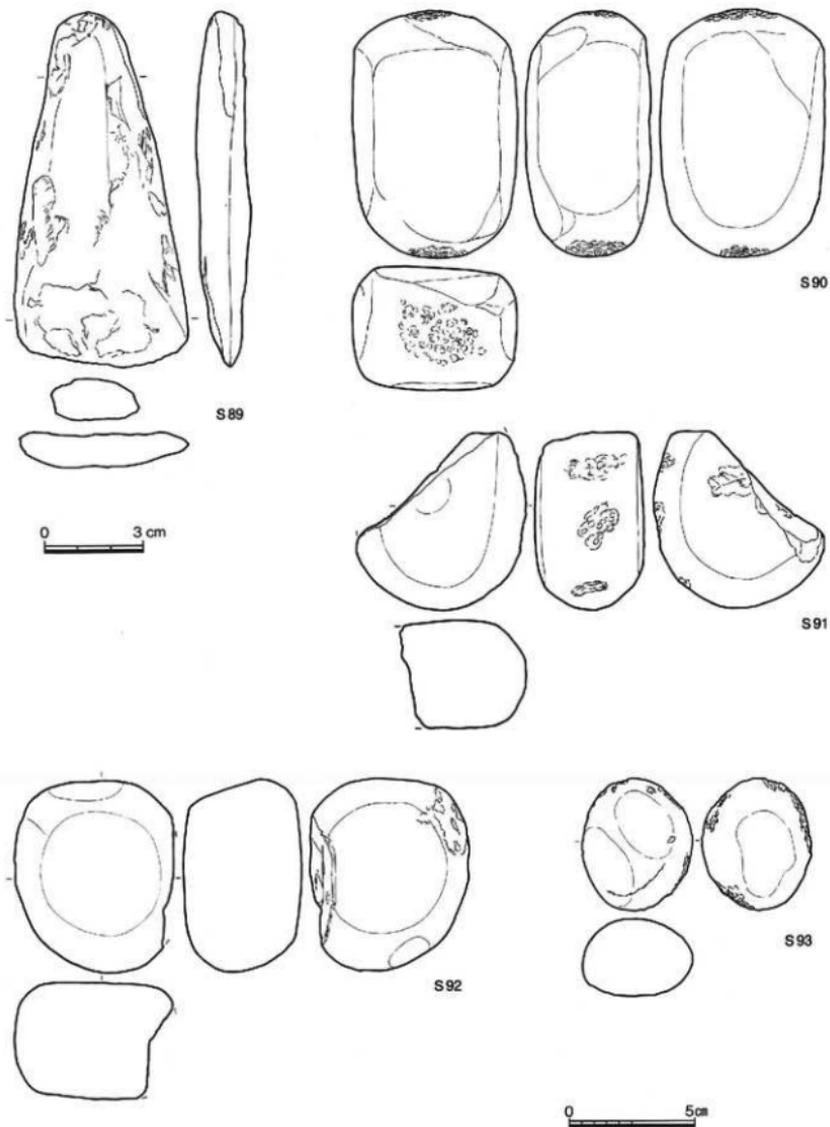


第65図 1区出土の石器14 (S=1/2)

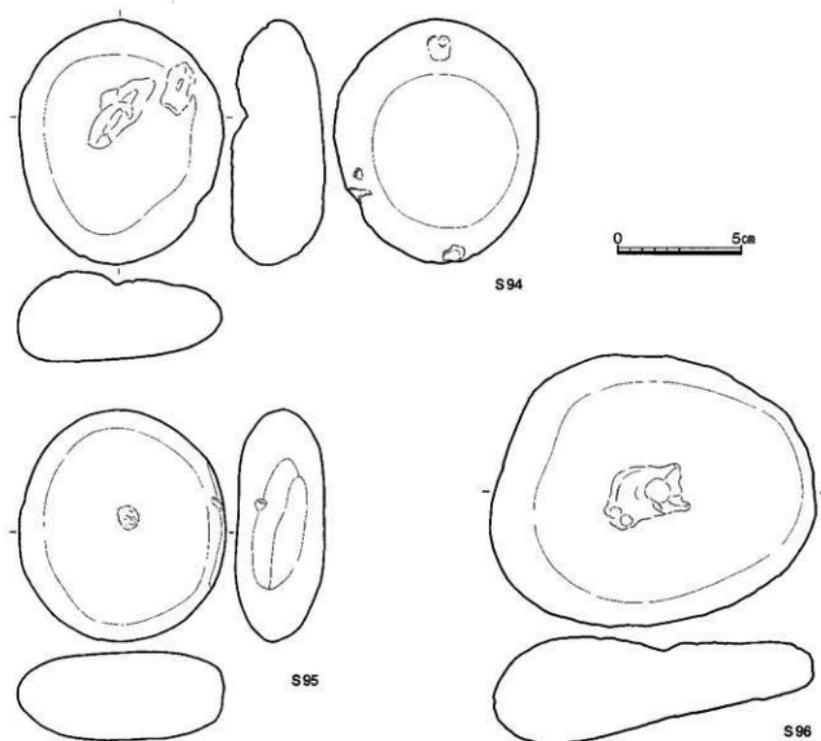
器の素材となる剥片を剥離していった残核と考えられる。S82は長方形の平面形状を呈し、内三辺で不定形の剥片を剥離している。打面側には原礫面が大きく残り、また作業面側にも素材の腹面が広く残っていることから、有意な剥片をそれほど剥離できていない可能性が高い。

S83はサヌカイト製の敲石である。角柱状を呈し、上下は敲打によって非常によく潰れている。また、側辺の角部もよく潰されており、握ると手のひらにちょうど収まるよう加工されていることがわかる。

S84～S87はサヌカイト製の板状剥片である。S84は三角形形状を呈し一辺を除く二辺に交互剥離が行われており、打点は失われている。S85は長方形形状を呈する。形を整えるための加工は一辺にのみ



第66図 1区出土の石器15 (S=2/3・S=1/2)



第67図 1区出土の石器16 (S=1/2)

施されており、対辺には原礫面が残っている。また打面も原礫面である。S86は背面に原礫面を残す板状剥片である。打点は折り取られているようである。形を整えるための加工は一辺にのみ施されている。S87は今回の調査で出土した最も大きな板状剥片であり、重量は1.36kgである。ほぼ四角形で、対となる二辺に原礫面を残す分厚い剥片である。

S88はサヌカイトの原石で、重量2.86kgである。細長く板状を呈している。上下を打ち割っており、石材採取時に試し割りをした痕跡ではないかと考えられる。

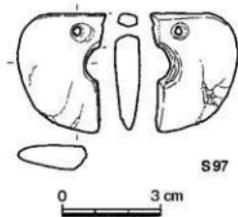
S89は粘板岩製の磨製石斧である。基部は基端に向かうほど細くなり、平面形状は定角式石斧に似ている。しかし、石斧主面との間の稜は基端付近にしか認められない。全体に薄手で、刃部も厚みはなく、刃は両刃で、直刃に近いがやや丸みを帯びている。鑿は認められない。使用痕跡は明瞭でないが、基部には摩耗痕が残っている。これが加工時のものか、柄に装着した際に付いたものかは不明である。

S90～S96は磨石類である。S90～92・S94・S95は砂岩製、S93・S96は花崗岩製である。S90は整っ

た長方体状を呈し、上下2ヵ所の敲打痕と、4面に摩耗痕が認められる。S91は欠損しているが、楕円形を呈していたと思われる。残存部分には敲打痕4ヵ所、摩耗痕2面が認められる。赤褐色を呈する部分があり、火を受けている可能性がある。S92も一部欠損している。ややびつな楕円形であるが、敲打痕1ヵ所、摩耗痕4面が認められる。S93は小ぶりである。摩耗痕3面が認められ、周囲に敲打痕が3ヵ所以上認められる。S94は凹石である。凹面とその裏面には摩耗痕も認められる。S95は円形の磨石である。摩耗痕は側部の1ヵ所にのみ認められる。S96はやや大きめの凹石である。凹は1ヵ所だけである。

### (3) 1区出土の装身具(第68図、図版19)

S97は蠟石製塊状耳飾の半欠品である。非常に柔らかい蠟石を用いている。薄手で、やや肩のはる平面形状をしており、表面には擦痕も認められる。孔は径1.1cm程に復元でき、頭幅1.05cm、切目長1.5cmとやや上部にあがっている。補修孔は径0.25cm、穿孔は両側から行われており、錐の痕跡は明瞭である。



第68図 塊状耳飾  
(S=2/3)

### (4) 2区出土の石器(第69図～第70図、図版20)

2区からはサヌカイト製石器・剥片等89点が出土している。サヌカイトの総重量は1,256.7gである。器種として明確なものは石鏃4点、楔形石器1点、スクレイパー3点、二次加工のある剥片2点、使用痕のある剥片3点、敲石1点などがある。

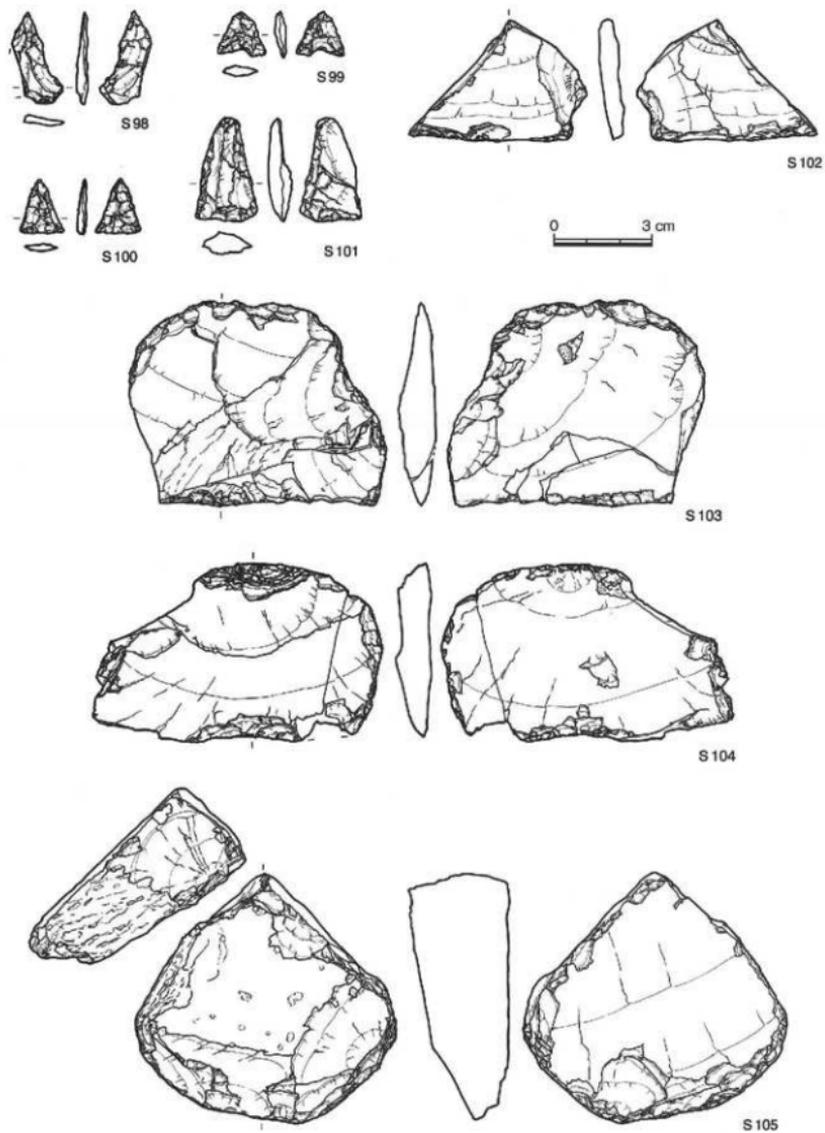
S98～S101はサヌカイト製の石鏃である。S98・S99は凹基鏃である。S98は挟りが浅く、調整加工も粗雑であるが、尖端は鋭く成形されている。S99も挟りは浅いが、調整は丁寧である。側辺が途中で屈曲し、平面形は五角形状を呈する。S100・S101は平基鏃である。S100はやや縦長の二等辺三角形を呈し、調整は丁寧に行われている。S101はやや大型・厚手で調整もやや粗雑である。

S102～S104はサヌカイト製のスクレイパーである。S103の刃部は直線上で両面加工によって成形されている。また、端辺も交互剥離によって弧状に成形されている。S104は打点を残すやや横長の剥片を用いている。刃部加工は交互剥離による両面加工によって成形されているが、一辺の全てに及んでおらず、未製品の可能性もある。

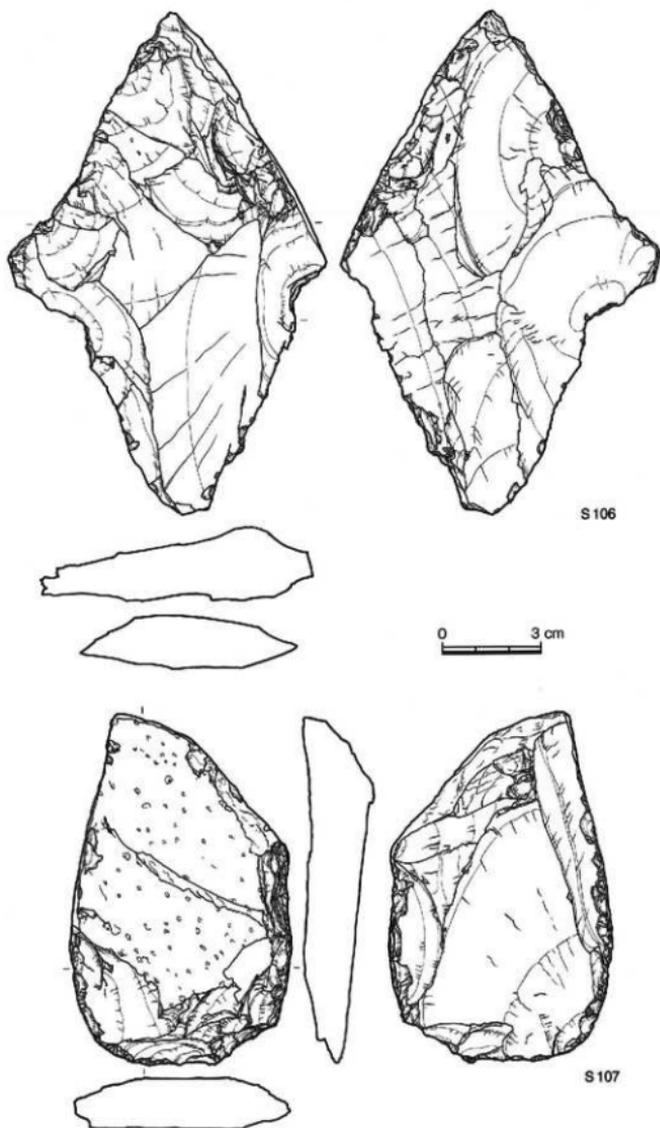
S105はサヌカイト製である。厚さ3.09cmの剥片を使用しており、平面形は扇状を呈している。腹面は原礫面である。残核とも考えられるが、弧状となった側辺が非常によく潰れていることから、ここでは敲石とした。

S106はサヌカイト製の石核である。平行四辺形の板状を呈し、全ての辺で不定形剥片あるいは横長状の剥片を剥離している。図の上方にあたる二辺では、原礫面あるいは分割面を打面として剥片を剥離しているのに対し、下方の辺では腹背面を打面として剥片剥離を行っている。

S107はサヌカイト製の板状剥片である。一見石鏃状を呈するが、使用痕等が認められないことから板状剥片に含めた。背面は大部分が原礫面である。



第69図 2区出土の石器1 (S=2/3)



第70図 2区出土の石器2 (S=2/3)

### 第3節 まとめにかえて

#### 1 縄文時代の溝落遺跡について

今回の調査で検出された遺構等は、縄文時代の遺物包含層、古墳時代中期の溝、時期不明のピットである。遺物包含層は扇状地の堆積層の上に重なる二次堆積層と考えられ、縄文時代の遺構は検出されなかった。しかし、限られた調査区の中で、早期から後期までの土器、石器等がある程度まとまって出土することは調査前には予想されなかった。包含層の調査とはいえ、貝塚における廃棄のありかたとどこか共通するものがあるのでは、と思われるくらい遺物の内容は多岐に及んでいる。その中でも特に今回の調査で注目されるのがサヌカイト製板状素材などの石器類である。その出土遺物について記述する前に、まず縄文時代の遺跡について今後の課題を含めて少しまとめてみたい。

溝落遺跡では現在までのところ周辺を含めて貝層は発見されていない。貝塚密集地帯である高梁川河口沖の内海沿岸から遠く離れたこの場所では食川に適した貝類が高密度に繁殖する自然環境がなかったと考えられる。ここから北4kmの海岸に位置する広江・浜遺跡も同じような環境に置かれていた。これらの遺跡も多くの貝塚と同じく、山地を背負う臨海性の縄文遺跡である。有効な食糧獲得の手段（漁撈、狩猟、採集）があり、生活に必要な薪、木材、植物のつるなどの物資が日常的に手に入り、海路が開けているなど当時の縄文人が求める条件が備わる場所を選んだと理解される。

さて、溝落遺跡から西に100mほど下ると水鳥灘沿岸の砂浜海岸に到達する。このあたり一帯には古墳時代後期の土器製塩遺跡として知られる金浜遺跡があり、浄化層工事の際に多量の師楽式製塩土器に混じって百片を超える縄文土器が出土している<sup>(1)</sup>。その内容をおおまかに示すと、中期（船元Ⅰ式～矢部奥田式）が多数を占め、溝落遺跡でわずかに出土した里木Ⅱ式が比較的多いのは注意される。中期に比べ後期（中津式、彦崎Ⅰ式など）の出土量は少ない。1地点における包含状況であるが、全型式が溝落遺跡からも出土していることを重視し、両遺跡を合わせた範囲を海浜集落として考えてみたい。まず、各時期の生活遺物が累積している溝落遺跡は高台に位置し、飲料水となる湧水がすぐ近くで得られるために居住域に選ばれる時期が多かったと推測される。そして金浜遺跡は船着場がある海の玄関口、海辺の作業場などといったエリアと考えることも可能であろう。このような土地利用の1つのパターンが想定される一方、先にみた里木Ⅱ式の出土傾向が示すように、時期によっては居住を含めた諸活動が海辺を中心に営まれ、山側の利用は低調というように利用頻度のバランスには変化があったことも予想される。これまでのところわずかに2地点で遺物の出土を見たに過ぎないが、データが蓄積されれば、ある程度の集落復元も成り立つかもしれない。今後の調査の進展を待ちたい。

#### 2 縄文土器について

早期では粗大押型土器が1片出土した。前期では羽島下層式が断片的に出土したが、後続する型式は出土していない。中期に関しては、船元Ⅰ式から中期末の矢部奥田式<sup>(2)</sup>まで連続して各型式が出土した。矢部奥田式は巻貝条痕が施されるものが主で、擬似縄文風にも巻貝同転文で飾るもの、磨消縄文で飾るものなどがある。これらは、長縄手遺跡の調査報告<sup>(3)</sup>によると矢部奥田式の新段階に相当すると思われる。後期については、中津式（新相）、福田Ⅱ式、津雲A式、彦崎Ⅰ式、彦崎Ⅱ式までが出土した。福田Ⅱ式には2本沈線の磨消縄文をもつ占相と3本沈線の磨消縄文をもつ新

相が認められる。津雲A式の出土は比較的多く、彦崎K I式はごく少ない。広江・浜遺跡ではこの二型式の比率が逆転した様相がうかがえる。彦崎K II式については、彦崎K II式とこれに先行する津島岡大IV群<sup>(4)</sup>に近い段階と思われるものがある。

以上、出土土器について概観したが、中期末の土器あるいは後期の諸型式の土器については近年研究が進展しており、詳細な検討が必要と思われる。

### 3 サヌカイト

岡山県の瀬戸内海沿岸地域における縄文時代後期のサヌカイト流通については、先学の研究により讃岐から板状の原材料の形で持ち込まれたことが指摘されている<sup>(5)</sup>。本遺跡から出土した約15kgのサヌカイトについては土器との共伴関係が不明確ではあるが、板状の原石・剥片などが含まれており、サヌカイトの流通および石器生産技術を考えるうえで重要な資料と考えられる。

こうした視点から溝落遺跡のサヌカイト製品をみてみると、次のように板状の素材から製品を製作するまでの各過程のものが残されていることがわかる。板状剥片S84～S87・原石S88は讃岐から持ち込まれたままの状態に近いものであろう。S88は元々板状を呈していたためであろうか、石質を確かめるために上下をわずかに打ち割った以外はそのままの状態を持ち込まれているようである。S106は板状剥片から剥片を剥離していく過程のよくわかる石核である。第70図の実測図上方にあたる二辺で、原礫面あるいは分割面を打面とする剥片剥離類型Ⅲ<sup>(6)</sup>と呼ばれる方法で剥片を剥離している。こうした剥片生産には砂岩製やサヌカイト製の敲石(S83・S90等)が用いられたと考えられる。特にサヌカイト製敲石については他に類例を確認できず、この地域におけるサヌカイト供給の潤沢さを示すものかもしれない。二次加工のある剥片の中には、S61のような石鏃未製品と考えられるものや、S73のような折れ面を交互剥離によって鋭い縁辺に加工していく過程のものなどもある。これらの資料からさらに深く石器生産技術の検討を行う必要があるが、今後の課題としたい。

また、溝落遺跡の所在する児島西岸周辺では、これまでも広江・浜遺跡や阿津走出遺跡から板状剥片を含む多量のサヌカイトが出土しているが、その実態は必ずしも十分に報告されているとは言い難い。今後は各遺跡から出土したサヌカイト製品の内容を明らかにすることとあわせて、サヌカイトの流通及び石器生産技術を検討する必要があるだろう。

### 4 倉敷市玉島に産出する流紋岩の流通

溝落遺跡の石器石材としてはそのほとんどがサヌカイトであるが、流紋岩や黒曜石も認められる。ここではサヌカイトに次ぐ量が出土している流紋岩について述べてみたい<sup>(7)</sup>。その量は611.6gとサヌカイトと比較すれば微々たるものではあるが、サヌカイトに席卷されたこの地域の石材事情の中で地元石材がどのように流通したかを検討するのも無意味ではなからうとの意図からである。

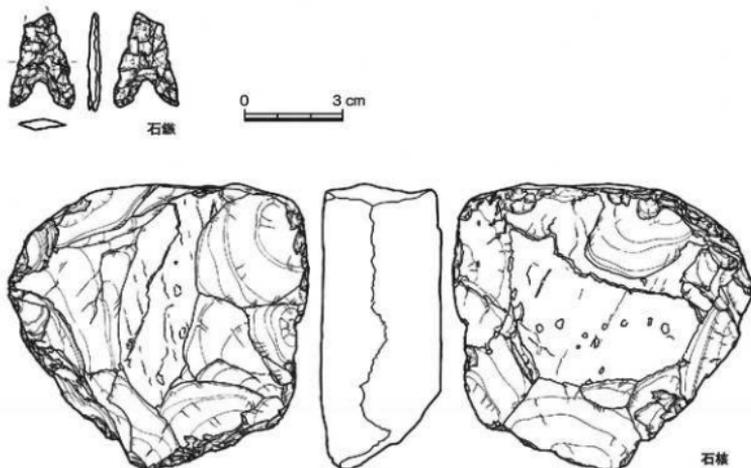
この流紋岩に関しては、広江・浜遺跡の出土例について間壁忠彦が記述している<sup>(7)</sup>。「ち密で均質な硬質で、灰色のチャートを思わす石質」、「縦長く剥離しやすい材質」と特徴の説明があり、「サヌカイトなどに劣らぬ石材」と位置づけている。また、産出地は「倉敷市沙英海岸の東方の台地上」であること、利用範囲は「倉敷市西部・旧玉島地区の縄文貝塚」などで「わずかながら知られて」いるが、「石器としての使用例はあまり知られていない」ことも既に指摘している。これ以後では出土例の報告がいくつか認められる程度である。管見の限りでは流通範囲などを具体的に検討した論考などはない。



いる。北に向かつての分布は不明であるが、備中の沿海部と児島西岸から北岸にかけての流通範囲が押さえられる。

剥片石器の石材としてほとんどがサヌカイトによってまかなわれているこの地域において、個々の遺跡における出土量はサヌカイトと比較すると圧倒的に少ない。しかし、津雲貝塚における剥片32点という数、彦崎貝塚における石核<sup>(1)</sup>の出土を考慮すれば、各遺跡において流紋岩を用いた石器製作を指向していたことは間違いなく、同地域に出土する黒曜石等とは一線を画すべきであろう。

利用された時期を考える上では、土器との共存関係が不明なものが多いのが残念である。ただ、磯の森貝塚の出土例から縄文前期には利用され始めたと考えられる。さらに後期の貝塚である西元浜貝



第72図 玉島産流紋岩を用いた石器 (S=2/3)

遺跡名	所在地	器種	点数	重量 (g)	備考
彦崎貝塚	岡山市南区彦崎	石核・剥片	6	1,062.0	範囲確認調査 (2005)
磯の森貝塚	倉敷市粒江	剥片	2	60.0	道路改修工事 (1982)
船倉貝塚	倉敷市船倉町	剥片	12	41.3	道路建設工事 (1991)
広江・浜渡跡	倉敷市福田町広江	スクレイパー	2		校舎建設工事 (1966・1978)
溝路遺跡	倉敷市児島塩生	剥片・U.F・スクレイパー	41	614.6	消防署建設工事 (2006)
里木貝塚	倉敷市船穂町船穂	スクレイパー	1		学術調査 (1969)
島地貝塚	倉敷市玉島八島	剥片			中山頼夫コレクション (表採)
岸本貝塚	倉敷市玉島道口	剥片			中山頼夫コレクション (表採)
西元浜貝塚	倉敷市玉島黒崎	石核・剥片	14	499.9	宅地造成工事 (1990)
西元浜貝塚	倉敷市玉島黒崎	石核	1	1.7	宗澤節雄コレクション (表採)
中津貝塚	倉敷市玉島黒崎	剥片・スクレイパー			中山頼夫コレクション (表採) 宗澤節雄コレクション (表採)
新殿遺跡	倉敷市玉島黒崎	石核	1	420.6	分布調査 (表採)
原貝塚	笠岡市西大島	剥片	2	14.4	保存園造成工事 (2012)
津雲貝塚	笠岡市西大島	剥片	32	140.5	宅地造成工事

表2 玉島産流紋岩を出土する遺跡

塚や中津貝塚での採集例などから縄文後期にも利用され、広江・浜遺跡出土例によって晩期まで使用されたことがわかる。

今後の課題としては、利用時期および流通範囲を精査することが必要である。土器との共存関係から時期のわかる例を押さえていき、利用の始まりと終わりを着実に把握すること、そして西の福山湾岸や東の瀬戸内市周辺の貝塚における出土の有無を確認しなければならない。その上で、サヌカイト流通圏内においてこの種石材の開発がどのような意味を持っていたのかを考えていく必要があるだろう。

#### 註

- (1) 1996(平成8)年に個人住宅の浄化層工事の際に出土した遺物を採集し、倉敷埋蔵文化財センターで保管。体験学習等の教材として活用しているため、現在も整理中である。整理終了後に報告を予定。
- (2) 矢野健一「北白川C式平行期の瀬戸内地方の土器」『古代古備』第16集 古代古備研究会 1994
- (3) 亀山行雄ほか「長縄手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』189 岡山県教育委員会 2005
- (4) 阿部芳郎ほか「津島岡大遺跡4」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第7冊 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1994
- (5) 竹広文明『サヌカイトと先史社会』淡水社 2003
- (6) 流紋岩の同定については、倉敷市立自然史博物館の武智泰史氏にご教示いただいた。
- (7) 間壁忠彦ほか「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報告 第14号』(財)倉敷考古館 1979  
間壁忠彦ほか「倉敷考古館研究集報告 第7号 里木貝塚」(財)倉敷考古館 1971
- (8) 平井勝「第三章 縄文時代」『岡山県の考古学』(株)古川弘文館 1987
- (9) 彦崎貝塚出土の流紋岩の実見に際しては岡山市教育委員会の田嶋正憲氏にお世話になった。
- (10) 津雲貝塚出土の流紋岩の実見に際しては笠岡市教育委員会の安東康宏氏にお世話になった。
- (11) 田嶋正憲「彦崎貝塚」岡山市教育委員会 2006

## 出土遺物観察表

## 1 朝原寺跡

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底(高台)径	器高			
1	A区 溝	土師器	小皿	(7.4)	(5.6)	1.4	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部根直
2	A区 溝	土師器	小皿	(8.0)	(5.7)	1.1	浅黄褐色 10YR8/4	微砂粒	底部へラ切り
3	A区 溝	土師器	土鍋	--	--	--	灰褐色 7.5YR4/2	微砂粒	
4	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(15.6)	6.8	5.6	灰白色 10YR8/1	1mm砂粒	
5	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	15.0	6.4	4.8	浅黄褐色 2.5Y7/4	0.5mm砂粒	底ね焼痕
6	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	14.4	5.9	5.3	浅黄褐色 2.5Y7/3	1mm砂粒	
7	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(14.9)	6.3	4.6	鈍い黄褐色 10YR6/3	0.5mm砂粒	
8	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(15.1)	5.8	3.8	鈍い黄褐色 10YK7/3	0.5mm砂粒	
9	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(14.7)	5.4	4.5	灰黄褐色 10YR5/2	0.5mm砂粒	
10	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(14.1)	5.5	4.6	鈍い黄褐色 10YR7/4	0.5mm砂粒	
11	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	14.3	5.9	4.9	淡黄褐色 2.5Y7/3	1mm砂粒	底ね焼痕
12	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(13.9)	(6.1)	4.6	浅黄褐色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	
13	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	13.6	5.9	4.4	浅黄褐色 10YR8/3	0.5mm砂粒	底ね焼痕
14	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(13.2)	(4.8)	4.2	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	
15	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(13.2)	5.9	4.2	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	
16	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	13.1	5.8	4.0	鈍い黄褐色 10YK7/3	0.5mm砂粒	
17	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(13.4)	(4.9)	3.5	浅黄褐色 2.5Y7/3	1mm砂粒	
18	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(12.6)	(3.9)	3.7	灰白色 2.5Y7/2	0.5mm砂粒	
19	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(14.9)	--	--	鈍い褐色 7.5YR7/3	1mm砂粒	口縁部
20	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(14.9)	--	--	浅黄褐色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	口縁部
21	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(14.2)	--	--	浅黄褐色 10YR8/4	0.5mm砂粒	口縁部
22	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(13.6)	--	--	灰白色 2.5Y7/2	0.5mm砂粒	口縁部
23	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(13.4)	--	--	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	口縁部
24	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(13.2)	--	--	灰白色 2.5Y7/2	0.5mm砂粒	口縁部
25	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	(12.7)	--	--	鈍い黄褐色 10YR6/4	0.5mm砂粒	口縁部
26	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	3.6	--	鈍い黄褐色 10YR7/3	1mm砂粒	
27	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	3.5	--	鈍い褐色 5YR6/4	1mm砂粒	
28	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	6.4	--	浅黄褐色 10YR8/2	0.5mm砂粒	
29	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	5.7	--	浅黄褐色 2.5Y7/4	0.5mm砂粒	
30	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	6.4	--	灰白色 10YR8/2	1mm砂粒	底部
31	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(6.0)	--	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	底部
32	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	5.4	--	鈍い黄褐色 10YR6/4	微砂粒	底部
33	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	6.9	--	鈍い黄褐色 2.5Y6/3	1mm砂粒	底部
34	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(5.8)	--	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部
35	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(5.8)	--	浅黄褐色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	底部
36	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	5.3	--	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部
37	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	5.7	--	鈍い黄褐色 10YR6/4	0.5mm砂粒	底部
38	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(6.1)	--	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	底部 底ね焼痕
39	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	5.8	--	浅黄褐色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	底部
40	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(5.9)	--	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部
41	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	6.3	--	鈍い黄褐色 10YR7/4	0.5mm砂粒	底部
42	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	5.9	--	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	底部
43	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(5.8)	--	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部
44	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	6.4	--	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部
45	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	5.7	--	浅黄褐色 2.5Y7/3	微砂粒	底部
46	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(5.8)	--	浅黄褐色 2.5Y7/3	微砂粒	底部
47	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(5.8)	--	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部
48	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	5.9	--	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部
49	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	3.6	--	浅黄褐色 2.5Y7/4	0.5mm砂粒	底部
50	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	6.0	--	灰白色 2.5Y7/2	0.5mm砂粒	底部
51	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	3.5	--	鈍い黄褐色 10YR7/4	1mm砂粒	底部
52	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(6.1)	--	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部
53	A区 土器溜まり	土師器	高台付碗	--	(6.9)	--	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部

( ) は復元値

出上遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底(高台)径	器高			
54	A区 土器溝まり	土師器	高台付碗	-	5.6	-	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部
55	A区 土器溝まり	土師器	高台付碗	-	6.3	-	浅黄褐色 10YR8/3	粗砂粒	底部
56	A区 土器溝まり	土師器	高台付碗	-	5.5	-	浅黄褐色 10YR8/3	1mm砂粒	底部
57	A区 土器溝まり	土師器	高台付碗	-	6.0	-	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部
58	A区 土器溝まり	土師器	高台付碗	-	(6.2)	-	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	底部
59	A区 土器溝まり	土師器	高台付碗	-	5.6	-	鈍い黄褐色 10YR7/3	1mm砂粒	底部
60	A区 土器溝まり	土師器	高台付碗	-	5.7	-	灰白色 10YR8/2	粗砂粒	底部
61	A区 土器溝まり	土師器	高台付碗	-	5.5	-	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部 重ね焼痕
62	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.2	5.6	1.4	鈍い黄褐色 10YR7/4	0.5mm砂粒	底部
63	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(8.0)	(5.2)	1.1	鈍い黄褐色 10YR7/4	粗粒	重ね焼痕
64	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.6	6.1	1.7	浅黄褐色 10YR8/4	0.5mm砂粒	底部 底部へラ切り
65	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.6	5.6	1.4	浅黄褐色 10YR8/4	微砂粒	底部
66	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.0	6.0	1.4	浅黄褐色 10YR8/4	微砂粒	底部
67	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.7	5.3	1.3	浅黄褐色 10YR7/3	微砂粒	底部
68	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(8.0)	(6.6)	1.3	浅黄褐色 2.5Y7/4	微砂粒	底部
69	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.1	6.2	1.4	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部へラ切り
70	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.8	6.2	1.7	褐色 7.5YR6/6	0.5mm砂粒	底部へラ切り
71	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(9.0)	(6.8)	1.2	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	底部
72	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.0	6.1	1.3	灰白色 10YR8/1	0.5mm砂粒	底部
73	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.5	4.8	1.4	淡青色 2.5Y8/3	微砂粒	底部へラ切り
74	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.8)	(5.2)	1.6	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部へラ切り
75	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.7	5.6	1.5	黄褐色 10YR8/5	微砂粒	底部
76	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.8	5.5	1.3	鈍い褐色 7.5YR6/4	微砂粒	底部へラ切り
77	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(8.0)	6.0	1.0	淡青色 2.5Y7/4	微砂粒	底部
78	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.9	6.1	1.3	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部
79	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.4)	(5.2)	1.0	鈍い黄褐色 10YR6/3	0.5mm砂粒	底部へラ切り
80	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.1	5.1	1.3	浅黄褐色 10YR8/4	0.5mm砂粒	底部へラ切り
81	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.6)	(6.0)	1.0	灰青色 2.5Y7/2	微砂粒	底部
82	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.5)	(5.7)	0.9	鈍い褐色 7.5YR7/4	0.5mm砂粒	底部
83	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.4	5.5	1.3	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部へラ切り
84	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(9.0)	(7.2)	1.8	鈍い黄褐色 10YR7/2	0.5mm砂粒	底部へラ切り
85	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.3	6.9	1.6	淡青色 2.5Y7/3	微砂粒	底部 底部へラ切り
86	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.2	6.1	1.5	灰黄褐色 10YR4/2	微砂粒	底部
87	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.6	5.6	1.4	鈍い黄褐色 10YR7/4	1mm砂粒	底部
88	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.6	5.5	1.5	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部
89	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.8	5.7	1.4	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	底部へラ切り
90	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.7	5.3	1.5	褐色 7.5YR6/5	微砂粒	底部 底部へラ切り
91	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.6)	(5.6)	1.4	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部
92	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.6)	(5.4)	1.5	淡青色 2.5Y7/3	微砂粒	底部
93	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.6)	6.4	1.4	淡青色 2.5Y7/4	微砂粒	底部
94	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.6	5.2	1.2	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部
95	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.4	6.0	1.1	鈍い黄褐色 10YR6/4	2mm砂粒	底部へラ切り
96	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.0)	(5.0)	1.0	明黄褐色 10YR7/6	1mm砂粒	底部
97	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.1	6.3	1.4	浅黄褐色 10YR7/3	微砂粒	底部へラ切り
98	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(8.0)	(6.0)	1.6	淡青色 2.5Y7/3	微砂粒	底部へラ切り
99	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(8.2)	(6.2)	1.0	浅黄褐色 10YR8/3	0.5mm砂粒	底部
100	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.0	6.1	1.2	鈍い黄褐色 10YR7/4	0.5mm砂粒	底部
101	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.5)	(5.6)	1.6	鈍い黄褐色 10YR7/2	微砂粒	底部
102	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.6	5.8	1.8	鈍い褐色 7.5YR6/4	微砂粒	底部へラ切り
103	A区 土器溝まり	土師器	小皿	8.0	5.8	1.4	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	底部
104	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(8.0)	(6.4)	1.2	鈍い黄褐色 10YR7/3	1mm砂粒	底部
105	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.9	6.0	1.2	淡青色 2.5Y8/3	0.5mm砂粒	底部
106	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.8)	5.4	1.0	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部へラ切り
107	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.4	5.4	1.3	淡黄褐色 10YR8/3	0.5mm砂粒	底部へラ切り 重ね焼痕
108	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.6)	(5.5)	1.1	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	重ね焼痕
109	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.8	5.6	1.3	鈍い褐色 7.5YR6/4	1mm砂粒	底部へラ切り
110	A区 土器溝まり	土師器	小皿	7.4	5.6	1.6	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	底部 底部へラ切り
111	A区 土器溝まり	土師器	小皿	(7.5)	(6.0)	1.1	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	底部

( ) は復元値

出土地物観察表

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底(高台)径	器高			
112	A区 土器溜まり	土師器	小皿	8.1	6.4	1.1	浅黄色 25Y7/3	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
113	A区 土器溜まり	土師器	小皿	(7.7)	(6.0)	1.2	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部ヘラ切り
114	A区 土器溜まり	土師器	小皿	(8.0)	(5.2)	1.5	鈍い黄褐色 10YR7/4	1mm砂粒	
115	A区 土器溜まり	土師器	小皿	(7.9)	(5.4)	1.4	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	
116	A区 土器溜まり	土師器	小皿	7.7	5.1	1.2	黄色 7.5YR7/5	0.5mm砂粒	成形 底部ヘラ切り
117	A区 土器溜まり	土師器	小皿	7.5	6.1	1.5	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部ヘラ切り
118	A区 土器溜まり	土師器	小皿	7.3	5.6	1.2	鈍い黄褐色 10YR6/4	微砂粒	成形 底部ヘラ切り
119	A区 土器溜まり	土師器	小皿	7.4	5.9	1.0	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部ヘラ切り
120	A区 土器溜まり	土師器	小皿	7.7	6.3	1.0	鈍い黄褐色 10YR6/4	2mm砂粒	
121	A区 土器溜まり	土師器	小皿	7.6	5.8	1.3	鈍い黄色 7.5YR7/4	微砂粒	
122	A区 土器溜まり	土師器	小皿	6.9	4.8	1.2	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	底部ヘラ切り 重ね焼痕
123	A区 土器溜まり	土師器	杯	15.3	11.2	3.4	褐色色 10YR4/1	微砂粒	
124	A区 土器溜まり	土師器	杯	13.6	9.4	2.7	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	
125	A区 土器溜まり	土師器	杯	(13.5)	(9.4)	2.9	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	
126	A区 土器溜まり	土師器	杯	(13.4)	9.0	3.0	灰白色 10YR8/2	1mm砂粒	底部ヘラ切り
127	A区 土器溜まり	土師器	杯	(13.3)	9.0	3.0	鈍い黄褐色 10YR7/3	1mm砂粒	底面縦目直
128	A区 土器溜まり	土師器	杯	(12.7)	(9.0)	2.7	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	
129	A区 土器溜まり	土師器	杯	12.7	7.2	3.2	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	
130	A区 土器溜まり	土師器	皿	(8.2)	(5.2)	1.8	鈍い黄色 7.5YR7/4	微砂粒	
131	A区 土器溜まり	土師器	皿	-	(5.2)	-	鈍い黄色 7.5YR7/4	1mm砂粒	
132	A区 土器溜まり	土師器	皿	(7.0)	(4.6)	1.7	灰白色 10YR8/2	1mm砂粒	
133	A区 土器溜まり	土師器	高台付皿	(8.2)	-	-	鈍い黄褐色 10YR6/4	微砂粒	
134	A区 土器溜まり	土師器	高台付皿	10.0	6.1	3.3	浅黄褐色 10YR8/3	1mm砂粒	
135	A区 土器溜まり	土師器	高台付皿	-	(5.7)	-	鈍い黄色 2.5Y6/3	0.5mm砂粒	底部
136	A区 土器溜まり	土師器	高台付皿	-	-	-	鈍い黄褐色 10YR6/4	0.5mm砂粒	
137	A区 土器溜まり	土師器	脚台	11.0	7.1	4.7	浅黄色 2.5Y7/3	微砂粒	底部ヘラ切り
138	A区 土器溜まり	土師器	脚台	8.3	6.1	4.6	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	底部ヘラ切り+ヘラ起し
139	A区 土器溜まり	土師器	脚台?	-	5.0	-	鈍い黄褐色 10YR7/2	1mm砂粒	底部ヘラ切り+ヘラ起し
140	A区 土器溜まり	土師器	脚台?	-	5.0	-	鈍い黄色 7.5YR7/4	微砂粒	底部ヘラ切り+ヘラ起し
141	A区 土器溜まり	土師器	脚台?	-	5.3	-	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部ヘラ切り+ヘラ起し
142	A区 土器溜まり	土師器	脚台?	-	5.2	-	浅黄褐色 10YR8/4	1mm砂粒	底部ヘラ切り+ヘラ起し
143	A区 土器溜まり	須恵器	こね鉢	-	-	-	灰色 N51	0.5mm砂粒	
144	A区 土器溜まり	須恵器	甕	-	9.8	-	灰色 N51	1mm砂粒	
145	A区 土器溜まり	瓦	丸瓦	-	-	-	鈍い黄褐色 10YR7/2	1mm砂粒	凹面-布目 凸面-ナナ
146	A区 土器溜まり	瓦	平瓦	-	-	-	灰色 N6/	1mm砂粒	凹面-布目 凸面-無文押
147	A区 土器溜まり	瓦	平瓦	-	-	-	灰白色 7.5Y7/	2mm砂粒	凹面-布目 凸面-縄目押
148	A区 土器溜まり	瓦	平瓦	-	-	-	灰黄色 2.5Y6/2	1mm砂粒	凹面-布目 凸面-縄目押
149	A区 土器溜まり	瓦	平瓦	-	-	-	明褐色 7.5YR5/6	0.5mm砂粒	凹面-布目 凸面-縄目押
150	A区 土器溜まり	瓦	平瓦	-	-	-	灰白色 2.5Y8/2	1mm砂粒	凹面-布目 凸面-縄目押
151	A区 建物1	土師器	小皿	(7.0)	(4.8)	1.1	淡黄色 2.5Y8/3	微砂粒	底部ヘラ切り
152	A区 建物1	土師器	小皿	8.2	6.4	1.2	浅黄褐色 10YR8/3	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
153	A区 包含層	須恵器	杯蓋	(15.0)	-	2.5	灰白色 2.5Y8/1	1mm砂/1	
154	A区 包含層	須恵器	杯蓋	18.0	14.0	5.8	灰白色 2.5Y8/1	1mm砂粒	底部ヘラ切り末調整
155	A区 包含層	土師器	杯	(15.6)	(14.0)	3.8	明赤褐色 5YR5/8	微砂粒	丹塗り裏
156	A区 包含層	土師器	杯	(15.0)	-	4.3	鈍い黄褐色 10YR7/2	1mm砂粒	
157	A区 包含層	土師器	高台付碗	(15.0)	5.9	4.8	灰白色 10YR8/2	1mm砂粒	
158	A区 包含層	土師器	高台付碗	-	5.9	-	浅黄褐色 10YR8/3	0.5mm砂粒	底部
159	A区 包含層	土師器	高台付碗	-	5.5	-	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部 重ね焼痕
160	A区 包含層	土師器	高台付碗	-	(6.8)	-	灰白色 2.5Y8/2	微砂粒	底部
161	A区 包含層	土師器	碗	(10.5)	(4.2)	3.5	浅黄褐色 10YR8/3	0.5mm砂粒	
162	A区 包含層	土師器	小皿	(7.0)	(5.4)	0.9	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
163	A区 包含層	土師器	小皿	(7.2)	5.4	1.3	鈍い黄褐色 10YR7/4	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り 縁ナナ
164	A区 包含層	土師器	小皿	(7.0)	(5.2)	1.2	鈍い黄色 7.5YR6/4	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
165	A区 包含層	土師器	小皿	(7.4)	(4.8)	1.3	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	底部ヘラ切り
166	A区 包含層	土師器	小皿	(7.5)	(6.0)	1.2	鈍い黄色 7.5YR6/4	0.5mm砂粒	
167	A区 包含層	土師器	小皿	(7.8)	(6.6)	1.3	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	
168	A区 包含層	土師器	小皿	(7.0)	(5.6)	1.3	鈍い黄褐色 7.5YR7/4	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
169	A区 包含層	土師器	小皿	7.7	5.0	1.3	灰白色 2.5Y8/2	微砂粒	成形 底部ヘラ切り

( ) は復元値

番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			色調	胎土	特徴
				口径	底(高台)径	器高			
170	A区 包含層	土師器	小皿	(8.0)	(6.5)	1.0	鈍い橙色 75YR7/4	微砂粒	
171	A区 包含層	土師器	皿	-	(9.2)	-	鈍い黄褐色 10YR1/3	0.5mm砂粒	
172	A区 包含層	土師器	脚台	(8.2)	5.2	3.5	浅黄褐色 10YR8/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り
173	A区 包含層	土師器	脚台	(8.0)	(5.1)	3.7	鈍い橙色 75YR6/4	1mm砂粒	底部ヘラ切り+ヘラ起し
174	A区 包含層	土師器	脚台	-	(4.9)	-	鈍い橙色 75YR6/4	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り+ヘラ起し
175	A区 包含層	土師器	脚台	-	4.8	-	黄褐色 25Y8/3	微砂粒	
176	B区 土坑2	土師器	小皿	7.5	5.9	1.4	浅黄褐色 10YR8/3	微砂粒	完形 底部ヘラ切り
177	B区 土坑2	土師器	小皿	8.0	6.4	1.3	黄褐色 25Y8/4	1mm砂粒	底部ヘラ切り
178	B区 土坑2	土師器	小皿	7.6	5.3	1.5	黄褐色 25Y8/3	0.5mm砂粒	完形 底部ヘラ切り
179	B区 土坑2	土師器	皿	8.0	4.9	2.4	灰白色 25Y8/2	0.5mm砂粒	完形 底部ヘラ切り後ナデ
180	B区 土坑2	土師器	皿	(8.3)	4.8	2.4	灰白色 25Y8/2	1mm砂粒	底部ヘラ切り後ナデ
181	B区 土坑2	土師器	杯つき	(13.6)	(9.2)	2.8	黄褐色 25Y8/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り
182	B区 土坑2	青磁	椀	-	5.6	-	灰オリープ色 7.5Y5/2	精良	
183	B区 土坑3	土師器	椀	(9.4)	4.0	3.2	黄褐色 10YR5/1	1mm砂粒	
184	B区 土坑3	土師器	椀	(11.0)	(4.6)	3.9	浅黄褐色 7.5YR8/4	1mm砂粒	
185	B区 柱穴28	土師器	高台付椀	(11.9)	(6.0)	3.7	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	底部に粘土の継ぎ目痕
186	B区 柱穴28	灰土器	鉢	(24.3)	(8.6)	8.8	灰門色 5Y7/1	微砂粒	底部糸切り
187	B区 柱穴53	土師器	小皿	(6.8)	(5.4)	1.4	鈍い黄褐色 10YR7/4	微砂粒	底部ヘラ切り
188	B区 柱穴53	土師器	小皿	(7.2)	(5.6)	1.3	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	
189	B区 柱穴53	土師器	小皿	(8.0)	(6.0)	1.4	黄褐色 25Y7/3	0.5mm砂粒	底部板目痕
190	B区 柱穴53	土師器	小皿	(7.8)	(5.2)	1.1	灰白色 10YR8/2	1mm砂粒	
191	B区 包含層	土師器	小皿	(7.6)	(5.8)	1.7	鈍い黄褐色 10YR6/4	微砂粒	
192	B区 包含層	土師器	小皿	(7.6)	(5.8)	1.3	橙色 5YR6/6	0.5mm砂粒	丹塗り痕
193	B区 包含層	土師器	皿	(8.0)	(4.6)	2.2	橙色 75YR7/6	微砂粒	底部ヘラ切り
194	B区 包含層	土師器	椀	(10.2)	(3.4)	3.2	赤赤褐色 25YR7/4	0.5mm砂粒	
195	B区 包含層	瓦	平瓦	-	-	-	灰色 N6/	0.5mm砂粒	内面-ナデ凸面-網格子目印
196	C区 溝1	土師器	小皿	8.2	6.2	1.4	黄褐色 25Y8/4	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り後ナデ
197	C区 柱穴1	土師器	小皿	7.6	5.7	1.4	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	底部ヘラ切り
198	C区 柱穴1	土師器	小皿	(9.0)	(7.4)	1.1	鈍い黄褐色 10YR6/4	微砂粒	底部ヘラ切り
199	C区 包含層下層	土師器	高台付椀	(15.8)	(7.1)	6.2	黒色 N1.5/	微砂粒	内面黒色土器 丹塗り痕
200	C区 包含層下層	土師器	高台付椀	(16.0)	(7.2)	5.5	鈍い黄褐色 10YR7/3	1mm砂粒	
201	C区 包含層下層	土師器	高台付椀	(15.2)	(6.8)	5.5	灰白色 25Y8/2	微砂粒	
202	C区 包含層下層	土師器	高台付椀	-	(6.6)	-	灰白色 25Y7/2	1mm砂粒	底部
203	C区 包含層下層	土師器	高台付椀	-	(5.8)	-	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部
204	C区 包含層下層	土師器	高台付椀	-	(8.0)	-	黒色 N1.5/	微砂粒	内面黒色土器 (底部)
205	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(17.0)	(9.2)	5.2	灰黄褐色 10YR6/2	1mm砂粒	底部ヘラ切り
206	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	15.2	8.9	5.1	黄褐色 25Y7/2	微砂粒	
207	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(16.0)	(8.6)	4.9	鈍い黄褐色 10YR7/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り
208	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(14.2)	(8.0)	4.9	鈍い橙色 75YR7/4	1mm砂粒	
209	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(16.0)	-	-	鈍い橙色 75YR7/4	0.5mm砂粒	丹塗り痕
210	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(11.2)	(6.0)	3.6	鈍い黄褐色 25Y6/3	微砂粒	
211	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(10.4)	(5.6)	3.0	黄褐色 25Y7/3	1mm砂粒	
212	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(9.9)	5.0	3.3	鈍い黄褐色 10YR6/4	0.5mm砂粒	
213	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(8.8)	(4.6)	2.5	灰白色 25Y8/2	0.5mm砂粒	
214	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	(8.6)	(5.4)	2.4	灰白色 25Y8/2	微砂粒	丹塗り痕
215	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	-	(7.2)	-	明褐色 75YR5/6	0.5mm砂粒	底部
216	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	-	(7.4)	-	鈍い黄褐色 25Y6/3	0.5mm砂粒	底部
217	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	-	-	-	黄褐色 25Y7/3	微砂粒	底部
218	C区 包含層下層	土師器	高台付皿	-	7.4	-	灰黄褐色 10YR6/2	1mm砂粒	底部
219	C区 包含層下層	土師器	高台付椀	-	(6.8)	-	灰白色 25Y7/2	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り後ナデ
220	C区 包含層下層	土師器	高台付椀	-	(7.4)	-	灰白色 25Y8/2	0.5mm砂粒	底部
221	C区 包含層下層	土師器	杯	(14.0)	(8.8)	3.6	鈍い黄褐色 25Y6/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り後ナデ
222	C区 包含層下層	土師器	杯	(14.0)	(8.2)	3.0	橙色 75YR7/6	微砂粒	底部ヘラ切り
223	C区 包含層下層	土師器	杯	(13.0)	7.6	3.1	鈍い黄褐色 10YR6/3	1mm砂粒	
224	C区 包含層下層	土師器	杯	(12.0)	(8.0)	2.7	灰オリープ色 5Y4/4	0.5mm砂粒	
225	C区 包含層下層	土師器	小皿	(10.4)	(6.9)	2.0	灰白色 10YR8/2	微砂粒	底部に黒色成層の穿孔 丹塗り痕
226	C区 包含層下層	土師器	小皿	10.6	8.6	1.9	鈍い橙色 75YR6/4	1mm砂粒	底部ヘラ切り
227	C区 包含層下層	土師器	小皿	(10.4)	(8.0)	1.7	鈍い橙色 75YR7/4	0.5mm砂粒	

出土遺物観察表

番号	出土位置	種別	器種	流量 (on)			色調	胎土	特徴
				口径	底(高台)径	器高			
228	C区 包含層下層	土師器	小皿	10.4	6.5	2.5	灰白色 10YR8/2	1mm砂粒	定形 底部ヘラ切り
229	C区 包含層下層	土師器	小皿	(10.2)	(6.4)	2.0	淡灰色 2.5Y7/3	1mm砂粒	底面焼痕
230	C区 包含層下層	土師器	小皿	10.4	7.2	1.6	淡灰色 10YR4/1	1mm砂粒	底部ヘラ切り
231	C区 包含層下層	土師器	小皿	(10.8)	(7.8)	1.7	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	
232	C区 包含層下層	土師器	小皿	10.8	7.3	2.0	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
233	C区 包含層下層	土師器	小皿	10.2	6.9	1.9	鈍い黄褐色 10YR6/4	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り後ナゲ
234	C区 包含層下層	土師器	小皿	10.0	7.9	2.0	鈍い藍色 7.5YR7/1	1mm砂粒	底部ヘラ切り
235	C区 包含層下層	土師器	小皿	9.9	7.3	2.3	淡黄褐色 10YR8/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り
236	C区 包含層下層	土師器	小皿	(10.0)	(7.8)	1.4	藍色 7.5YR7/6	1mm砂粒	底部ヘラ切り 丹塗り痕
237	C区 包含層下層	土師器	小皿	(10.0)	7.4	1.5	淡黄色 2.5Y7/3	微砂粒	底部ヘラ切り 丹塗り痕
238	C区 包含層下層	土師器	小皿	9.7	6.7	1.6	淡黄色 2.5Y8/3	微砂粒	底部ヘラ切り
239	C区 包含層下層	土師器	小皿	(9.6)	(6.2)	2.3	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
240	C区 包含層下層	土師器	小皿	9.7	7.7	2.0	鈍い黄褐色 10YR7/2	1mm砂粒	底部ヘラ切り
241	C区 包含層下層	土師器	小皿	(9.8)	(7.6)	1.8	淡黄褐色 10YR8/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り 丹塗り痕
242	C区 包含層下層	土師器	小皿	(10.0)	(7.0)	2.0	鈍い藍色 7.5YR7/4	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
243	C区 包含層下層	土師器	小皿	9.4	6.2	1.6	灰白色 2.5Y8/2	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
244	C区 包含層下層	土師器	小皿	(9.4)	(5.8)	1.9	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り?
245	C区 包含層下層	土師器	小皿	(9.0)	(6.4)	2.0	褐色 7.5YR6/6	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り?
246	C区 包含層下層	土師器	小皿	(9.0)	(6.6)	1.6	陶灰色 10YR4/1	1mm砂粒	
247	C区 包含層下層	土師器	小皿	(9.2)	(5.4)	2.3	鈍い藍色 2.5Y6/3	微砂粒	
248	C区 包含層下層	土師器	小皿	9.0	7.3	1.6	淡黄色 2.5Y7/3	微砂粒	底部ヘラ切り
249	C区 包含層下層	土師器	小皿	(9.0)	(7.2)	1.5	淡黄色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	
250	C区 包含層下層	土師器	小皿	(8.8)	(7.0)	1.4	淡黄色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
251	C区 包含層下層	土師器	小皿	8.7	5.3	1.6	鈍い黄褐色 10YR7/3	微砂粒	定形 底部ヘラ切り
252	C区 包含層下層	土師器	小皿	(8.4)	(5.6)	1.4	灰白色 10YR8/1	1mm砂粒	底部ヘラ切り
253	C区 包含層下層	土師器	小皿	(8.2)	(7.2)	1.3	淡黄褐色 10YR8/4	粗粒	底部ヘラ切り
254	C区 包含層下層	土師器	小皿	8.0	5.9	1.1	淡黄色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
255	C区 包含層下層	土師器	小皿	(7.8)	(7.0)	1.1	淡黄褐色 10YR8/4	0.5mm砂粒	
256	C区 包含層下層	土師器	盤	(12.0)	-	1.4	灰白色 10YR8/1	1mm砂粒	
257	C区 包含層下層	瓦	平瓦	-	-	-	藍色 5YR6/6	0.5mm砂粒	凹面・布目 凸面・横目焼き
258	C区 包含層上層	土師器	高台付椀	(13.7)	5.9	5.4	灰白色 2.5Y8/2	1mm砂粒	
259	C区 包含層上層	土師器	高台付椀	-	6.8	-	灰白色 2.5Y8/2	微砂粒	底部
260	C区 包含層上層	土師器	高台付椀	(10.0)	(5.2)	3.8	灰白色 10YR8/1	0.5mm砂粒	
261	C区 包含層上層	土師器	高台付皿	(10.0)	(7.0)	3.9	灰白色 10YR8/2	1mm砂粒	
262	C区 包含層上層	土師器	高台付皿	(10.0)	(5.8)	2.9	灰白色 2.5Y8/2	微砂粒	
263	C区 包含層上層	土師器	高台付皿	-	(5.6)	-	鈍い黄褐色 10YR7/3	0.5mm砂粒	底部
264	C区 包含層上層	土師器	高台付皿	(10.2)	(6.0)	2.2	淡黄色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	
265	C区 包含層上層	土師器	高台付皿	9.4	-	-	灰白色 10YR8/2	1mm砂粒	
266	C区 包含層上層	土師器	高台付皿	(9.0)	(6.6)	2.3	淡黄色 2.5Y7/3	微砂粒	底部ヘラ切り
267	C区 包含層上層	土師器	小皿	5.5	4.4	1.9	灰白色 10YR8/2	微砂粒	定形 底部ヘラ切り
268	C区 包含層上層	土師器	小皿	9.4	6.5	1.9	灰白色 2.5Y8/2	1mm砂粒	底部ヘラ切り
269	C区 包含層上層	土師器	小皿	(8.6)	(6.0)	1.6	鈍い黄褐色 10YR5/3	微砂粒	
270	C区 包含層上層	土師器	小皿	(8.6)	(7.0)	1.1	淡黄色 2.5Y8/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り
271	C区 包含層上層	土師器	小皿	(8.4)	(6.0)	1.3	黒褐色 10YR3/2	微砂粒	底部ヘラ切り
272	C区 包含層上層	土師器	小皿	(8.4)	(6.4)	1.5	淡黄色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	
273	C区 包含層上層	土師器	小皿	7.9	6.4	1.1	灰白色 10YR8/2	0.5mm砂粒	底部敷目痕
274	C区 包含層上層	土師器	小皿	(8.0)	(6.4)	1.3	淡黄色 2.5Y7/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り
275	C区 包含層上層	土師器	小皿	(7.0)	(5.6)	1.3	灰黄色 2.5Y7/2	微砂粒	底部敷目痕
276	C区 包含層上層	土師器	小皿	(7.0)	(6.0)	1.2	灰白色 10YR7/1	0.5mm砂粒	
277	D区 包含層下層	瓦	軒丸瓦	-	-	-	灰色 5Y5	微砂粒	
278	D区 溝	土師器	小皿	(7.0)	(6.0)	1.2	明黄褐色 10YR6/6	微砂粒	底部ヘラ切り 丹塗り痕
279	D区 土坑	土師器	高台付椀	(13.0)	5.5	4.4	淡黄色 2.5Y8/3	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
280	D区 土坑	土師器	高台付椀	-	(5.6)	-	淡黄色 2.5Y8/3	1mm砂粒	底面焼痕
281	D区 包含層	土師器	高台付皿	8.7	5.4	2.5	淡黄色 2.5Y8/3	1mm砂粒	底部ヘラ切り
282	D区 包含層	土師器	小皿	(7.5)	6.0	1.3	淡黄色 2.5Y8/4	微砂粒	底部ヘラ切り
283	D区 包含層	土師器	小皿	(8.6)	(6.2)	1.4	淡黄色 2.5Y7/3	0.5mm砂粒	底部ヘラ切り
284	D区 包含層	土師器	小皿	(9.0)	(6.2)	1.5	淡黄色 2.5Y7/3	微砂粒	

( ) は復元値

## 2. 溝落遺跡 1区出土土器観察表

番号	器種	部位	法量 (cm)	文様 上段：外面 下段：内面	調整 上段：外面 下段：内面	色調 上段：外面 下段：内面	粘土中の 砂粒 (μ)
3	深鉢	口縁部	器厚 1.0	楕円型文 -	-	にぶい褐色 75YR6/4 にぶい褐色 75YR6/4	10~30
4	深鉢	口縁部	器厚 0.5	D字形爪形文 -	粗いナデ	にぶい赤褐色 75YR4/4 にぶい赤褐色 75YR4/4	10~20
5	深鉢	口縁部	器厚 0.4	連続羽文 -	二枚貝条痕	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	10~20
6	深鉢	口縁部	器厚 0.6	D字形爪形文 -	二枚貝条痕	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR5/3	10~20
7	深鉢	口縁部	器厚 0.6	D字形爪形文 -	二枚貝条痕後ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	10以下
8	深鉢	口縁部	器厚 0.6	D字形爪形文 -	二枚貝条痕	にぶい黄褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色 10YR6/4	10~20
9	深鉢	口縁部	器厚 0.6	無文	二枚貝条痕 二枚貝条痕	灰黄褐色 10YR4/2 褐色 10YR4/1	10~20
10	深鉢	口縁部	器厚 0.6	無文	二枚貝条痕 二枚貝条痕	灰黄褐色 10YR5/2 にぶい黄褐色 10YR5/4	10~20
11	深鉢	胴部	器厚 0.6	無文	二枚貝条痕 一枚貝条痕	にぶい褐色 75YR5/4 灰黄褐色 10YR4/2	10~20
12	深鉢	胴部	器厚 0.6~0.7	無文	二枚貝条痕 二枚貝条痕	褐色 75YR6/6 褐色 75YR4/1	10~20
13	深鉢	胴部	器厚 0.6~0.7	無文	二枚貝条痕 二枚貝条痕	褐色 75YR5/1 褐色 75YR6/1	10~20
14	深鉢	口縁部	器厚 0.6~0.7	縄文 LR 口縁に縄文 LR	-	褐色 75YR4/6 褐色 75YR4/6	10~30
15	深鉢	口縁部	器厚 0.6	縄文 LR 口縁に縄文 LR	ナデ	褐色 75YR4/6 褐色 75YR4/6	10~30
16	深鉢	胴部	器厚 0.6	縄文 LR	ナデ	褐色 75YR4/6 褐色 75YR4/6	10~30
17	深鉢	口縁部	器厚 0.6	縄文 LR (口唇部含む) 口縁に縄文 LR	ナデ	褐色 75YR6/6 褐色 75YR6/6	10~20
18	深鉢	胴部	器厚 0.4~0.5	縄文・低い突帯上に C 字形爪形文 -	ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3 黒褐色 10YR3/1	10~20
19	深鉢	口縁部	器厚 0.7	縄文 RL・半截竹管による平行細文 口縁に縄文 RL	-	灰黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色 10YR4/2	10~40
20	深鉢	胴部	器厚 0.7	縄文 RL・半截竹管による平行細文 -	ナデ	明赤褐色 5YR5/6 にぶい赤褐色 5YR5/4	10~20
21	深鉢	胴部	器厚 0.7	縄文 RL・沈線文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR5/4 にぶい褐色 75YR5/4	10~30
22	深鉢	口縁部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR6/4 褐色 75YR4/1	10~40
23	深鉢	口縁部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR5/4 黒褐色 75YR3/1	10~40
24	深鉢	口縁部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR5/4 黒褐色 75YR3/1	10~40
25	深鉢	口縁部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR5/4 黒褐色 75YR3/1	10~40
26	深鉢	胴部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/4 褐色 10YR4/1	10~40
27	深鉢	胴部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR5/4 黒褐色 75YR3/1	10~40
28	深鉢	胴部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR5/4 黒褐色 75YR3/1	10~40
29	深鉢	胴部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR5/4 黒褐色 75YR3/1	10~40
30	深鉢	胴部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR5/4 褐色 75YR4/1	10~40
31	深鉢	胴部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい褐色 75YR6/4 褐色 75YR4/1	10~40
32	深鉢	胴部	器厚 0.7~1.0	縄文 RL・突帯貼付けによる弧状文 -	ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/4 黒褐色 10YR3/1	10~40
33	深鉢	胴部	器厚 0.6~0.7	縄文 RL	ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR6/3	10~40
34	深鉢	胴部	器厚 0.6	縄文 RL	ナデ	にぶい赤褐色 5YR4/3 褐色 5YR4/1	10~30
35	深鉢	胴部	器厚 0.6	縄文 RL	ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	10~30

出土遺物観察表

番号	器種	部位	流量 (cm)	文様 上段：外面 下段：内面	調整 上段：外面 下段：内面	色調 上段：外面 下段：内面	粘土中の 砂粒 (mm)
36	深鉢	胴部	器厚 0.6	縄巻縄文	-	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR6/3	1.0 ~ 3.0
37	深鉢	口縁部	器厚 0.5 ~ 0.7	折糸文・相帯波状文・刺突文	ナダ	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい褐色 7.5YR5/4	1.0 ~ 3.0
38	深鉢	口縁部	器厚 0.1 ~ 0.5	条線文・沈線文	ナダ	灰黄褐色 10YR4/2 黒褐色 10YR3/1	1.0 ~ 2.0
39	深鉢	胴部	器厚 0.6	半軟竹管による平行文・波状文	ナダ	明褐色 10YR6/6 明褐色 7.5YR5/6	1.0 ~ 4.0
40	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.8	縄文 RL・蛇行沈線文	ナダ	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 10YR4/3	1.0 ~ 3.0
41	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.8	縄文 RL・蛇行沈線文	ナダ	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 10YR4/3	1.0 ~ 3.0
42	深鉢	口縁部 (波状) ~ 胴部	器厚 0.5	擬似縄文 (巻貝回転文)・刺突文	巻貝条痕 巻貝条痕	にぶい赤褐色 5YR4/4 灰褐色 7.5YR4/2	1.0 ~ 3.0
43	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.8 ~ 1.0	区画文 (刺突文)・縄文 LR	巻貝条痕 巻貝条痕	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい褐色 7.5YR5/4	1.0 ~ 4.0
44	深鉢	胴部	器厚 0.6 ~ 0.7	区画文 (溝文)・磨消縄文 LR	-	褐灰色 10YR4/1 黒褐色 10YR5/2	1.0 ~ 3.0
45	深鉢	胴部	器厚 0.6	区画文・磨消縄文	巻貝条痕 巻貝条痕	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄褐色 10YR5/2	1.0 ~ 3.0
46	深鉢	胴部	器厚 0.6	区画文	巻貝条痕	灰黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色 10YR5/2	1.0 ~ 2.0
47	深鉢	口縁部	器厚 0.5	条線文・渦巻文	巻貝条痕後ナダ 沈線の影響が見える	黄灰色 2.5YR4/1 にぶい黄褐色 10YR5/3	1.0 ~ 4.0
48	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	二枚貝条痕後ナダ 二枚貝条痕後ナダ	黒褐色 10YR3/2 にぶい褐色 2.5YR6/3	1.0 ~ 3.0
49	深鉢	口縁部	器厚 0.5	無文	二枚貝条痕	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい褐色 2.5YR6/3	1.0 ~ 4.0
50	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.7 ~ 0.8	2本沈線磨消縄文 RL	ナダ	にぶい黄褐色 10YR5/4 褐灰色 10YR4/1	1.0 ~ 4.0
51	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.7	2本沈線磨消縄文 RL	ナダ	褐灰色 10YR4/1 黒褐色 10YR3/1	1.0 ~ 4.0
52	深鉢	口縁部	器厚 0.6	2本沈線磨消縄文 RL	ナダ	にぶい黄褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色 10YR5/4	1.0 ~ 4.0
53	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	2本沈線磨消縄文 RL	巻貝条痕後ナダ 巻貝条痕後ナダ	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	1.0 以下
54	深鉢	口縁部	器厚 0.5	沈線文	ナダ	にぶい褐色 7.5YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/3	1.0 ~ 2.0
55	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	磨消縄文 (巻貝回転文)	ナダ	褐灰色 10YR6/1 にぶい黄褐色 10YR6/3	1.0 ~ 2.0
56	深鉢	口縁部	器厚 0.6	磨消縄文 LR	ナダ	にぶい褐色 7.5YR5/3 灰黄褐色 10YR5/2	1.0 ~ 3.0
57	深鉢	口縁部	器厚 0.6	3本沈線磨消縄文 RL・口唇に刻目	ミガキ ミガキ	褐色 7.5YR4/3 暗褐色 7.5YR3/3	1.0 ~ 3.0
58	深鉢	口縁部	器厚 0.5	3本沈線磨消縄文 RL	ミガキ ミガキ	にぶい赤褐色 5YR4/4 にぶい赤褐色 5YR4/3	1.0 ~ 3.0
59	深鉢	口縁部	器厚 0.6	3本沈線磨消縄文 RL	ミガキ ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/3 暗褐色 10YR3/2	1.0 ~ 2.0
60	深鉢	口縁部	器厚 0.5	磨消縄文 RL	ミガキ ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/3 褐灰色 10YR4/1	1.0 ~ 3.0
61	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.5 ~ 0.7	対向弧文・区画文・縄文 RL	?	にぶい黄褐色 10YR5/3 黒褐色 10YR2/1	1.0 ~ 3.0
62	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.5 ~ 0.6	対向弧文・区画文・縄文 RL	ミガキ?	褐色 7.5YR6/6 褐色 7.5YR6/6	1.0 ~ 3.0
63	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.5 ~ 0.6	対向弧文・区画文・縄文 RL	ミガキ?	褐色 7.5YR4/6 褐色 7.5YR4/6	1.0 ~ 3.0
64	深鉢	口縁部	器厚 0.5	対向弧文・縄文 RL	ミガキ ナダ	にぶい黄褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色 10YR4/3	1.0 ~ 3.0
65	深鉢	口縁部	器厚 0.5	横位沈線 (区画文?)・縄文?	?	明赤褐色 5YR5/6 褐色 7.5YR6/6	1.0 ~ 3.0
66	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	横位沈線 (区画文?)・縄文 RL	ミガキ ナダ	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/4	1.0 ~ 2.0
67	深鉢	口縁部	器厚 0.7	横位沈線 (区画文?)・縄文 RL	ナダ ナダ	にぶい褐色 7.5YR5/3 褐色 7.5YR4/3	1.0 ~ 2.0
68	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	横位沈線 (区画文?)・縄文 RL	?	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/4	1.0 ~ 3.0
69	深鉢	口縁部	器厚 0.6	横位沈線 (区画文?)	ナダ ナダ	赤褐色 5YR4/6 にぶい褐色 7.5YR5/3	1.0 ~ 3.0

番号	器種	部位	法量 (cm)	文様 上段：外面 下段：内面	調整 上段：外面 下段：内面	色調 上段：外面 下段：内面	胎土中の 砂粒 (mm)
70	深鉢	口縁部	器厚 0.7 ~ 0.8	方形区画文・縄文 RL	ナデ ナデ	褐色 75YR4/3 にぶい褐色 75YR5/4	10 ~ 30
71	深鉢	口縁部	器厚 0.7 ~ 0.8	横位多条沈線 (方形区画文)・縄文 RL	ナデ ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 75YR6/4	10 ~ 20
72	鉢	口縁部	器厚 0.7	3本沈線消縄文 RL 口縁に2本沈線消縄文 RL	ナデ ミガキ	にぶい褐色 5YR6/4 にぶい黄褐色 10YR6/3	10 ~ 20
73	鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.5 ~ 0.6	3本沈線消縄文 RL・渦巻文	ナデ	黒褐色 75YR3/1 黒褐色 75YR3/1	10 ~ 30
74	鉢	口縁部	器厚 0.5	2本沈線消縄文 RL	ナデ ミガキ	黒褐色 10YK3/1 黒褐色 10YK3/1	10 ~ 20
75	鉢	口縁部	器厚 0.5	口縁部に縄文 RL	ミガキ ナデ	灰褐色 75YR4/2 黒褐色 75YR3/1	10 ~ 20
76	鉢	口縁部	器厚 0.5	口縁部に縄文 RL	ミガキ ミガキ	暗赤褐色 25YR3/3 黒褐色 10YR3/2	10 ~ 20
77	鉢	口縁～ 胴部	器厚 0.5	口縁部に縄文 RL	赤灰後ナデ ミガキ	褐色 75YR4/3 にぶい黄褐色 10YR5/4	10 ~ 20
78	深鉢	口縁部	器厚 0.4	口縁部に縄文 RL	ナデ ナデ	褐色 75YR4/3 にぶい黄褐色 10YR4/3	10 ~ 40
79	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.5	縄文 RL 沈線・短沈線文・縄文 RL	ナデ ナデ	黒色 10YR2/1 黒色 10YR2/1	10 ~ 20
80	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.6	沈線・縄文 RL 沈線・縄文 RL	赤灰後ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR4/2 黒褐色 10YR3/1	10 ~ 30
81	深鉢	口縁部	器厚 0.6	沈線・縄文 RL 沈線・縄文 RL	ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR4/2 褐色 10YR4/1	10 ~ 20
82	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	沈線・縄文 RL 沈線・縄文 RL	ナデ ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/3 黒褐色 10YR3/1	10 ~ 30
83	深鉢	口縁部	器厚 0.6	沈線・縄文 LR 沈線	ナデ ミガキ	黄褐色 25YR5/3 黒褐色 25YR3/1	10 ~ 30
84	深鉢	口縁部	器厚 0.6	沈線・口唇部に縄文 LR 沈線 (H形刻突)・付加条縄文末端	ナデ ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/3 灰黄褐色 10YR4/2	10 ~ 30
85	深鉢	胴部～ 胴部	器厚 0.6	沈線・縄文 RL	磨滅 磨滅	褐色 75YR6/6 にぶい黄褐色 10YR5/3	10 ~ 20
86	深鉢	胴部～ 胴部	器厚 0.6	沈線・無節縄文 L	ナデ	褐色 10YR4/1 褐色 10YR4/1	10 ~ 30
87	深鉢	胴部	器厚 0.6	付加条縄文末端	ナデ	黒褐色 75YR3/1 灰褐色 75YR4/2	10 ~ 20
88	深鉢	胴部	器厚 0.4 ~ 0.5	縄文 RL	ナデ	灰黄褐色 10YR5/2 褐色 10YR4/1	10 ~ 20
89	深鉢	胴部	器厚 0.5	縄文 RL	磨滅	にぶい褐色 75YR6/4 にぶい黄褐色 10YR5/3	10 ~ 20
90	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	ミガキ ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	10 ~ 20
91	深鉢	口縁部	器厚 0.6	無文	ミガキ ミガキ	にぶい褐色 75YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/3	10 ~ 20
92	深鉢	口縁部	器厚 0.5 ~ 0.6	無文	巻貝条痕 ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい黄褐色 10YR5/3	10 ~ 40
93	深鉢	口縁部	器厚 0.8 ~ 0.9	無文・口唇部に刻目	ナデ ナデ	褐色 75YR5/2 にぶい褐色 75YR6/4	10 ~ 30
94	深鉢	口縁部	器厚 0.7	無文・口唇部に刻目	赤灰後ナデ 赤灰後ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/4 褐色 75YR4/3	10 ~ 30
95	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.5 ~ 0.6	無文・口唇部に刻目	赤灰後ナデ ?	にぶい褐色 75YR5/4 褐色 10YR4/1	10 ~ 30
96	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文・口唇部に刻目	赤灰後ナデ ?	にぶい褐色 75YR5/4 灰褐色 75YR4/2	10 ~ 30
97	深鉢	口縁～ 胴部	器厚 0.8 ~ 0.9	無文	?	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/4	10 ~ 40
98	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	ナデ	にぶい褐色 75YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	10 ~ 30
99	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	赤灰後ナデ ?	灰黄褐色 10YR6/2 にぶい黄褐色 10YR5/3	10 ~ 30
100	深鉢	口縁部	器厚 0.8 ~ 0.9	無文	赤灰後ナデ ?	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR6/3	10 ~ 30
101	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	ナデ 赤灰後ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR6/3	10 ~ 30
102	鉢	口縁部	器厚 0.5 ~ 0.7	無文	ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄褐色 10YR5/2	10 ~ 20
103	鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	ナデ ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	10 ~ 20

出土遺物調査表

番号	器種	部位	法量 (cm)	文様 上段：外面 下段：内面	調整 上段：外面 下段：内面	色調 上段：外面 下段：内面	胎土中の 砂粒 (mm)
104	鉢	口縁部	器厚 0.5 ~ 0.6	無文	赤褐色ナデ ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 にぶい黄褐色 10YR5/3	1.0 ~ 2.0
105	鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	ナデ ナデ ナデ	灰褐色 7.5YR4/2 灰褐色 7.5YR4/2	1.0 ~ 2.0
106	鉢	口縁部 - 底部	口径 (24.6) 器高 (9.6) 底径 4.2 器厚 0.5 ~ 0.6	無文	ナデ ナデ	黒褐色 7.5YR3/1 黒褐色 7.5YR3/1	1.0 ~ 2.0
107	鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.8 ~ 0.9	無文	赤褐色ナデ 赤褐色ナデ	褐色 10YR4/1 暗灰褐色 2.5Y4/1	1.0 ~ 3.0
108	鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	赤褐色ナデ 赤褐色ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/4	1.0 ~ 5.0
109	鉢	口縁部	器厚 0.5	無文	ナデ ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 褐色 10YR4/1	1.0 ~ 2.0
110	鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	厚紙 ナデ	褐色 7.5YR4/3 褐色 7.5YR4/3	1.0 ~ 3.0
111	鉢	口縁部	器厚 0.7 ~ 0.8	無文	ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色 10YR4/2	1.0 ~ 3.0
112	鉢	口縁部 - 胴部	器厚 0.5 ~ 0.7	無文	赤褐色ナデ ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 黒褐色 10YR3/2	1.0 ~ 2.0
113	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.8	無文	ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR4/2 褐色 10YR4/1	1.0 ~ 4.0
114	深鉢	口縁部	器厚 0.6	無文	赤褐色ナデ ナデ	黒褐色 10YR3/1 にぶい黄褐色 10YR5/3	1.0 ~ 2.0
115	深鉢	口縁部	器厚 0.5 ~ 0.6	無文	ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR4/2 にぶい黄褐色 10YR5/3	1.0 ~ 2.0
116	深鉢	口縁部 (波状)	器厚 0.5 ~ 0.7	無文	ナデ ナデ	黒褐色 10YR3/1 黒褐色 10YR3/1	1.0 ~ 3.0
117	深鉢	口縁部	器厚 0.7 ~ 0.8	無文	ナデ ナデ	黄褐色 2.5Y5/3 暗灰褐色 2.5YR4/2	1.0 ~ 3.0
118	深鉢	口縁部	器厚 0.9	無文	ナデ ナデ ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 灰黄褐色 10YR5/2	1.0 ~ 3.0
119	深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文	ナデ ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR4/2 灰黄褐色 10YR4/2	1.0 ~ 3.0
120	深鉢	口縁部	器厚 0.8	無文	ナデ ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR4/2 褐色 10YR4/1	1.0 ~ 3.0
121	深鉢	底部	底径 (6.0) 器厚 0.7 ~ 0.8	無文	- ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	1.0 ~ 3.0
122	深鉢	底部	底径 (6.0) 器厚 0.7 ~ 0.8	無文	- ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/4 にぶい黄褐色 10YR6/4	1.0 ~ 3.0
123	深鉢	底部	底径 5.2 器厚 0.6 ~ 0.7	模文 LR	- ナデ	にぶい黄褐色 10YR4/3 にぶい黄褐色 10YR4/3	1.0 ~ 3.0
124	深鉢	底部	底径 8.4	無文	ナデ ナデ	灰黄褐色 10YR5/2 灰黄褐色 10YR5/2	1.0 ~ 4.0
125	深鉢	底部	底径 10.0	無文	ナデ ナデ	にぶい黄褐色 10YR5/3 灰黄褐色 10YR5/2	1.0 ~ 3.0
126	深鉢	底部	底径 (12.5) 器厚 0.9	無文	厚紙 ナデ	褐色 7.5YR4/4 褐色 7.5YR4/4	1.0 ~ 3.0 砂粒多し
127	深鉢	底部	底径 11.0 器厚 0.8	無文	赤褐色ナデ ナデ	にぶい褐色 7.5YR5/3 にぶい褐色 7.5YR5/3	1.0 ~ 5.0
128	深鉢	底部	底径 5.2 器厚 0.5 ~ 0.6	無文	厚紙 ナデ	赤褐色 5YR4/6 褐色 10YR4/1	1.0 ~ 3.0
129	鉢?	底部	底径 4.5 器厚 0.6 ~ 0.7	無文	ナデ 厚紙	灰黄色 2.5Y6/2 灰褐色 2.5Y4/1	1.0 ~ 3.0
130	鉢?	底部	底径 8.0 器厚 0.5 ~ 0.6	無文	厚紙 厚紙	赤褐色 5YR4/6 褐色 7.5YR4/3	1.0 ~ 3.0
131	土製品?		長さ 6.8 幅 3.2 高さ 1.6 ~ 3.3	無文	厚紙 -	黄褐色 10YR6/6	1.0 ~ 2.0

## 3. 溝落遺跡 2区出土土器観察表

番号	器種	部位	法量 (cm)	文様 上段：外面 下段：内面	調整 上段：外面 下段：内面	色調 上段：外面 下段：内面	胎土中の 砂粒 (mm)
132	縄文土器 深鉢	口縁部	器厚 0.6 ~ 0.7	無文・口唇部に刻目	摩滅 条痕後ナデ	にぶい赤褐色 5YR5/4 にぶい黄褐色 10YR5/3	1.0 ~ 3.0
133	縄文土器 深鉢	口縁部	器厚 0.5	比威 (区画文?)・付加糸縄文未達	ナデ ナデ	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい赤褐色 10YR5/3	1.0 ~ 2.0
134	土師器 小形丸底甕	口縁部	口径 (11.2)		摩滅 摩滅	褐色 5YR6/6 褐色 7.5YR6/6	1.0 ~ 2.0
135	土師器 小形丸底甕	口縁部			ヨコナデ ヨコナデ	明赤褐色 5YR5/6 明赤褐色 5YR5/6	1.0 ~ 2.0
136	土師器 門縁部				摩滅 摩滅	褐灰色 10YR5/1 灰黄褐色 10YR6/2	1.0 ~ 2.0
137	土師器 高杯	杯部	口径 (20.1)		摩滅 摩滅	にぶい黄褐色 10YR6/3 にぶい黄褐色 10YR6/4	1.0 ~ 2.0
138	土師器 高杯	脚部		3方向に円形窪かし	ハケメ ハラケズリ	にぶい黄褐色 10YR6/4 にぶい褐色 7.5YR7/4	1.0 ~ 3.0
139	土師器 高杯	脚部を欠く	口径 (14.4)		杯部内面ハケメ後ヨコナデ 脚部内面ハラケズリ	にぶい褐色 7.5YR6/4 にぶい褐色 7.5YR6/4	1.0 ~ 2.0
140	製塩土器	脚部	底径 4.5		指痕押圧・ナデ ナデ	にぶい赤褐色 2.5YR5/3 にぶい赤褐色 2.5YR5/3	1.0 ~ 2.0
141	製塩土器	杯部 ~脚部	底径 (4.0)		杯部外面平行タタキ 脚部外面指痕押圧・ナデ	にぶい黄褐色 10YR7/3 にぶい黄褐色 10YR7/3	1.0 ~ 2.0

## 4. 溝落遺跡 石器組成表(サヌカイト)

地区	石 器											計	総重量 (g)			
	石 鏃	石 匙	異形石 器	石 錐	楔形石 器	スクレイ パー	加工換 削片	使用換 削片	剥 片	砕 片	石 核			敲 石	板状剥 片	原 石
確認調査	トレンチ6	2				1	2	1	50						56	362.8
	トレンチ7	1					1	1	20						22	274.3
1 区		22	3	1	1	12	22	18	6	698	1	6	1	4	796	13,156.2
2 区		4				1	3	2	3	73		1	1	1	89	1,256.7
不 明		1													1	0.7
計		30	3	1	1	13	26	22	11	841	1	7	2	5	964	15,050.7

## 5. 溝落遺跡 石器組成表(その他の石材)

石 材	流紋岩					黒曜石		粘板岩	砂岩	花崗岩		
	石 鏃	スクレイ パー	使用換 削片	剥 片	石核・原 礫	計	総重量 (g)	剥 片	総重量 (g)	石 斧	磨石類	磨石類
確認調査	トレンチ6			2		2	1.7					
	トレンチ7			1		1	1.5					
1 区		1	1	1	31	4	38	611.4	2	5.4	1	5
2 区												
計		1	1	1	34	4	41	614.6	2	5.4	1	5

## 6. 溝落遺跡 石器計測表

番号	調査区	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	整理番号
S1	トレンチ7	石鏃	サヌカイト	(1.69)	1.24	0.30	0.5	29
S2	トレンチ6	石鏃	サヌカイト	2.52	(0.21)	0.33	0.7	30
S3	トレンチ6	石鏃	サヌカイト	2.39	2.03	0.49	1.5	31
S4	トレンチ6	スクレイパー	サヌカイト	6.04	5.96	1.07	31.3	32
	トレンチ6	加工痕剥片	サヌカイト	4.45	1.50	0.48	2.9	129
	トレンチ6	加工痕剥片	サヌカイト	2.11	1.80	0.24	1.2	130
S5	トレンチ6	使用痕剥片	サヌカイト	3.84	7.39	1.01	22.3	33
	トレンチ7	使用痕剥片	サヌカイト	2.92	3.89	0.47	5.1	131
S6	1区	石鏃	サヌカイト	0.96	1.29	0.21	0.2	7
S7	1区	石鏃	サヌカイト	2.01	1.66	0.31	0.5	3
S8	1区	石鏃	サヌカイト	2.17	1.79	0.39	1.0	2
S9	1区	石鏃	サヌカイト	2.77	2.04	0.42	1.3	1
S10	1区	石鏃	サヌカイト	(2.29)	2.50	0.35	1.2	6
S11	1区	石鏃	サヌカイト	(1.98)	2.08	0.28	0.8	5
S12	1区	石鏃	サヌカイト	2.43	(1.47)	0.24	0.7	11
S13	1区	石鏃	サヌカイト	2.07	(1.94)	0.39	1.2	23
S14	1区	石鏃	サヌカイト	2.25	1.36	0.38	0.8	10
S15	1区	石鏃	流紋岩	(2.48)	(1.75)	0.36	1.5	27
S16	1区	石鏃	サヌカイト	2.77	1.61	0.35	1.0	4
S17	1区	石鏃	サヌカイト	1.74	(1.37)	0.36	0.6	9
S18	1区	石鏃	サヌカイト	(2.11)	2.30	0.42	2.0	24
S19	1区	石鏃	サヌカイト	(2.34)	1.38	0.29	0.7	22
S20	1区	石鏃	サヌカイト	(1.60)	(1.51)	0.33	1.0	21
S21	1区	石鏃	サヌカイト	2.75	1.02	0.31	0.8	20
S22	1区	石鏃	サヌカイト	3.14	1.06	0.33	1.1	19
S23	1区	石鏃	サヌカイト	2.98	1.78	0.39	2.0	16
S24	1区	石鏃	サヌカイト	2.48	1.51	0.32	1.0	15
S25	1区	石鏃	サヌカイト	(2.58)	2.06	0.41	1.8	18
S26	1区	石鏃	サヌカイト	2.19	1.76	0.37	1.2	14
S27	1区	石鏃	サヌカイト	(1.64)	1.76	0.25	0.7	26
S28	1区	石鏃	サヌカイト	(1.84)	(1.34)	0.29	0.6	25
S29	1区	石鏃	サヌカイト	5.51	6.88	0.94	30.4	34
S30	1区	石鏃	サヌカイト	3.83	6.09	0.98	24.5	35
S31	1区	石鏃	サヌカイト	4.92	7.36	1.01	30.9	36
S32	1区	楔形石器	サヌカイト	(7.19)	2.49	0.79	11.3	37
S33	1区	石鏃	サヌカイト	4.75	1.84	0.72	5.4	56
S34	1区	楔形石器	サヌカイト	2.89	2.53	0.92	6.3	72
S35	1区	楔形石器	サヌカイト	2.76	1.94	1.00	6.2	76
S36	1区	楔形石器	サヌカイト	2.24	2.22	0.83	3.6	74
S37	1区	楔形石器	サヌカイト	3.52	1.50	0.54	3.6	73
	1区	楔形石器	サヌカイト	4.61	3.85	1.30	26.8	120
	1区	楔形石器	サヌカイト	4.20	3.24	1.00	15.2	121
	1区	楔形石器	サヌカイト	3.12	3.59	0.95	12.4	123
	1区	楔形石器	サヌカイト	3.91	2.28	0.78	6.8	124
	1区	楔形石器	サヌカイト	2.29	2.80	0.84	5.8	125
	1区	楔形石器	サヌカイト	3.85	2.49	0.74	7.9	126
	1区	楔形石器	サヌカイト	2.67	2.67	0.84	6.1	127
	1区	楔形石器	サヌカイト	2.93	1.69	0.73	3.7	128
S38	1区	スクレイパー	サヌカイト	3.41	5.99	1.04	18.1	41
S39	1区	スクレイパー	サヌカイト	4.14	6.20	1.14	18.3	62
S40	1区	スクレイパー	サヌカイト	4.32	7.92	0.72	24.3	50
S41	1区	スクレイパー	サヌカイト	4.30	8.02	0.78	21.2	43
S42	1区	スクレイパー	サヌカイト	4.89	8.76	0.69	27.1	42
S43	1区	スクレイパー	サヌカイト	3.89	8.09	1.11	35.1	51
S44	1区	スクレイパー	サヌカイト	3.66	5.02	0.98	16.2	38
S45	1区	スクレイパー	サヌカイト	3.78	4.02	0.77	12.4	39
S46	1区	スクレイパー	サヌカイト	3.09	5.28	0.70	9.3	52

( )内は残存値

出土遺物観察表

番号	調査区	器種	石材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	整理番号
S47	1区	スクレイパー	サヌカイト	3.70	5.32	1.15	20.2	53
S48	1区	スクレイパー	サヌカイト	4.19	5.75	0.62	15.7	58
S49	1区	スクレイパー	サヌカイト	5.14	3.69	0.76	18.7	61
S50	1区	スクレイパー	サヌカイト	4.14	4.49	1.09	22.4	55
S51	1区	スクレイパー	サヌカイト	4.19	7.39	1.26	33.5	66
S52	1区	スクレイパー	サヌカイト	5.48	8.07	0.86	42.2	40
S53	1区	スクレイパー	サヌカイト	2.78	(3.65)	0.54	6.8	78
S54	1区	スクレイパー	サヌカイト	1.87	4.71	0.62	5.2	47
S55	1区	スクレイパー	サヌカイト	6.59	7.12	1.44	48.0	54
S56	1区	スクレイパー	サヌカイト	5.92	10.01	1.79	95.3	44
S57	1区	スクレイパー	サヌカイト	5.67	10.48	1.78	77.6	96
S58	1区	スクレイパー	サヌカイト	7.89	11.93	1.09	102.1	95
S59	1区	スクレイパー	サヌカイト	6.63	14.83	1.98	177.8	100
S60	1区	スクレイパー	流紋岩	7.21	10.21	2.28	137.6	45
S61	1区	加工痕剥片	サヌカイト	2.69	1.88	0.55	3.1	69
S62	1区	加工痕剥片	サヌカイト	1.99	3.45	0.42	1.9	60
S63	1区	加工痕剥片	サヌカイト	1.95	4.37	0.82	9.6	77
S64	1区	加工痕剥片	サヌカイト	5.68	4.97	0.87	24.1	63
S65	1区	加工痕剥片	サヌカイト	6.93	7.32	1.15	62.6	71
S66	1区	加工痕剥片	サヌカイト	4.63	8.09	0.91	30.8	66
S67	1区	加工痕剥片	サヌカイト	8.88	1.74	1.36	18.4	57
S68	1区	加工痕剥片	サヌカイト	2.66	8.02	0.63	14.0	46
S69	1区	加工痕剥片	サヌカイト	7.65	2.50	0.86	17.5	68
S70	1区	加工痕剥片	サヌカイト	4.01	4.67	0.84	15.7	59
S71	1区	加工痕剥片	サヌカイト	4.68	4.98	0.78	17.6	75
S72	1区	加工痕剥片	サヌカイト	4.61	5.31	1.68	38.8	82
S73	1区	加工痕剥片	サヌカイト	6.63	4.46	0.81	27.0	79
S74	1区	加工痕剥片	サヌカイト	7.32	8.08	1.58	99.1	83
	1区	加工痕剥片	サヌカイト	5.04	4.36	0.94	27.8	110
	1区	加工痕剥片	サヌカイト	3.57	3.80	0.71	9.6	112
	1区	加工痕剥片	サヌカイト	2.46	1.99	0.34	1.6	113
	1区	加工痕剥片	サヌカイト	3.44	2.55	0.68	4.4	132
S75	1区	使用痕剥片	サヌカイト	3.21	5.95	1.82	23.3	81
S76	1区	使用痕剥片	サヌカイト	3.86	5.62	1.78	28.1	80
S77	1区	使用痕剥片	流紋岩	2.79	4.36	0.66	6.9	64
	1区	使用痕剥片	サヌカイト	7.17	7.04	1.66	28.0	114
	1区	使用痕剥片	サヌカイト	2.94	7.16	0.57	12.3	115
	1区	使用痕剥片	サヌカイト	3.82	3.18	0.79	10.1	117
	1区	使用痕剥片	サヌカイト	4.01	3.11	0.45	4.7	119
	1区	使用痕剥片	サヌカイト	2.58	3.41	0.83	4.6	133
S78	1区	石核	サヌカイト	8.71	6.50	2.85	104.1	87
S79	1区	石核	サヌカイト	5.15	5.56	2.18	60.1	84
S80	1区	石核	サヌカイト	5.82	7.23	2.08	94.2	85
S81	1区	石核	サヌカイト	7.95	7.32	3.02	180.4	99
S82	1区	石核	サヌカイト	8.45	4.68	1.92	90.2	86
	1区	石核	サヌカイト	7.54	4.85	2.73	120.1	109
S83	1区	敲石	サヌカイト	10.28	5.36	3.97	320.8	98
S84	1区	板状剥片	サヌカイト	9.02	14.88	1.58	265.9	102
S85	1区	板状剥片	サヌカイト	15.8	10.15	1.84	353.9	103
S86	1区	板状剥片	サヌカイト	17.75	11.20	2.08	536.0	104
S87	1区	板状剥片	サヌカイト	17.82	18.15	4.17	1360.0	105
S88	1区	厚石	サヌカイト	29.10	14.30	6.05	2860.0	106
S89	1区	石斧	粘板岩	10.94	5.18	1.51	117.3	88
S90	1区	磨石	砂岩	10.11	6.55	5.02	557.5	90
S91	1区	磨石	砂岩	(7.11)	6.39	4.38	266.2	91
S92	1区	磨石	砂岩	8.04	(6.39)	4.80	374.6	89
S93	1区	磨石	花崗岩	5.43	4.43	3.24	99.3	108
S94	1区	磨石	砂岩	10.08	8.16	3.67	431.3	93

( )内は残存値

出土遺物観察表

番号	調査区	器種	石材	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	整理番号
S 95	1区	磨石	砂岩	9.48	8.24	3.59	437.1	92
S 96	1区	円石	花崗岩	13.15	11.10	4.30	780.0	94
S 98	2区	石鏃	サヌカイト	2.75	(1.63)	0.30	0.9	28
S 99	2区	石鏃	サヌカイト	1.33	1.44	0.32	0.5	8
S 100	2区	石鏃	サヌカイト	1.68	1.33	0.26	0.4	13
S 101	2区	石鏃	サヌカイト	3.17	1.84	0.67	2.9	17
	2区	板形石鏃	サヌカイト	4.68	2.41	0.98	10.5	122
S 102	2区	スタレイバー	サヌカイト	3.81	5.34	0.80	14.5	67
S 103	2区	スタレイバー	サヌカイト	6.28	7.87	1.15	64.8	48
S 104	2区	スタレイバー	サヌカイト	5.55	8.71	1.08	57.4	49
	2区	加工痕銅片	サヌカイト	6.31	5.66	2.08	60.4	70
	2区	加工痕銅片	サヌカイト	7.07	4.26	1.42	31.6	111
	2区	使用痕銅片	サヌカイト	3.83	3.75	0.50	7.4	116
	2区	使用痕銅片	サヌカイト	4.63	2.50	0.65	8.5	118
S 105	2区	緑石	サヌカイト	7.74	7.95	3.09	219.5	97
S 106	2区	石鏃	サヌカイト	8.94	13.12	2.23	229.9	107
S 107	2区	板状銅片	サヌカイト	11.16	6.76	2.09	174.6	101
	不明	石鏃	サヌカイト	2.13	(1.34)	0.30	0.7	12

( ) 内は残存値

# 图 版

1 調査地遠景  
(中央右山裾)



2 A区全景(西から)



3 A区石列と土器溜まり  
(西から)





1 A区土器溜まり  
検出状況(南から)

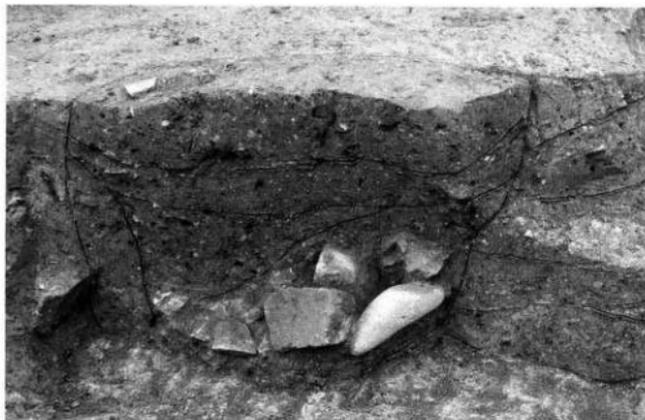


2 B区全景(南から)



3 B区土坑2断面  
(南から)

1 B区土坑3断面  
(南から)



2 B区東壁断面(西から)



3 C区遺構検出状況  
(北東から)





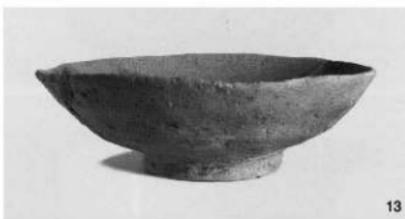
1 C区南壁断面  
(北から)

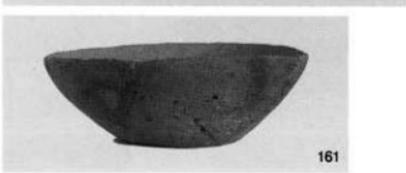
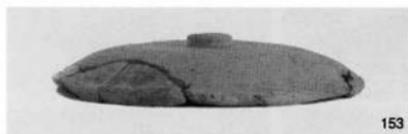


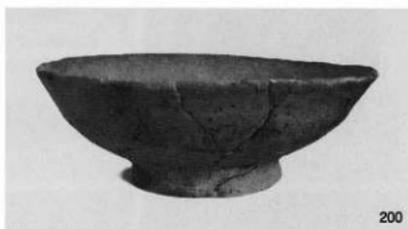
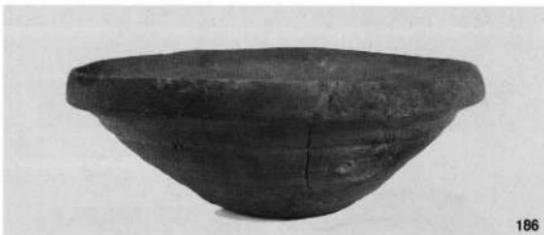
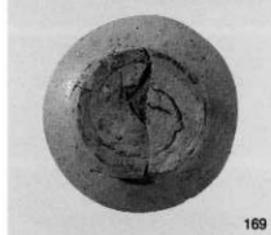
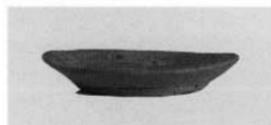
2 D区遺構検出状況  
(西から)



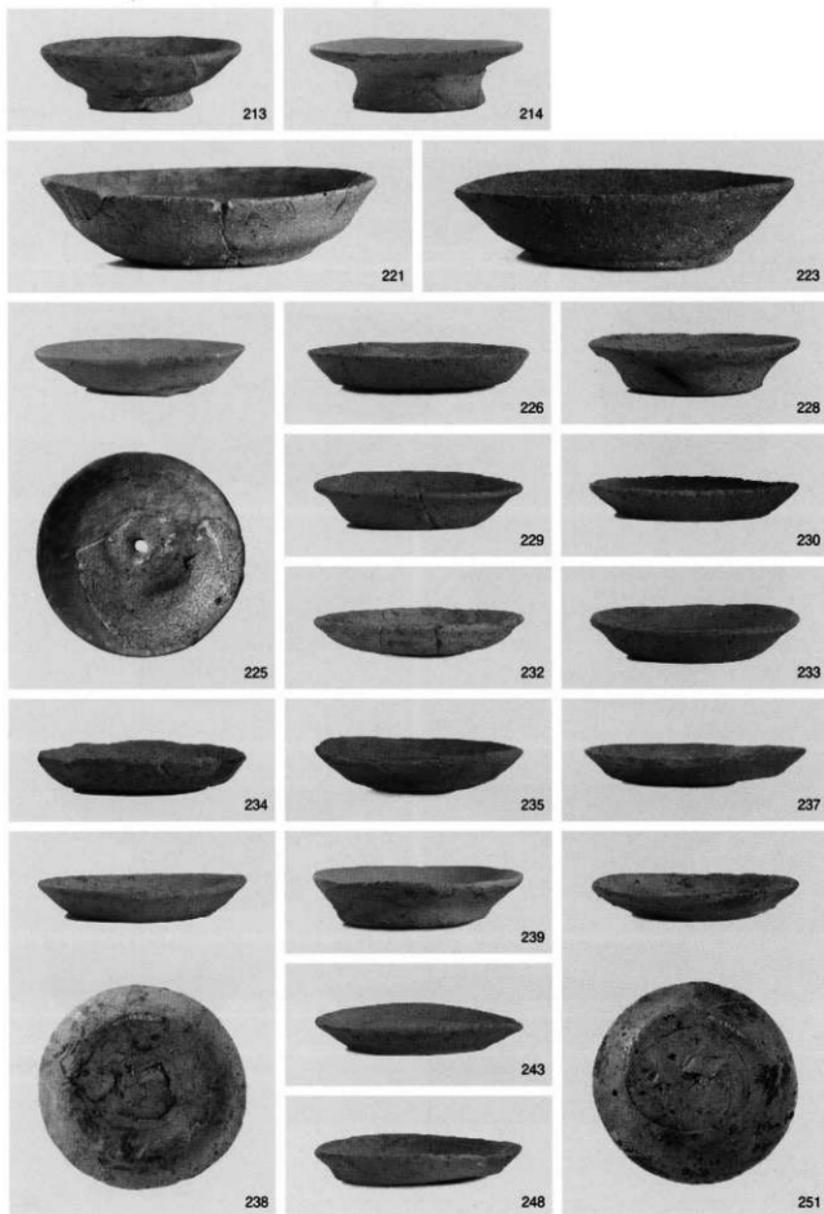
3 D区土坑検出状況

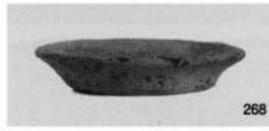
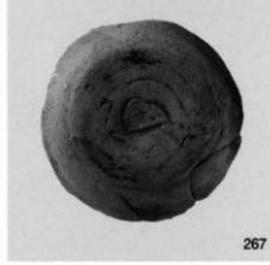






図版 8 朝原寺跡 出土遺物 (4)







1 調査区遠景(南東から)



2 調査区全景(東から)



3 溝検出状況(北から)

1 遺物出土状況

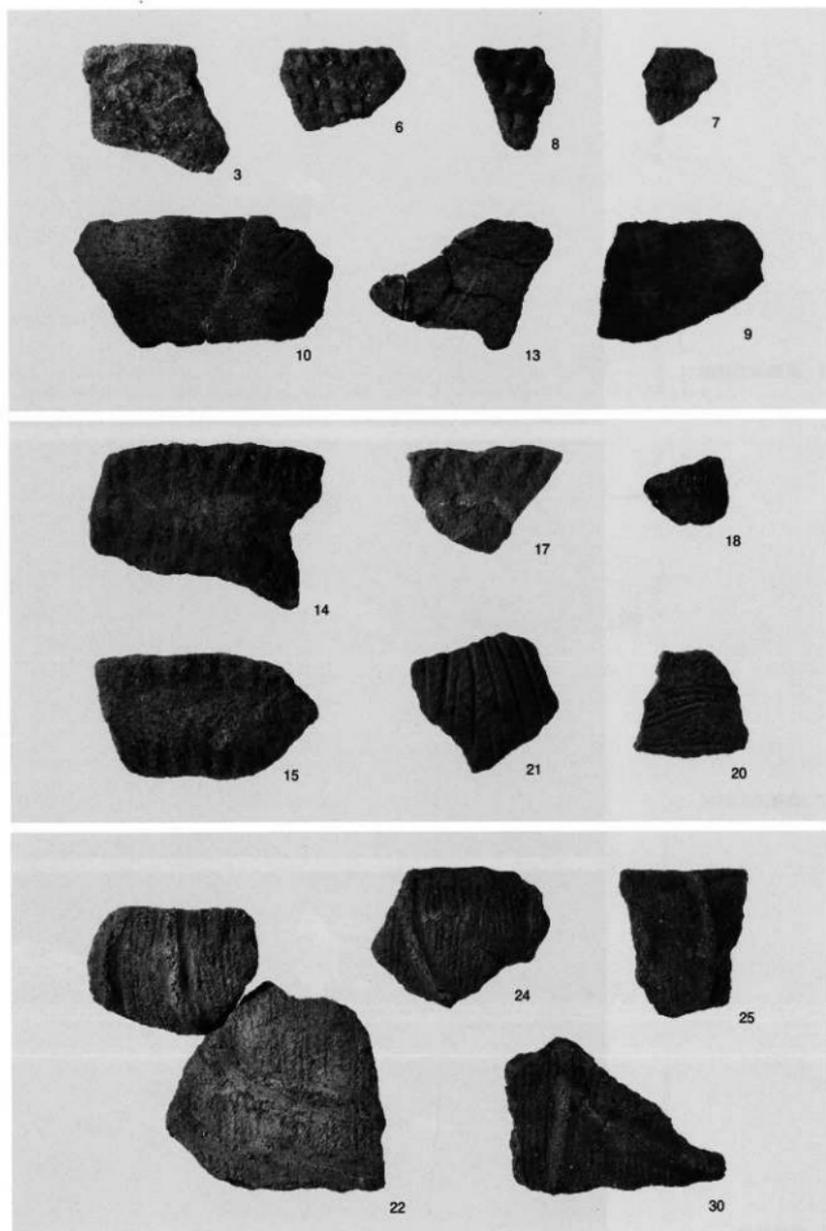


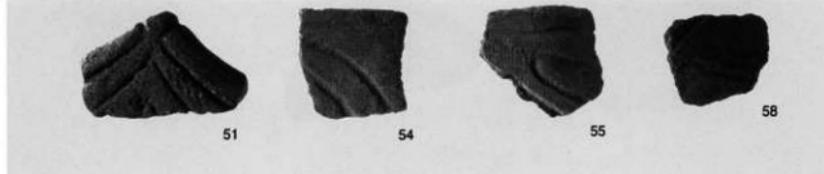
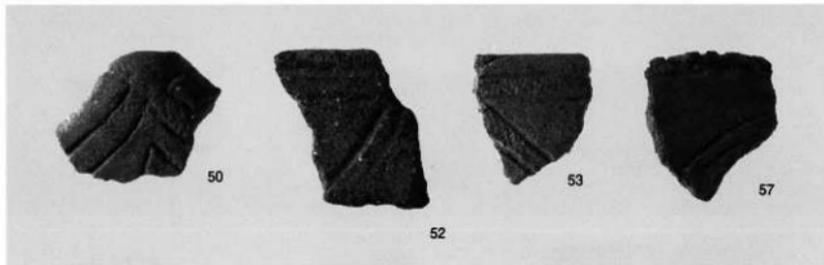
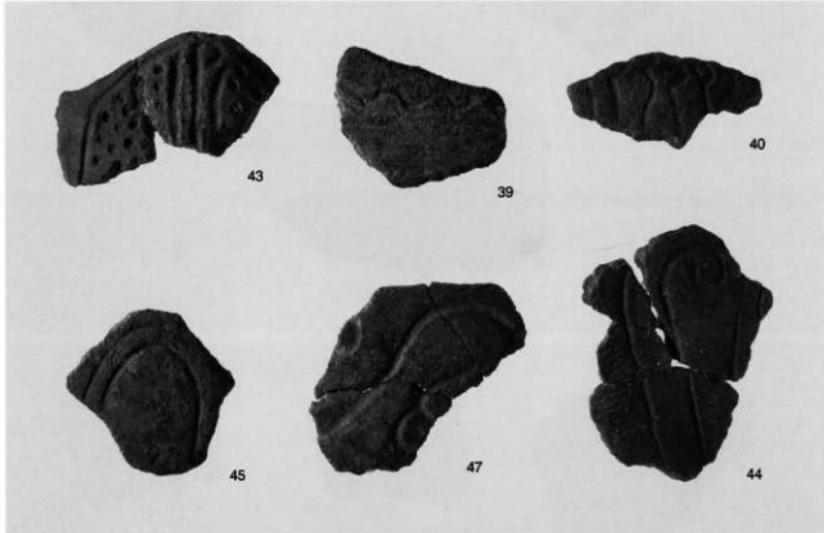
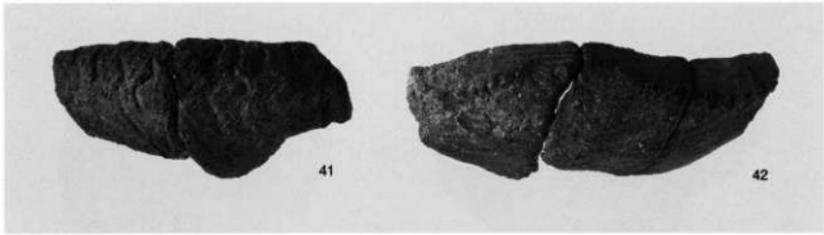
2 遺物出土状況



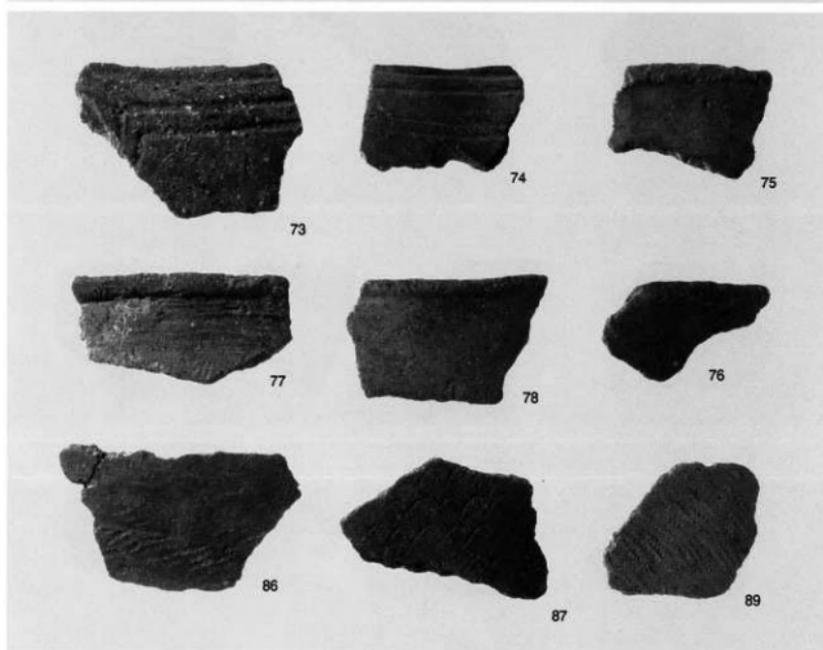
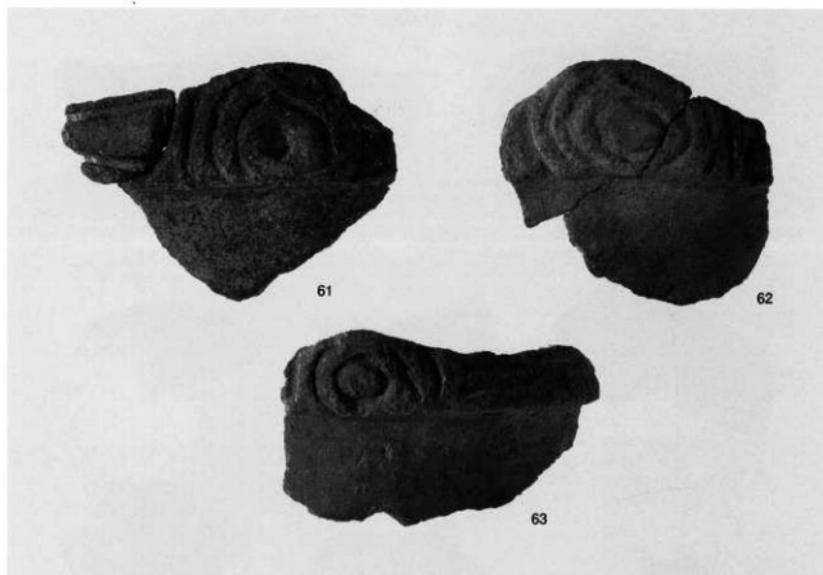
3 作業風景

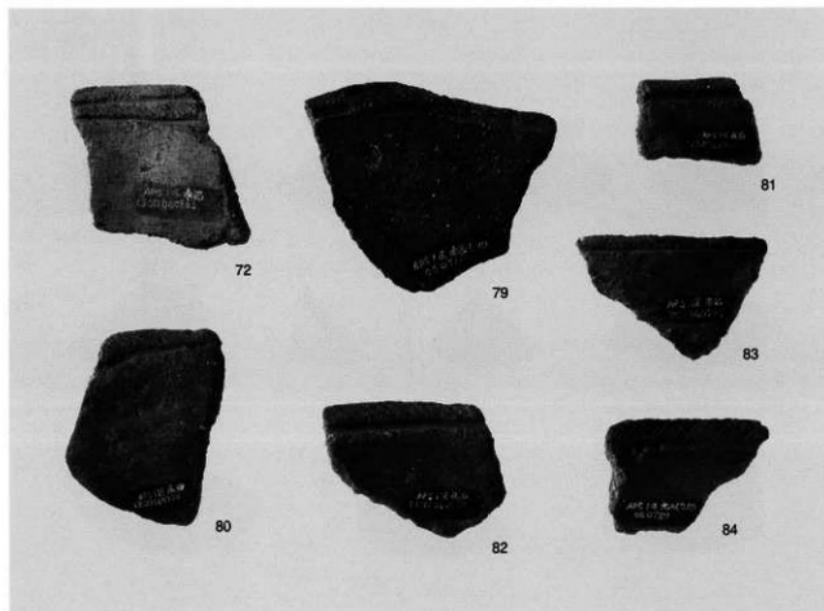
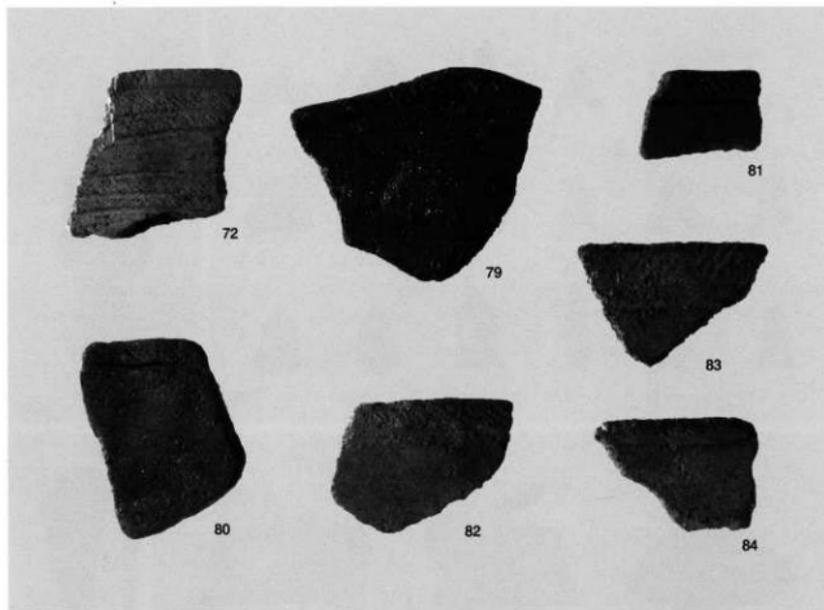




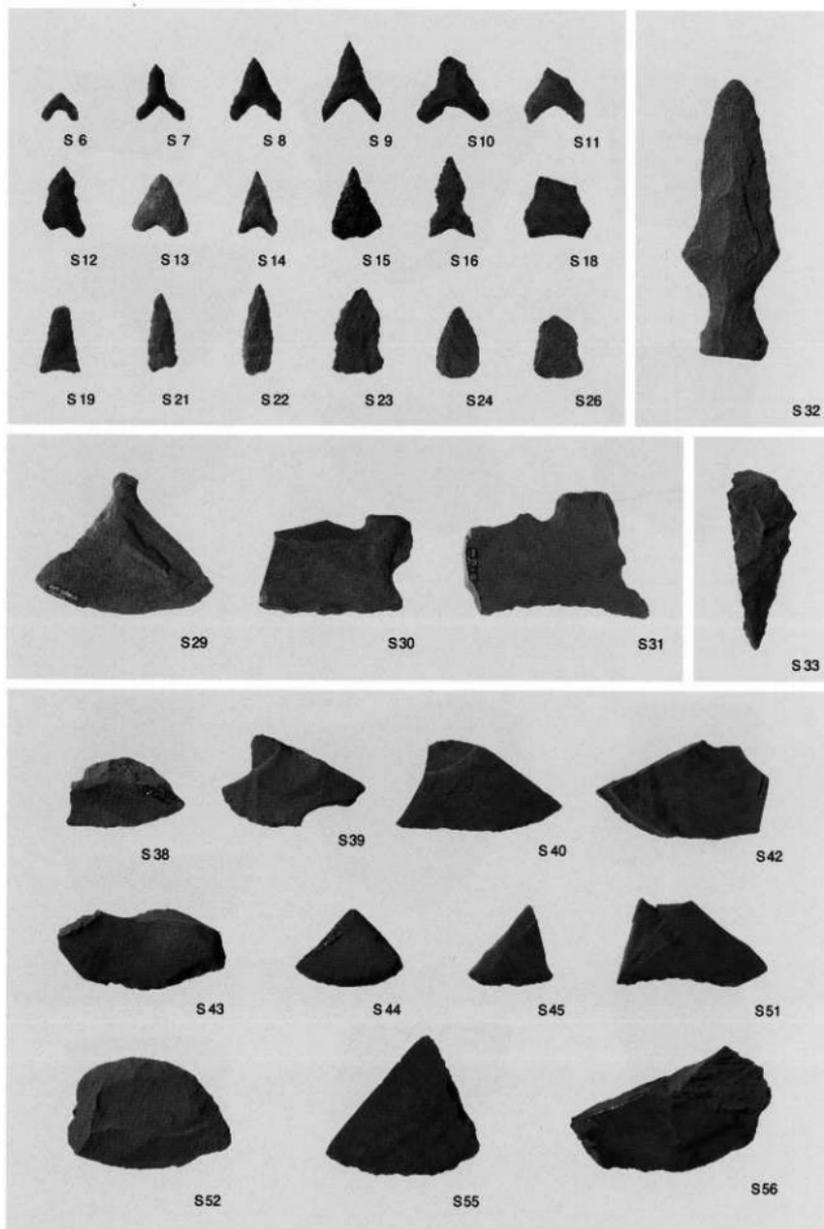


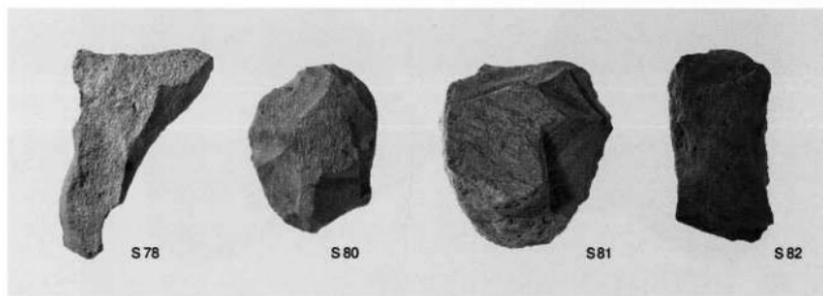
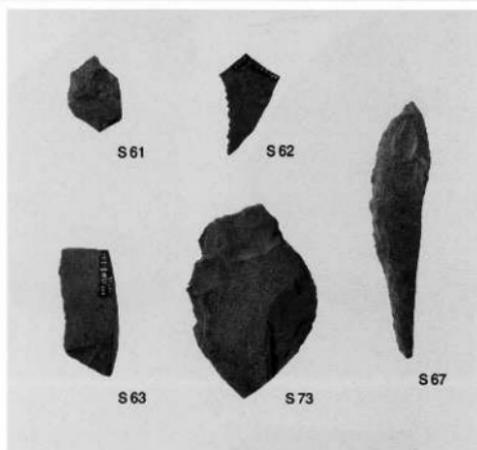
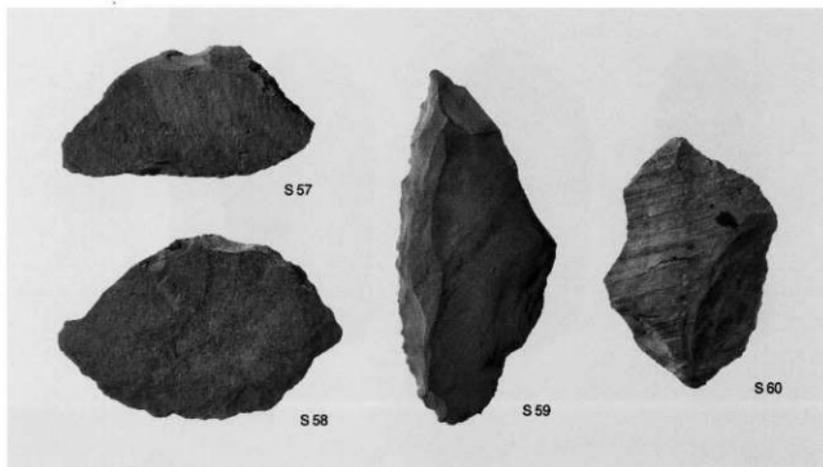
図版 14 溝落遺跡 出土遺物 (3)



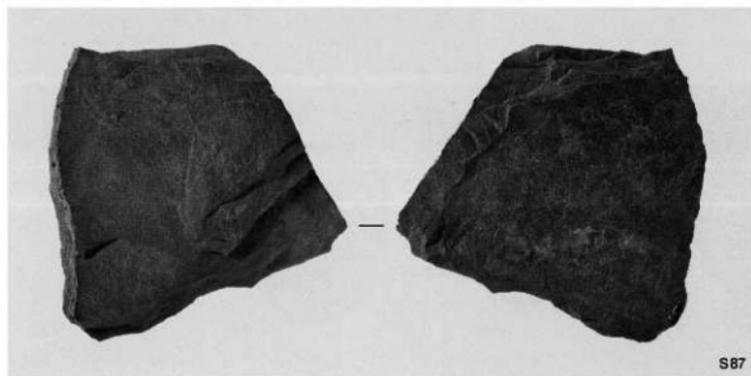
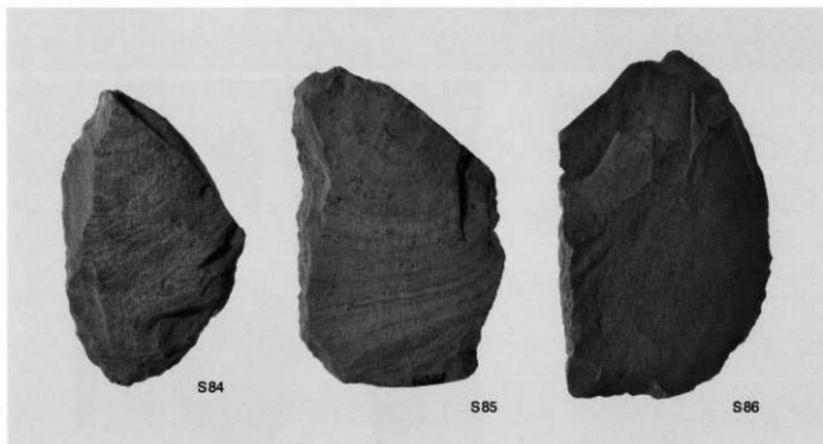
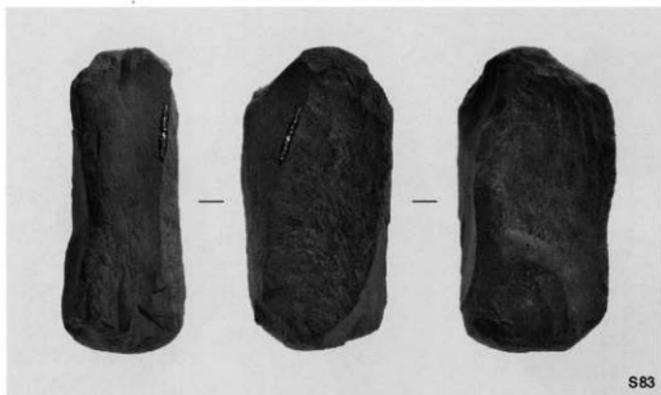


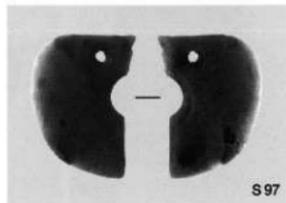
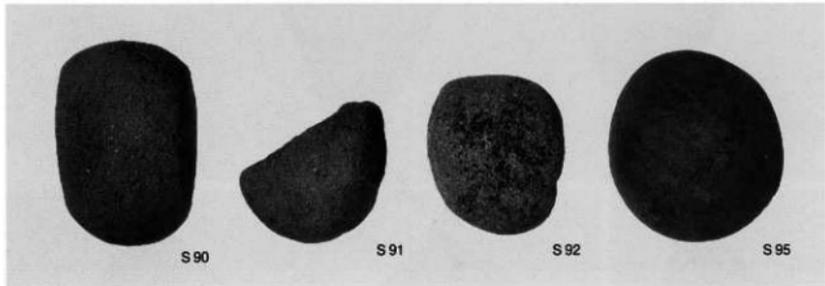
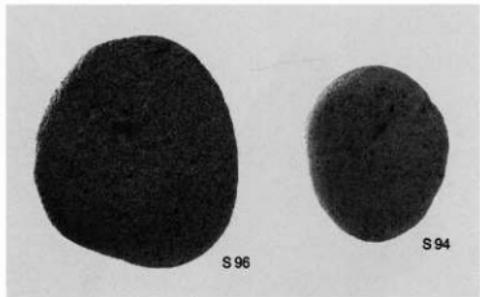
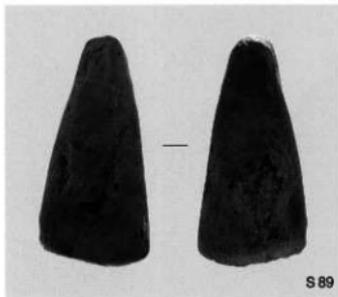
図版 16 溝落遺跡 出土遺物 (5)

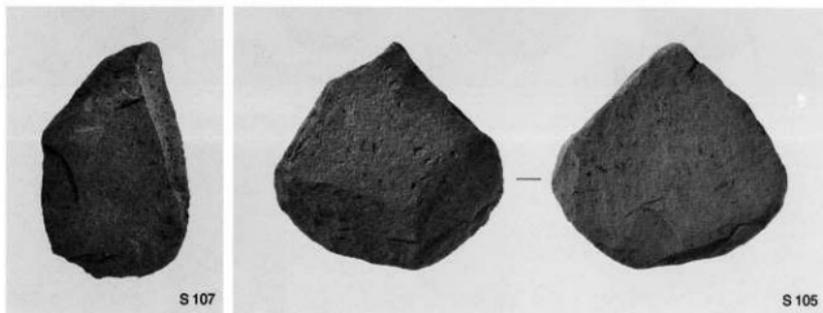
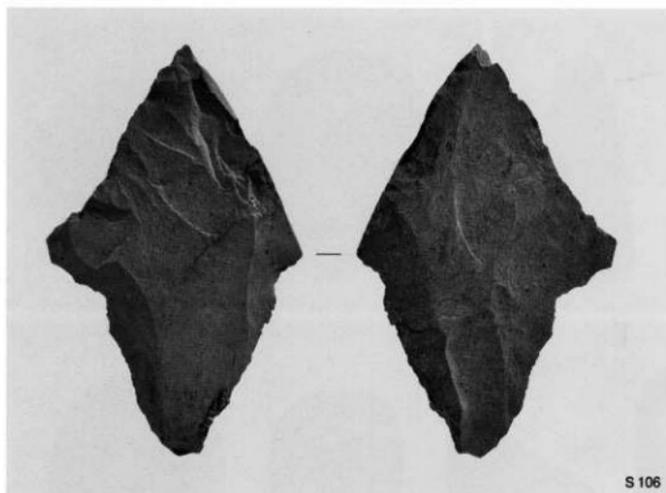
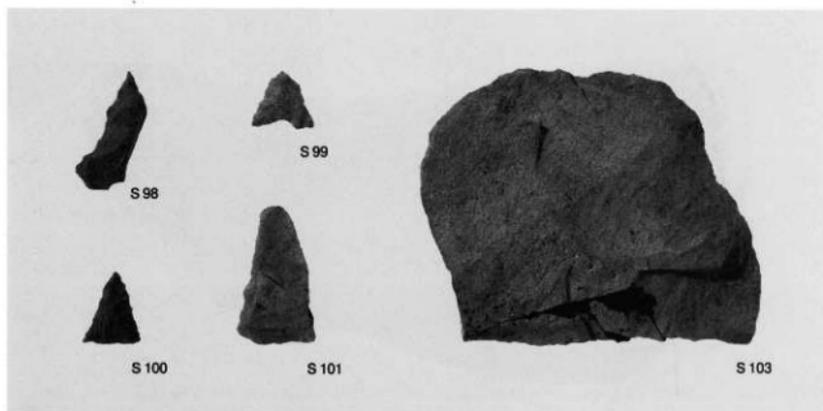




図版 18 溝落遺跡 出土遺物 (7)







## 報告書抄録

ふりがな	あきばらでらあと		みやおらいせき					
書名	朝原寺跡 2		溝落遺跡					
副書名								
巻次								
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第15集							
編著者名	鍵谷守秀・小野雅明・藤原好二							
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター							
所在地	〒712-8046 岡山県倉敷市福田町古新田940番地 Tel.086-454-0600							
発行年月日	平成25年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯東経		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
あきばらでらあと 朝原寺跡	岡山県倉敷市 浅原	33202	03-066	34° 38' 06"	133° 45' 33"	19860109 ~ 19860212	210 m <sup>2</sup>	林道建設工 事
みやおらいせき 溝落遺跡	岡山県倉敷市 見島塩生	33202	27-013	34° 29' 09"	133° 46' 16"	20060706 ~ 20060831	660 m <sup>2</sup>	消防署建設工 事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
朝原寺跡	寺院跡	平安～中世	土器溜り・土坑 掘立柱建物		土師器・瓦 須忠器			
溝落遺跡	散布地	縄文時代	溝・ピット		縄文土器・石器 球状耳飾			

#### 印刷仕様

紙 質	表紙：サンマット160kg (PP張り) 本文：書籍用紙65kg 図版：マットアート110kg
編 集	Mac OS 10.5.8 Adobe InDesign CS3 Adobe Photoshop CS3
使用フォント	モリサワ OpenType フォント (リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・ 太ゴ B101・見出ゴ MB31)
製 本	無線綴じ

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告 第15集

## 朝原寺跡2 溝落遺跡

平成25年3月31日印刷発行

発行 倉敷市教育委員会

編集 倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046 倉敷市福田町吉新田940番地

TEL.086-454-0600

The Excavation Report  
Of  
Asabara Deraato 2 Mizoochi Site

---

Volume 15

Kurashiki  
Archaeological Center

---

March 2013